

落柿舎
義仲寺

井上重厚年譜発句稿

竹内千代子 編・著



名月や我白骨の影法師

菅原重厚

落柿舎
義仲寺

井上重厚年譜
発句稿

竹内千代子編・著

目次

はじめに	i
井上重厚年譜稿	1
地域別主要俳人一覧	69
井上重厚発句稿	75
補遺／訂正	143
初句索引	144
おわりに	158
参考文献	160
図版一覧	161
付記	

はじめに

井上重厚は、元文四（一七三九）年に京都で生まれ、文化元（一八〇四）年に近江国膳所の義仲寺に没した。本稿は、元禄四（一六九一）年に松尾芭蕉が滞在した向井去来の落柿舎を明和七（一七七〇）年に再興し、芭蕉の墓所である義仲寺を看主した重厚の年譜と発句の資料集である。

重厚は、五升庵蝶夢に従って芭蕉顕彰事業を終生に渡って展開したが、彼の発句に

芭蕉忌や君がおしへの愚を守る

（寛政二年平角編『芭蕉百回忌』・寛政二年『しぐれ会』）

があり、重厚の俳諧に対する覚悟を示している。芭蕉の教えをただ一つの俳諧の誠として守るというのである。さらには、寛政十一年の『時雨会』では、「此会式をつとむる事、名利のためと存心仮にも出来らば、必今ちかひし我舌くされと九拝して曰」といい、直向きな姿勢がある。

重厚は、明和七年に去来の落柿舎を再興し、去来忌を営んだ。彼は去来の外戚、去来が養子に入った久米升顯の後妻に井上氏がいることからであるが、真摯な芭蕉顕彰を志向する蝶夢の目に留まり、その意向を受けてことである。重厚は梶井門跡に仕える身で、その縁から菊亭公の後援を得る。重厚の後を継いだ山本泰溪（太溪）は菊亭今出川家の諸大夫、辻吾同は久我家の諸大夫である。公家の後援を得ることは京都俳壇の特徴の一つで、後に展開する二条家俳諧や俳諧師の社会的地位の向上と関係しており、その先駆けである。

落柿舎の再興の意義の一つは、貞門派の影響力の強い京都俳壇にあって、蕉風を取り入れその拠り所として長く存在せしめたことである。近世期の継承は次の通りである。

- 一世 去来 — 元禄四（一六九一）年、芭蕉の『嵯峨日記』成る。
- 二世 重厚 — 明和七（一七七〇）年に落柿舎再興。去来の外戚。梶井門室に出仕、叡仁法親王および常仁法親王に出仕。
- 三世 山本泰溪（太溪） — 天明六（一七八六）年頃に継承。菊亭今出川家の諸大夫。
- 四世 辻吾同 — 文化五（一八〇八）年没。久我家の諸大夫。
- 五世 中野石外、○六世 大八木丈翠、○七世 一白。これ以後も現在まで、荒廃期を乗り越え継承されている。

二つ目の意義は、落柿舎再興により去来の追善俳諧興行を折々に主催し、京都俳壇における去来の存在を顕彰したことである。落柿舎における去来追善には次のものがある。

- ・明和八年九月十日、六十八回忌追善興行、重厚編『去来忌』刊。
- ・安永元年秋、落柿舎の庭に、去来の「柿主や」の句碑を建立、重厚編『落柿舎日記』（安永三年刊）を編む。
- ・安永三年九月十日、去来忌懷旧之俳諧興行を執行（落柿舎日記）。
- ・寛政十一年九月十日、去来百回忌追善俳諧興行、九十六回忌を取越して執行。重厚後見で、落柿舎三世の泰溪主催、泰溪編『菊のうはさ』刊。

また、京都において、秋里湘夕編『俳諧早作伝』（安永五年刊）の序文に「去来の胤」としたり、同『拾遺都名所図会』（天明七年刊）に落柿舎を取り上げたりするなどの出版によって広く知らしめたことも特筆される。このようにして、重厚は京都俳壇における芭蕉と去来の存在を顕彰したのである。

因みに、他の俳諧師が営む去来追善も援助している。次のものなどである。

- ・安永七年、筑前の香月湖桂校『旅寝論』（同年九月十日自跋）の刊行。筑前は蝶夢がしばしば訪れたが、重厚もこれを引き継いだ。同書の刊行に際しては、「嵯峨野、旅人重厚」の序文を寄せる。
- ・天明元年、深川河上庵泰里、両国閑鷗亭登舟による去来追善興行。蝶夢と加舎白雄の交際が先にあり、これを展開させ、後まで活動をすすめた。（江戸みやげ）

・天明二、同八年、陸奥における去来追善興行。（平角編『浴の日記』・夜来編『奥の紀行』）

・天明四年、深川去来庵における去来八十回忌追善俳諧興行。（泰里編『むかしざく』）

・寛政九年、去来百回忌取越を夏目成美に勧進する。（随斎句藁・菊のうはさ）

落柿舎再興の後、筑前、江戸、奥羽を中心に俳諧活動を展開し、晩年は眼疾にあっても能く義仲寺の芭蕉墓を守った。重厚は寛政五年の芭蕉百回忌を目前にして終の棲家となる義仲寺に入るが、江戸、奥羽行は、重厚にとっては俳諧活動の重要な分岐点であった。天明初め頃より江戸に赴き、そこを足掛かりとして天明二年頃と寛政二年頃に奥羽に足を延ばす。蝶夢が西国を重点的に活動した芭蕉顕彰事業を補い、展開させる意図をもつものである。しかし、寛政二年頃の奥羽行は、芭蕉顕彰を視野に入れつつも重厚の独自の俳諧活動に傾いている。その最中、芭蕉百回忌の取り越し興行において、芭蕉の

俳諧に立ち戻り、それに従う覚悟に至る。

その後の重厚は再度となる義仲寺の看主となり、芭蕉追善の時雨会、奉扇会を主催する。中でも寛政五年の芭蕉百回忌の主催は、特筆に値する大規模で、重責であった。近世期の義仲寺継承は次の通りである。重厚は二度に渡って義仲寺に入るが、寛政五年時の看主がより重責を担っていることから、これを以て八世とする。

○一世 芭蕉 ○二世 内藤丈草 ○三世 広瀬惟然 ○四世 山住興雲 ○五世 志太野坡

重厚に関連するのは、次の系譜である。

○六世 渡辺雲裡 (○重厚) ○七世 塩路沂風 (得往・方広・尔時庵) ○八世 重厚 ○九世 森谷祐昌 (斑鳩)

これ以降の近世看主は、次のとおりである。

○十世 無名庵仙風 ○十一世 釈閑斎 (椿杖斎) ○十二世 寺田礪山 (帆道、椿杖斎) ○十三世 矢島蟻洞

最晩年は眼疾により明を失い、義仲寺に於いて没する。薪水の労は江戸で入門した祐昌が執った。

重厚の俳諧は、多作で軽く仕立てるが、心を重くすることに眼目があったと言える。天明八年八月三日から九月十八日まで、夜食房夜来と『奥の紀行』に出るが、八月十五日、

句は軽く作り心は重くせよと芭蕉翁も門人も教給ふとぞ よて俳名を軽砂とよばしむ

然ば業を重く守りて軽く風雅に随ふべし

花芒人もこゝろは散安き 重厚

と、句は軽く作り心を重くすること、家業を第一として風雅に心を寄せることを説き、芭蕉を中心に据える俳諧理念が知られる。蝶夢に従い、よくその芭蕉顕彰の意義を理解し、これを助けた。蝶夢の性格に合わない放縦な部分を持つも、終生蝶夢の信頼は厚かった。寛政五年の芭蕉百回忌を前にして再び義仲寺に入る重厚に対し、蝶夢はこれを待ち受け「重厚入道も、自江戸先頃致到着候て致安堵候。」(寛政四年四月十八日付魯白宛蝶夢書簡)と言う。

俳諧史的な意義としては、貞門系、淡々系の影響力の強い京都俳壇にあって、京都蕉門の拠り所となる落柿舎を再興し、後世までも引き継ぐ基盤を確立し、芭蕉と去来を顕彰したことである。京都俳壇が蕉門の絶大な広がりを見せるのは、蝶夢や蕪村が没した後の文化、文政期以降の私の称する「芭蕉顕彰俳諧」においてである。蝶夢や重厚はその先駆けであった。

井上重厚年譜稿

凡例

一、本稿は、井上重厚について知り得る生前の年譜事項を、可能な限り収録したものである。先に発表した関西大学国文学会「國文學」第六九号（平成四年一二月）に修正、加筆を施した。

一、重厚の入集撰集の年次は、刊記によって掲出する。刊年未詳のときは、序・跋等のうちの最も後のものに拠る。また、刊年と序・跋等を含む成立年次とが、著しく異なるときは、その旨を注記する。

一、重厚の発句入集数は、再録されている場合も数え、特に区別しない。

一、重厚の一座する俳諧興行の連衆はすべて収録し、その配列は初めの一巡を示す。なお、紙数の関係で、この限りでないときは、その旨を注記する。また、それらの肩書は省略する。

一、重厚の肩書は、俳諧活動を知る貴重な資料となっているので、可能な限り収録する。

一、「○」は重厚の活動を示し、「●」は撰集入集の項目を示し、「▼」には参考項目を掲げる。

一、俳諧撰集の引用文等は、私に句読点、濁点を付し、漢字・変体仮名は原則として現在通行の字体に改める。

元文四年己未（一七三九） 一歳

○この年、京都に生れる。出生月日は未詳。

「寛政二年戊五月 近江国滋賀馬場村天台宗義仲寺人別帳」により逆算した。同帳の記載は、

【二三二】 近江国滋賀馬場村天台宗義仲寺人別帳 冊子

（表紙）「寛政二年戊五月

近江国滋賀馬場村天台宗義仲寺人別帳」

天台宗

三井寺山内光浄院末寺

近江国滋賀郡馬場村

義仲寺

一、生国山城国

ノ壺人

看主 重厚

西五十一歳

右御改二付、書上仕候、以上

寛政二年戊五月

この人別帳の「西五十一歳」によれば、寛政元年酉の年に五十一歳、逆算すると元文四年の生まれとなる。なお、この三井寺史料は、田坂英俊氏の教示及び、二〇二一年二月の天津市歴史博物館主催「芭蕉翁絵詞伝と義仲寺」展示による。

なお、寛政十二年の『時雨会』にある、

宗祇芭蕉の古ごとを習ふ

世にふるも六十三のしぐれかな 重厚

により逆算すると、元文三年生まれ。また、一説に、寛保二（一七四二）年とする。これは、宮紫暁編『夢の猪名野』に、「青蘿は几董に年ひとつまされり。我は几董に年ひとつおとりたり」とあり、これに依れば、松岡青蘿は元文五年生れ、高井几董は寛保元年生れなので、重厚は寛保二年生れとなるものである。何れも右の人別帳と異なり、本年譜では採用しない。

井上、また菅原氏。井上家は、梶井門室に代々出仕する家司で、父は、井上重長か。元禄十二年八月二十八日生、宝暦十二年三月十四日没。享年六十四歳。能登守、正五位下（地下家伝）。天明六年三月跋、重厚編『句双紙』の次の二句、

我父の束帯つけん今朝の春

天子の舞御覧といふ事を

東遊び五徳の冠者出るあらむ

これらは、重厚の環境を現した句であろう。菅原は公の時に、井上は通常に用いる。なお、井上を名乗るのは、「去来先生にしたしきゆかりあれば」（落柿舎日記）や「古去来之胤」（俳諧早作伝）とあり、これは、去来の叔父であり、一時は養子と成っていた京都の久米升顯の後妻が井上氏（京都名家墳墓録）であつたことによると推察される。母は、江戸に住し、天明七年秋頃没するものと推測される（天明七年九月五日付如毛宛白雄書簡）。しかし、この他にも次のような母の記載がある。天明八年十一月二十四日付几董句稿に、「東武井上氏老母六十算賀」とあり、逆算すると享保十四年の生まれ、重厚を十歳で産む計算となり、実母ではない。また、寛政六年一月跋『水薦茹』の重厚発句前書きに、「母を供して東へ下る」とあり、この時には善光寺詣をしたと思われる。二人の母がいたのであろう。

幼くして梶井門室に出仕し、叡仁法親王および常仁法親王に仕える。「我仕へ奉る天台の座主梶井法親王」という（奥の紀行）。壮年に及んでこれを辞すが、天明二年頃、「入道迎も宮方譜代の家来にて、今以、少扶持にても囉居申候者にて候。」（二月九日付白輅宛蝶夢書簡）とあり、この頃迄関係していたと推察される。明和七年、今出川公（菊亭家）の後援を得て、北嵯峨に落柿舎を再興し、芭蕉を慕って俳諧に専心する。これには、五升庵蝶夢の支援があつたものと推察されるが、菊亭家の後援を得たのは、梶井門室からの縁であろう。また、落柿舎の再興は、貞門派の勢力の強い京都俳壇にあつて、蕉門俳諧を広めるモニメントとしての機能をもつ。落柿舎に住まいする期間は短いが、後継者をして去来の追善俳諧を折々に執り行うのである。

俳諧は、蝶夢門。別号は、落柿舎・桃青院。蝶夢入門の頃、剃髪する。なお、蝶夢に師事する以前から山中梅応の貞門俳諧に親しんでいた。寛政四年の奉扇会（四月十二日）後、義仲寺住職・無名庵八世主となる。無名庵主は、一世芭蕉―二世文章―三世惟然―四世興雲―五世野坡―六世雲裡―（重厚）―七世塩路沂風（得往・方広・尔時庵）―八世重厚―九世森谷祐昌（斑鳩）と継承された。ただし、安永七年に「始は重厚入道、頼置申候。其後は沂風法師と申者、致看主居申候。」と

いう（正月二十八日付白輅宛蝶夢書簡）。また、三井寺史料の人別帳によれば、寛政二年頃に義仲寺に入っていることが知られ、寛政四年八月十九日付越智古声宛重厚書簡（慶照寺蔵）に「小子は又々木曾寺再住」とある。いずれにしても、二回の住職期が知られるが、後のものが重責であり、これを以て八世とする。同寺住職は、寛政十一年春、祐昌に譲るが、それ以後も没するまで義仲寺に住する。義仲寺は三井寺山内光浄院の末寺であったが、蝶夢が俳諧師持ちとした。それを重厚が再び末寺とした（たそがれ随筆）経緯がある。重厚の俳諧は「一卷を吟じ上る事重厚入道の時は句切れを不引さら／＼と心安く吟じる」（たそがれ随筆）とあり、また、重厚の俳諧理念として「句は軽く作り心は重くせよ」（奥の紀行）という。一句のびやかに軽く仕立てるのを特徴とする。

重厚は京に生まれ、近江国義仲寺に没する迄、しばしば旅に出る。中でも江戸下向は、天明元年以降同七年頃迄、さらには寛政四年の初め頃迄、旅というよりは江戸を拠点に東海道筋や奥羽行脚などに足を延ばした移住の趣が強い。天明七年に没する母の存在と、「江戸橋町二丁目」（中村伯先住所録）に住所があったことから、また、蝶夢の芭蕉顕彰活動の比較的手薄な近江国より東の地域への伝播の重責があったと推察される。

天明六年頃より目を患い、寛政十年の『時雨会』には「二つの目を失」うという。江戸下向の折、伊勢南大路の斑鳩（祐昌）が入門し、以後は薪水の労を扶けた。

文化元年一月十八日没、享年六十八歳。法名、桃青院。大津馬場墓地に葬られる。

明和七年庚寅（一七七〇） 三十二歳

○この年、北嵯峨小倉山の麓、山本村の弘源寺跡に、落柿舎を再興する。

予もとより去来先生にしたしきゆかりあれば、かの迹再興の思ひ頻にして、過し明和のはじめ菊亭殿に参りて、この順序そのよし申上げるに、いにしへをしたふ心を哀れと聞し召上給ひて、御庭の御腰掛一字を下し賜ひ、また、むかし落柿舎に額を賜ひける故内府公の旧例を思召出給ひて、落柿舎の三字を染筆し下されける。（落柿舎日記）

また、去来自筆の「柿主や」短冊（向井元仲旧蔵）と「落柿舎記」（白崎琴路旧蔵）が寄贈されている。『落柿舎日記』は安永三年に刊行された。

○この頃、蝶夢門に入り、俳諧活動が盛んになる。また、これを機に剃髪したものと推察される。

●二月初め、暮柳舎小寺後川編『梅の草紙』（同序）刊。蝶夢跋。嵯峨重厚発句一入集。

○三月十五日、粟津生蓮坊において、芭蕉堂供養一千句興行に出座する。

〔連衆〕蝶夢・魯江・ト士・巨洲・李完・汀雨・文下・応澄・智丸・青岬・呼見・用舟・一瘤・布舟・鯉丈・荷淨・附尾・後川・花竹・紅羽・土龍・野風・可磨・此行・梧泉・麦雨・只言・琶洌・寸馬・三敲・宜石・鯉風・青雨・呉夕・山李・度水・五禽・巴陵・吾東・飛兎・菊二・如毛・耳考・泰勇・雨麦・龜石・如滴・胡熊・木卯・重厚・橘次・松篁。（施主名録発句集）

○六月、東へ下る。「六月や富士の白きも岩手水」の句を得る。（一人一首短冊篇）

●十月十二日、蝶夢編『施主名録発句集』刊。嵯峨重厚発句一、同年三月十五日の粟津生蓮坊興行入集。

○同、義仲寺時雨会。蝶夢編『しぐれ会』（同日興行）刊。文通にて、嵯峨重厚発句一初入集。但し、時雨会は欠席。

○十二月、歳暮吟「年守るやことに藁家はわらふとん」。（梅応明和八年歳旦帖）

明和八年辛卯（一七七二） 三十三歳

○一月、歳旦吟「書ぞめや嵯峨に譲りのすゞりいし」。（梅応明和八年歳旦帖）

○同、梅応編〔明和八年歳旦帖〕刊。発句三（立句二）入集、うち一句は「落柿舎」とする。次の連句五入集。

1 梅応・重厚・公木の三ツ物。

2 公木・梅応・重厚の三ツ物。

3 重厚・公木・梅応の三ツ物。

4 一句一順歌仙。

〔連衆〕西翁堂・猿尾・幸山・吟好・重厚・玉水・花尺・百一・花月・柳風・湖柳・都水・林鳥・一重・吟水・窓枝・和道・柳雫・露光・吟山・暁山・一兎・桂歌・一双・詠石・百童・常志・完道・雉雪・竹声・如節・可計・清山・百丈・公木・執筆。

5 五十員。〔連衆〕完道・花月・雉雪・重厚・湖柳・吟山・窓枝・梅心・執筆。

なお、右からは、蝶夢門に入る以前の俳諧活動が知られる。梅心は、貞門系点者であり、重厚の俳諧の出発点は貞門であったことが知られる。

▼三月十九日、時雨庵祐阿坊声々が落柿舎を訪れる。（同年八月奥 旅ほうご）

○八月四日、夜半亭社中の高德院発句会に出座し、「名月・案山子・陶師（みせ消ち）」の兼題の発句あり。几董と同座しており、彼との交際では、最も早い時期のもの。（高德院発句会）

○九月十日、重厚編『去来忌』（同日興行）刊。蝶夢序。落柿舎にて、去来六十八回忌追善興行を執行。「落のこる柿をむしりて手向かな」以下九吟歌仙成る。

〔連衆〕重厚・蝶夢・文下・吾東・七哦・秋鳥・此行・紅羽・沂風。

○秋、蝶夢を訪ねた加舎白雄に对面する。（俳人白雄）

▼同、白雄が落柿舎を訪れるも、重厚は留守。（白雄贈答）

●同、佐々木泉明編『一人一首短冊篇』（同序）刊。嵯峨重厚発句一入集。▼梅心入集。

○十月八日、岡崎五升庵興行に一座し、題を探る。

〔連衆〕鯉風・蝶夢・重厚・用舟・紅羽・文下・此行・七哦・附尾・可磨・沂風・吾東・秋鳥・執筆。（しぐれ会）

○十月十二日、義仲寺時雨会。同会に一座し、題を探る。

〔連衆〕松笙・蝶夢・魯江・巨洲・汀雨・胡熊・智丸・青岬・鯉文・菊二・応澄・泰勇・芦鳳・吾東・一瘤・山李・従古・重厚・桃牛・文下・執筆。

蝶夢編『しぐれ会』（同日興行）刊。発句二、連句二入集。このうち、発句一・連句一は、同年十月八日の五升庵興行。

●この年、冬芽・歌江編『まつの蟬』（同序）刊。洛陽重厚発句一入集。

安永元年（明和九年十一月十六日改元）壬辰（一七七二） 三十四歳

●春、湖白庵諸九編『秋かぜの記』（同序）刊。卷末に嵯峨重厚発句一入集。

○八月三日、唯泉寺において、正秀五十回忌懷旧之俳諧興行に出座する。

〔連衆〕蝶夢・魯江・智丸・青岬・鰐丈・巨洲・松筥・泰勇・重厚。
(しぐれ会)

●八月、兩人編『秋しぐれ』(同序)刊。文通にて発句一入集。

○秋、落柿舎の庭に、去來の句碑を建立する。句碑の表には、
去來子

柿主や木ずゑはちかきあらし山

正五位下菅原某男重厚立之

【図1】

とある。規慶は『落柿舎日記』の序文に、「その入道その人にゆかりあるにて、その碑を建て、はやふたとせを経るとぞ。」という。安永三年十二月八日重厚序。

○十月八日、五升庵興行に一座し、題を探る。

〔連衆〕此行・蝶夢・吾東・沂風・文下・秋鳥・七哦・紅羽・吾禽・三敲・附尾・用舟・鰐風・重厚・可磨・簀山・麦雨・只言。(しぐれ会)

▼十月十二日、蝶夢は国分山の幻住庵跡に石碑を建立する。(しぐれ会)

○同、国分山に登り、俳諧興行に出座する。

〔連衆〕蝶夢・泰勇・重厚・智丸・鰐丈・魯江・青岬・巨洲・松筥。(しぐれ会)

○同、義仲寺時雨会。同会に一座し、題を探る。

〔連衆〕智丸・蝶夢・冬柱・松筥・青岬・巨洲・鰐丈・汀雨・応澄・度水・胡熊・文下・魯江・泰勇・重厚・里秋・胡竹・執筆。(しぐれ会)

蝶夢編『しぐれ会』(同日興行)刊。嵯峨重厚発句三入集。連句四入集、このうち三連句は、同年八月三日唯泉寺興行、十月八日五升庵興行、十月十二日国分山興行。

●冬、文雄編『折つゝじ』(同奥)刊。但し、明和元年閏十二月一日序。洛重厚発句一入集。



図1 重厚建去來句碑

●同、親純・季杖編『墨のにほひ』刊。六雅追善集。蝶夢跋。洛重厚発句一入集。

安永二年癸巳（一七七三） 三十五歳

○二月頃、宮津の木下百尾よりの重厚、蓑虫庵桐雨宛書簡あり。（二月二十三日付百尾宛蝶夢書簡）

○三月、蝶夢写しの『三冊子』を、落柿舎にて筆写し終える。【図2・3】

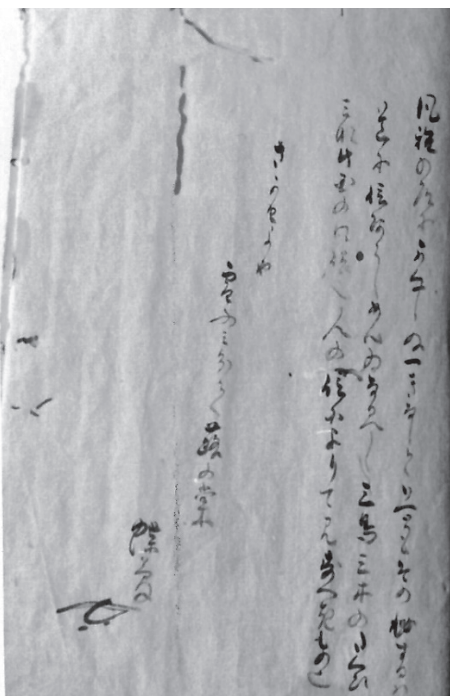


図2 重厚写『三冊子』（蝶夢の部分）

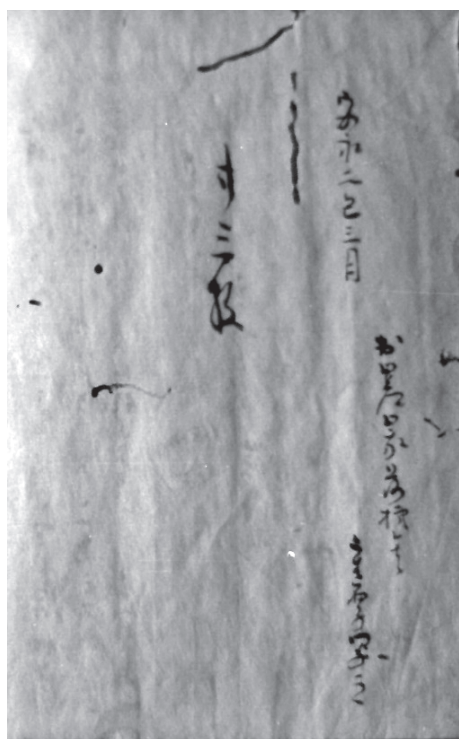


図3 重厚写『三冊子』

○閏三月、五升庵にて「虫干の」の歌仙なる。

〔連衆〕蝶夢・湖嵐・重厚・梅珠。（文化七年刊・しものはな、蝶夢全集続）。

○閏三月推定（蝶夢全集・年譜）、嵯峨落柿舎を訪れた、蝶夢・吾東・沂風と共に、七老亭に遊ぶ。ここより大井川を行く、管絃の舟・詩歌を詠む舟・網を打つ舟・酒宴の舟を見て、各々興じる。また、各々に桜の発句成る。（七老亭之賦）。なお、吾東は、安永八年十一月四日没（蝶夢全集・年譜）。

この頃、蝶夢から亀山の七老亭の桜の句など三句を記す短信を受け取る（天明二年三月十日推定重厚宛蝶夢書簡）。但し、年次については、安永八年以前の可能性もある。

○四月十二日、義仲寺奉扇会に出座、当日探題二句を詠む。鳴海の下郷蝶羅が、高野山、奈良、大坂、兵庫、京、近江へ旅行した折、蝶夢を尋ねて奉扇会の主催を約した。

〔連衆〕蝶羅・蝶夢・魯江・青岬・汀雨・度水・巨洲・松篁・冬柱・サガ重厚・羅川・山李（執筆）・瓦全・荷浄・涼秀・素郷・子鳳・泰男・些芳・浮流・文下・可磨。（続たびまくら）

▼五月二十五日、麦籬亭禹柳が山本の里、落柿舎を訪れるも、重厚は留守。（伊勢紀行）

○十月八日、五升庵興行に一座し、題を探る。

〔連衆〕吾東・蝶夢・箕山・秋鳥・麦宇・七哦・沂風・瓦全・用舟・紅羽・鯉風・附尾・三敲・此行・重厚・可磨。（しぐれ会）

○十月十二日、義仲寺時雨会。同会に出座し、題を探る。

〔連衆〕蝶夢・魯江・汀雨・度水・応澄・松篁・冬柱・青岬。菊二・巨洲・鯉遊・荷浄・胡熊・吾東・沂風・重厚・附尾・塘雨・桐雨・冬李・長英・旧国・巴文・西湖・巴状・浮流・執筆。（しぐれ会）

魯江編『しぐれ会』（同日興行）刊。嵯峨重厚発句三、連句二入集。このうち、発句一・連句一は、同年十月八日五升庵興行。▼冬、夏目成美は、重厚が東行の折、重厚編『代枕集』に序文を寄せる。一説に、天明五年十月中旬とも。（四山藁）

安永三年甲午（一七七四） 三十六歳

○一月、百尾よりの重厚宛書簡あり（正月十五日付百尾宛蝶夢書簡）。

●三月、蝶夢編『類題発句集』刊。但し、明和七年十二月序。京重厚発句二入集。

○九月十日、落柿舎において、去来忌懷旧之俳諧興行を執行。「柿買に問れてかたるむかしかな」以下八吟歌仙成る。

〔連衆〕重厚・規慶・蝶夢・用舟・吾東・鯉風・瓦全・執筆。（落柿舎日記）

●九月二十日、白雲亭宜石編『手向の聲』（同日興行）刊。洛西嵯峨重厚発句一入集。

○十二月八日、重厚編『落柿舎日記』（同日自序）刊。規慶序。井筒屋庄兵衛・橘屋治兵衛版。同年九月十日落柿舎興行入集。

安永四年乙未（一七七五） 三十七歳

○一月、歳旦吟「蛤の喰しめて居る余寒かな」。（机墨庵文誰編安永四乙未歳旦）

●同、文誰編「安永四乙未歳旦」（同奥）刊。サガ重厚歳旦吟一入集。

○一月十五日、関本巨石宛に新年の挨拶書簡を認める。発句二を寄せ、うち一句は「曲ものも松の嗅や木の芽漬」（正月十五日付関本巨石宛重厚書簡、神風館入楚編安永四年歳旦帖）。【図4】

●一月、入楚編歳旦帖刊。サガ重厚発句一入集、「曲ものも松の嗅や木の芽漬」。

●四月、松露庵三世烏明編『既七とせ』（同序）刊。発句一入集。▼蝶夢入集。

○八月十三日、琴之編『笠の露』（同日興行）刊。文下追善集。発句二、九十九亭興行一入集。

〔連衆〕蝶夢・琴之・子鳳・素流・吟風・賦山・文鳥・百芽・吾東・七哦・秋鳥・麦宇・用舟・瓦全・重厚・三敲・紅羽・附尾・鯉風・可磨・桐雨・簀山・塘雨・宜甫・素郷・菊二・似水・冬柱・耳考・鶴之。

●秋、嵐山編『猿利口』（同跋）刊。但し、安永元年序。発句一入集。

○十月十二日、義仲寺時雨会。同会に出座し、題を採る。

〔連衆〕鯉遊・蝶夢・魯江・鯉丈・荷浄・旧梧・巨洲・巨熊・青岬・冬柱・菊二・松笙・汀雨・胡熊・度水・雨来・応澄・吾東・祇川・重厚・都完・疑山。（しぐれ会）蝶夢編『しぐれ会』（同日興行）刊。嵯峨重厚発句一・連句一入集。

●十一月、春艸舎青雨編『いしなとり』刊。京重厚発句一入集。

○冬、五峰庵櫟原君里に依って、芭蕉の「葱しろく」の句碑が建立され、美濃大垣に出向く。「雪霜に道わけそめんしろね塚」の句を得る。（しろね塚）

翌年の三月、君里編『しろね塚』（同序）刊。芭蕉句碑建立記念集。嵯峨重厚発句一入集。

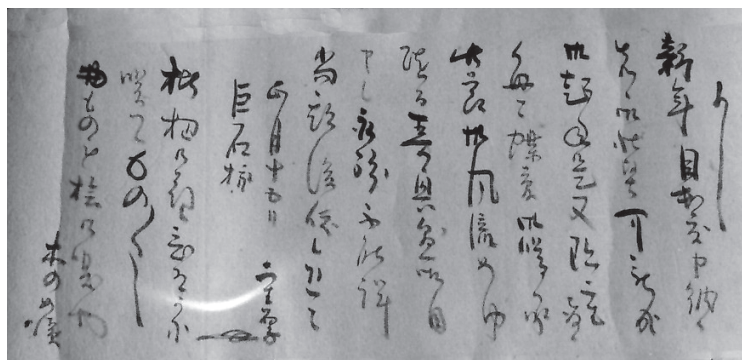


図4 巨石宛重厚書簡

安永五年丙申（二七七六） 三十八歳

- 一月、噓居士一音編『さびしをり』刊。落柿舎重厚発句一入集。
- ▼四月十一日、土橋坊和因が嵯峨に遊び、落柿舎を訪うも、「知人稀にして終に其在所を知らずなりぬ」という。（嵯峨日記）
- 五月六日、下里（郷）蝶羅の死に際し、追悼句を詠む（蚊幃内）。
- 六月、大島蓼太編『俳講蓮華会集』（同序）刊。嵯峨落柿舎重厚発句一入集。▼蝶夢入集。
- 九月、秋里湘夕編『俳諧早作伝』刊。跋文を寄せる。それには、次の如くある。
安永五申季／故去来之胤／平安／落柿舎／去来／向井氏（印）
- 十月十二日、義仲寺時雨会。蝶夢編『しぐれ会』（同日興行）刊。文通にて嵯峨重厚発句一入集。但し、時雨会は欠席。
- ▼十二月二十八日、几董と江森月居とが、嵯峨野の落柿舎に遊ぶ空想の句を得る。（几董丙申之句帖）

安永六年丁酉（二七七七） 三十九歳

- 春、吉野に遊び、「よし野にて 立枯のさくらおしみて山めぐり」の句を得る。（芳野行）
- 三月、風葉編『芳野行』（同奥）刊。サガ重厚発句一入集。
- 四月、巨州編『桐の影』（同端作り）刊。洛陽重厚発句一入集。
- 夏頃、中国筋に逗留の諸九尼に会し、しばらく行動を共にして、宮島に遊ぶ。この折、諸九尼は、「今の落柿舎のぬしとともに、つくしへまかりける時、安芸のいつきしまにて」遊ぶという。（諸九尼句集）
- 六月二十四日、長崎の勝木枕山に宛てた諸九尼の手紙を托される。（同日付枕山宛諸九尼書簡）
- 七月初め、筑前植木に到着。香月月湖・湖桂親子のもとに逗留する。（八月六日付浮流宛蝶夢書簡）
- この頃、平野屋蝶醉を見舞う。（前項に同）
- 同、筑前長崎の枕山宛の諸九尼書簡を届ける。
- 同、長崎の佐藤魯白をたずねるか（八月二十五日・九月十六日付魯白宛蝶夢書簡）。

○同、筑前篠栗の平井其両亭を訪れる。其両編『菅の小蓑集』の序文を「嵯峨野重厚」記す。但し、刊行は天明年間（四年か）のことであろう。

後、其両編『菅の小蓑集』刊。序文、発句一入集。

●七月、知足斎学海編『蚊帳内』（同執筆）刊。但し、同五年秋序。安永五年五月六日に没する蝶羅追善集。嵯峨落柿舎重厚、追悼の発句一入集。

●九月、谷神堂長山編『俳諧餅黄鳥』（同序）刊。嵯峨重厚発句一入集。

○十月十二日、義仲寺時雨会。同会に出座し、題を探る。

〔連衆〕汀雨・蝶夢・応澄・度水・胡熊・魯江・松笙・鯉丈・青岬・露州・班布・鯉遊・冬柱・菊一・巨洲・荷浄・重厚・白魚・梅下・塘雨・呉琴・槿馬・露光・雨簾。（しぐれ会）

蝶夢編『しぐれ会』（同日興行）刊。嵯峨重厚発句一、連句一入集。

○この頃、義仲寺の管理を蝶夢が引き受け、住職には初め重厚、安永七もしくは九年には沂風に託される。（蝶夢全集・年譜、十二月六日付百尾宛蝶夢書簡）

安永七年戊戌（二七七八） 四十歳

○一月、魯白よりの書簡が蝶夢からある（正月二十三日付魯白宛蝶夢書簡）。

○五月、魯白よりの書簡が蝶夢からある（五月十六日付魯白宛蝶夢書簡）。

○五月頃、「伊豫山のほかに白し五月晴れ」の句を得る。中国筋に遊ぶ。（嶋塚集）

○九月十日、去来著、湖桂校『旅寝論』（同日跋）刊。「嵯峨野・旅人重厚」序文。旅は安永六年七月始めと推察される。

○九月、重厚、長者坊浮流法師と姨捨山の月を楽しむ。木曾路を辿り、九月九日、蝶夢庵を訪ねる（蝶夢全集）。この折、重厚と浮流は遠江国浜松の永田白輅のもとを訪ねるか（八月二十三日付白輅宛蝶夢書簡）。

○九月、魯白より重厚、浮流宛の書簡あり、蝶夢からは重厚の更科月見行の帰国を告げる（九月二十六日付魯白宛蝶夢書簡）。

●九月、一幹編『雪の味』（同序）刊。蓬戸亭蘭里追善集。蝶夢序。洛陽重厚発句一入集。

▼この年、沂風第七世無名庵主となるか。又は同九年か。「始は重厚入道、頼置申候。其後は沂風法師と申者、致看主居申候。」という。(正月二十八日付白露宛蝶夢書簡)

○十月十二日、義仲寺時雨会。同会に出座し、題を探る。

〔連衆〕松笙・沂風・雨篁・鯉丈・蔭州・胡熊・度水・汀雨・応澄・雨橋・荷淨・五浮・得皮・重厚・白魚・故角・季人・露光・立卜・唾玉・聴雨・師由・里秋・呉琴・芦水・賈友・振鷺・如藍・騏道・岐堂・蝶夢・執筆。(しぐれ会)

沂風編『しぐれ会』(同日興行)刊。嵯峨重厚発句一、連句一入集。

安永八年己亥(一七七九) 四十一歳

○一月十八日、伊賀上野の蓑虫庵における俳諧興行に一座する。

〔連衆〕桐雨・浮流・冬李・槐主・長英・呉川・杜音・曾秋・松舎・朝雨・友固・魚白・沂風・一舟・賣雪・楚江・重厚・瓦二・素風・執筆。(雪の五歌仙)

○一月、魯白よりの重厚、浮流宛の書簡が蝶夢からある(正月十九日付魯白宛蝶夢書簡)。

○同、坐秋よりの書簡が蝶夢からある(正月二十八日付坐秋宛蝶夢書簡)。

●三月中旬、一桃舎野牛編『嶋塚集』(同序)刊。京・洛重厚発句二入集。このうち一は、安永六年夏、山陽筋に遊んだ句。

○三月、古声編『山里塚』(同序)刊。蝶夢序。於鴨川水楼連句一入集(発句・脇句は夏)。

〔連衆〕古声・重厚・髭風・用舟・蝶夢・菊二・鯉遊・雨篁・蝶醉・瓦全・泰里。

○五月、魯白よりの重厚、浮流宛の書簡が蝶夢からある(安永八年推定五月六日付魯白宛蝶夢書簡)。

○六月五日、備後田房の古声に宛て書簡を認める。書簡中「一別以来御遠々敷、先以向暑之砌、めで度御帰国」とあり、三月に鴨川で連句を卷いた後、備後に帰国したことを記す(六月五日付古声宛重厚書簡)。なお、同書簡に添えた「傘をほしわすれけり夏の月」の句は、安永九年二月序『俳諧くらみ坂』に出、同八年夏の成立と推察される。【図5】

●八月、蒼浪観有中編『風の蟬』(同序)刊。幻住庵祇川追善集。蝶夢跋。京重厚発句二入集。

○九月、重厚は魯白方に逗留、「重厚入道致逗留申候趣、息才の様子被仰下、致安堵候」と無事を蝶夢に知らせる(安永八

年又は九年九月二十三日付魯白宛蝶夢書簡)。「重厚法師に謁して／秋涼し嵯峨の嘶を聞にさへ 魯白」(五橋編『磯の藻屑』)。

○十月十二日、義仲寺時雨会。蝶夢編『しぐれ会』(同日興行)刊。文通にて嵯峨重厚発句一入集。時雨会は欠席し、筑紫に遊ぶ。「筑紫にありて会式を思ふ／時雨会の空はこゝにも西のはて 嵯峨重厚」(しぐれ会)。

○この年、旅中に病となり播州に滞在する。「重厚入道義も御尋被下候。去年旅中病氣にて播州に居申候て、早春致発足候様に申候。追付御逢可被成候」(安永九年正月六日付魯白宛蝶夢書簡)。

安永九年庚子(二七八〇) 四十二歳

○早春、九州に向けて発足する。「早春致発足候様に申候。追付御逢可被成候」(正月六日付魯白宛蝶夢書簡)。

●二月七日、五老峰故貝編『俳諧くらみ坂』(同日興行)刊。蓮二翁五十回忌追善集。発句一入集。▼蝶夢入集。

●春、白雄編『春秋稿第一篇』(同序)刊。京嵯峨重厚発句一入集。

○五月、六月、この頃に長崎に赴く。安永九年五月素郷宛蝶夢書簡に、「重厚入道(略)是も此節長崎近く可参候」とあり、同年六月十二日素郷宛蝶夢書簡に「重厚入道いまだ不帰候」とある。

●六月下旬、杏盧編『続寒菊』(同奥)刊。発句一入集。▼蝶夢入集。

▼十月十二日、義仲寺時雨会。沂風編『しぐれ会』(同日興行)刊。但し、時雨会は欠席・欠詠。

○十一月五日、京都三本木にて、飛騨高山其川の招きで「水仙や」歌仙を巻く。

〔連衆〕其川・蝶夢・浮流・瓦全・沂風・重厚・歌夕・滄浪。(蝶夢全集続・慶応大三つの歌仙)

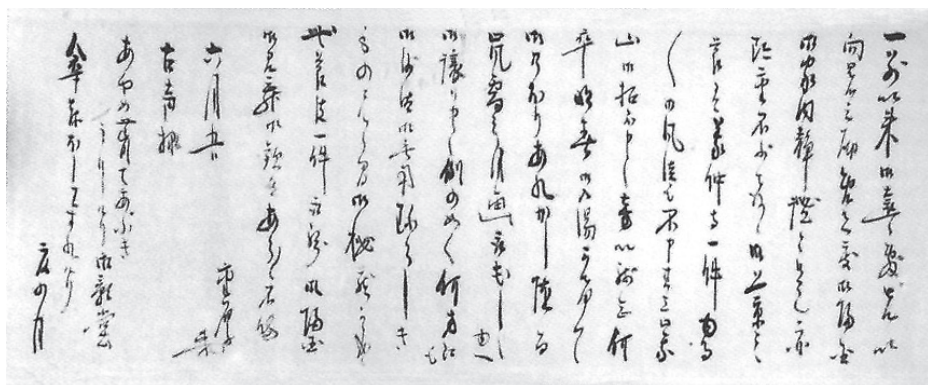


図5 古声宛重厚書簡

安永年間

○浮流とともに、奈良に遊ぶ。(草根発句集、安永三年十二月序)〔注〕浮流は天明二年没。

○安永頃の春、五升庵月次「雨晴て」初裏六句に出座。なお、『蝶夢全集』は「安永九年春か」とするが、吾東は安永八年没(蝶夢全集年譜)。

〔連衆〕瓦全・重厚・吾東・蝶夢・用舟。(慶応大五升庵歌仙控)。

○安永・天明頃の冬、「町はしの」歌仙を巻く。於、大津の菊二宅。なお、『蝶夢全集』は「安永九又八天明元冬」とする。

〔連衆〕梅下・菊二・露光・蝶夢・鯉遊・重厚(五升庵歌仙控)。

○去来の位牌を義仲寺に納める。表に「義焉子去来居士」、裏に「宝永元申歳九月十日／嵯峨重厚置之」とする。

●安永年間、烏明月次集『四季のくさぐさ』刊。文通にて京都重厚発句一入集。なお、成立については、安永六、七、八年の可能性もある。

天明元年(安永十年四月二日改元) 辛丑(一七八一) 四十三歳

○一月、魯白書簡が蝶夢からある(正月二十五日付魯白宛蝶夢書簡)。

●一月、烏明編『松露随筆』刊。文通にて皇都重厚発句一入集。

●四月四日、烏明編『四季供養』(同序)刊。発句一入集。

●四月、桐雨編『雪の五歌仙』刊。卷末に「落柿舎重厚」発句一、安永八年一月十八日蓑虫庵興行入集。

○五月、江戸に下る。これより四ヵ月間、登舟の両国閑鷗亭に滞在する。(江戸みやげ)

●閏五月、桃牛編『もとの巣』(同序)刊。嵯峨重厚発句一入集。因みに、重厚と交流のあった江戸の連衆に並んでの入集。

○六月上旬、成美を訪れる。(句藻いかに)。

○夏頃、「於石原飛田氏」興行。「ほととぎす鳴や千筋の江戸の町」以下六吟歌仙成る。

〔連衆〕重厚・蕉雨・徒水・南古・買雪・執筆。(江戸みやげ)

○同、「新川松承庵」興行。「中く」に雨ともならず雲の峰」以下六吟歌仙成る。

〔連衆〕重厚・古友・存義・九臯・亀文・泰里。（前項に同）

○七月、魯白より重厚、浮流宛の書簡が蝶夢に届くが、重厚は江戸下向中（七月二十三日付魯白宛蝶夢書簡）。

○七月、都鳥を見ようと蓼太らと角田川に遊び、「秋たつや」の九吟歌仙成る。

〔連衆〕蓼太・重厚・沙羅・月もり・あや足・吏中・方壺・文母・執筆。（江戸みやげ）

○秋、「御蔵前随時舎」興行。「蓑虫の」の五吟歌仙成る。

〔連衆〕成美・重厚・浙江・吟江・吾従。（前項に同）

○同、「神田木樨庵」興行。「井の草の」の四吟歌仙成る。

〔連衆〕楼川・重厚・桃牛・鶏口。（前項に同）

○同、「松高く」の六吟歌仙成る。

〔連衆〕眉充・重厚・宇平・東女・稲女・執筆。（前項に同）

○同、「御蔵前松菊」興行。「白菊の影ぼし寒し薄月夜」以下三吟歌仙成る。

〔連衆〕重厚・浙江・吟江。（前項に同）

○同、「深川河上庵」興行。去来立句の脇起り三吟歌仙成る。

〔連衆〕泰里・重厚・登舟。この時、河上庵泰里に去来の遺墨「湖の水まさりけり臯月雨」を譲る。（前項に同）

○同、「両国閑鷗亭」興行。去来立句の脇起り三吟歌仙成る。

〔連衆〕登舟・泰里・重厚。この時、登舟に去来の遺墨「柿主や梢はちかきあらし山」を譲る。（前項に同）

○同、芭蕉の「はせを野分して」を立句とする脇起り三吟歌仙成る。

〔連衆〕暁台・重厚・成美。（風羅念仏）

秋、暮雨巷暁台編『風羅念仏』（同序）刊。芭蕉立句の脇起り三吟歌仙を収める。

○八月、重厚編『江戸みやげ』（同自序）刊。江戸山崎金兵衛・京都橘屋治兵衛版。「嵯峨野の旅人重厚」自ら序を記す。発句七（立句三）、連句九入集（同年夏の石原飛田氏興行・同松承庵興行・七月「秋たつや」興行・秋の随時舎興行・同木樨庵興行・同「松高く」興行・同松菊興行・同河上庵興行・同閑鷗亭興行）。

○同、重厚所持の去来等著「難陳抄」を成美の弟と推察（田中道雄先生）される加之舎吟江が書写、隨時舎（成美）の文庫に納める。

○八月十六から二十二日、吟江に重厚を送る記載がある。「嵯峨重厚が帰京を送るに再会の都をちぎりて／粟の穂にしぼし雀のわかれかな 吟江」（吟江句稿「ゆめうら」）。

○八月中旬、帰途につく。（句藻いかにく）

○秋、丹後の菊巴亭東陌（天明元年六月二十一日没）の追悼句を詠む。木下馬吹編『浦の月』（八月序）に発句一入集。

○秋、松本に赴き、稲村山海の姨捨の観月会に出座し、発句を詠む。山海は、去来の玄孫と自称し、その縁による。（さらしな集）

●八月、山海編『さらしな集（旧姨捨集）』（端書）刊。京重厚発句一入集。

▼九月十日、武蔵国新川の去来庵にて去来忌を営む（浴の日記）。

▼九月十日、諸九尼没す。享年六十八歳。

○九月十一日、沂風とともに鳴海の千代倉家を訪れ、芭蕉の笈を見る。「九月十一日曇、粟津義仲寺沂風、嵯峨落柿舎重厚、右両子翁笈拝見来。見せ遣。」（千代倉家日記抄・天明元年）。

○十月十日、金福寺にて、芭蕉画像開眼の「眼をひらき」歌仙を巻く。並びに発句一を得る。

〔連衆〕蝶夢・其川・重厚・塘雨・露光・東走・朶路・瓦全・麦宇（雲橋社歌仙卷『金福寺参詣記』）。

また、金福寺にて、天明元年以前の冬、「しぐれ来や」表六句と発句一を得る。

〔連衆〕浮流・蝶夢・重厚。（金福寺参詣記）。

因みに、年次未詳ながら、芭蕉庵を訪問し、発句一を得ることがあった（金福寺参詣記）。

○十月十二日、義仲寺時雨会。同会に出座し、題を探る。

〔連衆〕青岬・沂風・応澄・瓜泥・不染・山炉・振鷺・汀雨・雨石・露州・巨洲・魯江・松笙・鯉遊・菊二・五浮・得皮・東舟・荷浄・髭風・蝶夢・曾秋・雨簾・一笑・峨月・鳥稿・用舟・呉琴・飛川・露光・可能・重厚・臥央・自転・卷阿・古静。（しぐれ会）

沂風編『しぐれ会』（同日興行）刊。嵯峨重厚発句一、連句一入集。

○十月二十二日、諸九尼の七七忌追善俳諧興行に一座する。五十韻を巻くが、重厚は六句目に一句付けるのみである。

〔連衆〕蝶夢・琴之・麦宇・秋鳥・簀山・重厚・塘雨・瓦全・鯉風・可磨・用舟・雨簾・古静・沂風・髭風・執筆。（俳諧五百韻）

○冬、松陰斎鷺橋の「我迷ふところ定めん冬の庵」を立句とする歌仙興行に一座する。但し、文化十二年九月（跋）刊。

〔連衆〕鷺橋・闌更・都雀・車蓋・二柳・二曲・机童・宗寿・把仄・蝶全・蜃州・去可・西山・貞梶・紫英・斗墨・馬瓢・洞夢・瓜坊・雁橋・曲阿坊・青蘿・東溪・太夢・木姿・松磨・何来・蝶夢・重厚・槿馬・芦水・梅風・志得・文華・鷺石・半化。（あきのそら）

天明二年壬寅（一七八二） 四十四歳

○一月、重厚編『初懷紙』刊。発句三入集。（くらげ）

●同、几童編『壬寅初懷紙』（同序）刊。発句一入集。▼蝶夢・春坡入集。

●同、桜田臥央編『初懷紙』刊。文音にて嵯峨重厚発句一入集。

●同、烏明編『松露随筆』刊。文通にて皇都重厚発句一入集。

○この頃、木鶏宅にての俳諧興行中に、盗賊の疑いで追手がかかる噂が出るが、重厚は未だ官方より扶持を貰う者であった。また、「兄弟の女母子」の江戸引越につき下向の予定が知られるが、江戸下向以来の評判は良くない。

入道木鶏子宅にて会席の中え、追手の者参り不怪候風聞の由（略）此入道逆も官方譜代の家来にて、今以、少扶持にても囉居申候者にて候。盗賊の何のと、追手懸り候よしは何事ぞや。其被申候人の様子、無覚束候。今度も兄弟の女母子江戸表え引越申付、追付致下向候事にて候。江戸已来不評判、不承候。（二月九日付白輅宛蝶夢書簡）。

●二月、布袋庵柳几編『百花集』刊。京重厚発句一入集。▼蝶夢入集。

○この頃、翌年の春頃まで陸奥に遊ぶ（みちのくぶり）。小野素郷の弟の斯波の里に滞在する。また、北達のもとに「居候」する（天明三年正月二十五日付素郷宛蝶夢書簡）。素郷は蝶夢門、観世流の師。当時の盛岡俳壇の勢力は、素郷と平野平角とが二分していた。素郷は芭蕉顕彰に理解をよく示し、天明八年建立の「海暮れて鴨の声ほのかに白し 翁」の芭蕉句碑の

建立に宮古の里川とともに関わっている（石に刻まれた芭蕉）。天明二年三月二十四日付素郷宛蝶夢書簡に「重厚入道罷下り候事、委曲先便に申上候。追付其御地え可致到着候。御逢可被下候」とあり、同年五月十四日付同書簡に「重厚入道事、江戸より先月下旬致発足候筈にて候間、夏中御地え可参候」とある。

陸奥滞在中、※岩手山・岩手関・舟橋・※厨川・陳岳・、阿多々良山・※都嶋・十苅浦・野田玉川・奥海・蝦夷窟・宇曾里山・手引石・※壺碑・尾鯨御牧・末松山・挾布里・錦木塚に遊ぶ（※は発句を得たところ）。また、次の俳諧興行二巻あり。
1 「堅香子の花見付たりあたゝ根」以下一句一順歌仙。

〔連衆〕重厚・素郷・北達・東芽・里川・万戸・群長・三白・曉宇・其黒・不一・寛里・画仏・平角・藍水・東湖・石門・乙因・芦皓・呉雪・陶々・一舟・垂虹・乙外・幸路・荷裳・有以・虎溪・吟耕・谷水・車交・蒼里・浮賤・斜川・大機・執筆。

2 「噓や」の三吟歌仙。

〔連衆〕素郷・重厚・執筆。（以上、みちのくぶり）

○五月、魯白よりの蝶夢書簡に、重厚の江戸より松島への行脚、浮流法師の病身を伝える（五月二十五日付魯白宛蝶夢書簡）。

▼同、浮流、天明二年五月二十八日没す。

●七月、菊舎田中其成編『俳詣都枝折』刊。発句一入集。▼蝶夢入集。

○九月四日、盛岡の平角とともに繋の温泉に宿る。隣座敷の奥浄瑠璃を聴いたり、「湯の山や菊を主に幾日寝ん」の重厚発句を立句とする平角との表五句を詠んだりする（浴の日記、以下九月二十五日まで）。

平角は盛岡天神下に梅を多く植えて梅園を設け多くの俳人と交わった。豪放磊落な人柄で、重厚の一面の性質と通じるところがあり、特に親しく交わる。重厚は後の寛政元年から同三年迄滞在し、平角の江戸俳壇への参入に力添えもしている。なお、平角は京の華道家元の池坊に出入りしている。

○同五日、晴。隣座敷の少女としばし語り、宿の主には酒を見舞われる。発句一あり。

○同六日、晴。鶏頭山を望みて、一句を得る。

○同七日、晴。隣座敷の一行を見送る。発句三あり。

○同八日、晴。発句二を得る。

- 同九日、陰。重陽の節句の歌、並びに「重厚入道」の発句一を得る。
- 同十日、晴。去來の手向けの一句を得、俳諧興行（表六句）に一座する。
- 〔連衆〕素郷・重厚・東芽・三白・一露・平角。
- 同十一日、晴。
- 同十二日、陰。「山城国嵯峨隱士 菅原重厚」は、一文並びに発句四を認める。また、平角、北達、其君、吟耕、萬戸、三白、陶々、一露、東芽、素郷の句有り。
- 同十三日、晴。発句一あり。
- 同十四日、晴。素郷・東芽は盛岡に帰り、一日鶯宿に遊んで発句二を得る。
- 同十五日、晴。繋の宿に戻る。
- 同十六日、陰。平角とともに長閑な一日を過ごす。
- 同十七日、晴。
- 同十八日、陰。栗津時雨会奉納の発句を得る。五言絶句並びに発句あり。
- 同十九日、晴。鶯宿に遊ぶ一文並びに、発句一あり。
- 同二十日、同二十一日、同二十二日、同二十三日、晴。
- 同二十四日、快晴。途中吟二句を得る。
- 同二十五日、平角編『浴の日記』成る。発句二十二（立句一）、連句二、俳文一入集。
- 同十二月十二日、義仲寺時雨会。沂風編『しぐれ会』（同日興行）刊。行脚重厚発句一入集。但し、時雨会は欠席。
- 同、蝶夢の『芭蕉門古人真蹟』成る。これにあたって、去來筆の真蹟「盛久伝」草稿を寄進する。
- 十月十六日、松化編『わすれ花』（同日跋）刊。嵯峨重厚発句一入集。
- 十一月下旬、富田杜音よりの書簡が蝶夢からある（天明三年一月二十八日付杜音宛蝶夢書簡）。
- 十一月、孝子三叩編『雪の台』（同跋）刊。文通にて嵯峨重厚発句一入集。
- この年、白雄編『春秋稿二篇』刊。嵯峨重厚発句一入集。

天明三年癸卯（一七八三） 四十五歳

○一月、陸奥国に越年し、春の連句興行を催す。日野素兄と同道。また、蝶夢からは、重厚が天明二年より居候している北達へ札状、吟耕へ一封を届けるようにと、素郷に言付けている。（正月二十五日付素郷宛蝶夢書簡）

●一月、几董編『癸卯初懷紙』（同序）刊。書信にて発句一入集。

●同、蓼太編『嫁披露』刊。嵯峨重厚発句一入集。

○同、重厚編『みちのくぶり』刊。江戸山崎金兵衛・京都橘屋治兵衛・大坂石原茂兵衛版。「嵯峨落柿舎重厚」自ら序文を記す。天明二年秋から陸奥に遊んで得た発句十一（立句一）、連句二入集。

○二月、平角の『奉納句額』に序文を寄せる。（岩手俳諧史）

○春、この頃まで陸奥に遊ぶ（みちのくぶり）。また、この滞在中、素郷に二見潟文台を贈るか（岩手俳諧史）。

○三月九日、白雄の春秋庵を訪れ『句双紙』に入集のための伊勢の句を乞う。（同日付上田門人宛白雄書簡）

●三月、釣鯢編『とも鶴』（同序）刊。京重厚発句一入集。

○四月下旬頃、成美に迎えられ、沂風と共に隅田川で吟遊する（句藻あかつき）。この後、江戸を発つ。

●五月、素郷編『みやこじま（鴨塚集）』（同序）刊。嵯峨野重厚発句一入集。

○六月十五日、京都三本木において、筑前福岡の梅珠の招きにて「めづらしと」の歌仙なる。

〔連衆〕蝶夢・梅珠・重厚・瓦全・闌更・菊二・鯉遊・髭風。（五升庵歌仙控）

○七月、魯白より重厚へ一封あり、「是又無拠親共の供にて、此節致旅行候事にて候。身よりは心の達者の法師にて候」と親のために江戸下向を知らせる（七月晦日付魯白宛蝶夢書簡、八月二十六日付素郷宛蝶夢書簡）。

●九月下旬、蓼太編『むさしの三歌仙』（同跋）刊。洛嵯峨重厚発句一入集。

○秋、白雄の春秋庵を訪れ、春鴻の立句で歌仙を巻く。

〔連衆〕春鴻・白雄・重厚・呉水・柴居・斜月・執筆。（春秋稿三篇）

●秋、採茶庵梅人編『七名八牀附合要録』刊。洛重厚発句一入集。

▼十月十二日、義仲寺時雨会。沂風編『しぐれ会』（同日興行）刊。同会は、青蘿を迎えて盛会。但し、重厚は欠席・欠詠。

- 十一月十二日、白雄編『春秋稿三篇』（同日序）刊。嵯峨重厚発句二、同年秋の春秋庵歌仙一入集。
- 十一月、黒柳維駒編『五車反古』（同跋）刊。サガ重厚発句二入集。
- 同、水荃廬葛人編『もの、おや』刊。嵯峨重厚発句一入集。
- ▼十二月二十五日、与謝蕪村没。享年六十八歳。
- 冬、其成編『花のおきな』（同序）刊。嵯峨重厚発句一入集。▼蝶夢入集。
- この年、烏明編『俳諧松露庵随筆』刊。文通にて、京都重厚発句一入集。

天明四年甲辰（一七八四） 四十六歳

- 一月、几董編『甲辰初懷紙』（同序）刊。サガ重厚発句一入集。
 - 同、烏明編『松露随筆』刊。文通にて、発句一入集。
 - 一月四日、「黄金積て車をしけり春の霜」以下両吟半歌仙成る。
〔連衆〕重厚・成美。（鶴鶴帖）
 - 一月、成美編『鶴鶴帖』刊。発句二（立句一）、同年一月四日の「黄金積て」の半歌仙入集。
 - 二月下旬から三月上旬頃、几董に手紙を認める。発句二を寄せる。（甲辰檀林会句記併、文音句録）
 - 三月、魯白より蝶夢のもとへ、重厚宛書簡あるも、京都に不在（三月六日付魯白宛蝶夢書簡）。
 - 三月、五原亭江左編『栗の肆』（同序）刊。遊山追善集。京都重厚発句一入集。
 - 同、白堂尺艾編『しらぬひ六歌仙』（同序）刊。発句一入集。▼蝶夢入集。
 - 春、玄化堂甫尺編『無名集』（同序）刊。サガ重厚発句四入集。▼蝶夢入集。
 - 五月、重厚編『字良不二』の序文を「落葉庵の窓の下に嵯峨野の入道重厚」自ら記す。但し、天明六年八月刊。
- この頃、甲斐国の落葉庵石牙のもとに滞在し、差出磯・不和川・身延川・郡内・恵井寺・塩山冷湯・釜無川の辺りの五味氏亭に遊び、次の俳諧興行二巻を成す。

1 「ほと、ぎすある夜時を見付たり」以下十吟半歌仙。

〔連衆〕重厚・甚化・可都里・其龍・漢甫・名積・真風・真洞・作良・左岳。

2 「螢時と申して立ぬ薬とり」以下十八吟歌仙。

〔連衆〕重厚・石牙・琴雪・何鳥・百兔・梅夜・春路・如洗・枝流・藤仙・蕪人・桃雨・長古・春鱗・鸞文・南岳・翠籟・瑞山。

因みに、七月十一日、蝶夢は曾秋宛書簡中に、「重厚入道甲州迄出申候よしにて候」という。

○初秋の頃、江戸に出る。成美と舟遊びする。（手ならひ）

○九月、泰里編『むかしぎく』（同奥）刊。東都去来庵にての去来八十回忌追善俳諧興行の記念集。「嵯峨野旅人重厚」跋文を寄せ、京重厚発句一入集する。

○秋、白雄の春秋庵に迎えられて、白雄立句の歌仙を巻く。

〔連衆〕白雄・眉尺・柴居・斜月・重厚・呉明・我脱・呉水・春鴻・執筆。（春秋稿四篇）

○十一月、松承庵古友編『まつかさね』（同跋）刊。八吟歌仙一入集。

〔連衆〕田女・古友・楼川・桃牛・重厚・九阜・亀文・萬花。

●冬、白雄編『春秋稿四篇』（同序）刊。京重厚発句三入集。同年秋の春秋庵歌仙一入集。

天明五年乙巳（二七八五） 四十七歳

○一月、歳旦吟「犬神人の酒もり交ぬ松の内」。（几董初懷紙）

●同、几董編『初懷紙』（同序）刊。サガ重厚歳旦吟一入集。

○二月二日、下里（郷）常和（和菊）没するに際し、追悼句を詠む（春の笠）。

十二月、学海編『春の笠』（同跋）刊。二月二日に没する常和（和菊）の追善集。追悼発句一入集。▼蝶夢入集。

●二月、二月庵菱鴉編『夕暮塚』（同序）刊。嵯峨落柿舎重厚発句一入集。▼蝶夢入集。

○四月十二日、義仲寺奉扇会。沂風編『奉扇会』（同日興行）刊。発句一入集。但し、奉扇会は欠席。

○この頃、甲斐から美濃へと上京の途次にある。(天明五年四月二十九日付素郷宛蝶夢書簡)

●四月、東閣編『秋風塚集』刊。落柿舎重厚発句一入集。▼蝶夢入集。

○夏、帰京し、粟田口の宮の境内に住居する。(八月十三日付素郷宛蝶夢書簡)

○夏、「迎火や手にはとられぬ前の露」を立句とする重厚・沂風の両吟歌仙成る。

〔連衆〕重厚・沂風。(五月二十八日付杜音・曾秋宛沂風書簡、魂まつり)

○同、五升庵における蝶夢・几董・高桑闌更の俳諧興行に、重厚旅より帰り来て歌仙一卷と成る。

〔連衆〕蝶夢・几董・闌更・重厚・執筆。(新雑談集)。ただし、興行年次については未詳(蝶夢全集続)。

○立秋、几董編『新雑談集』(同日奥)刊。高井几圭追善集。発句二、五升庵興行入集。また、重厚の落柿舎再興・甲斐行脚に関する几董の俳文を収める。

○七月十二日、粟津芭蕉堂において、芭蕉追善俳諧興行に一座する。「はせを葉にもりて手向ん野菜もの」以下七吟歌仙成る。

〔連衆〕重厚・沂風・髭風・雨石・五来・鯉遊・執筆。(魂まつり)

○秋、重厚編『魂まつり』(同序)刊。橘屋治兵衛版。自序。歌仙二入集、うち一は同年夏の「迎火や」興行、他は同年七月十二日の「はせを葉に」興行。

○十月十二日、義仲寺時雨会。同会に出座し、題を探る。

〔連衆〕荷浄・沂風・青岬・龍川・巨洲・瓜泥・松笙・鯉遊・菊二・魚傘・立卜・五来・唾玉・雨石・応澄・東舟・五浮・八柳・可磨・祥然・蝶夢・重厚・騏道・蘭蕙・駟丹・図雲・雨橋・布舟・飛川・東走・魚渕・都童。

沂風編『しぐれ会』(同日興行)刊。発句一、連句一入集。

▼この頃、義仲寺内に粟津文庫の柱建てが行われる。但し、落成は寛政三年。(しぐれ会)

▼この頃、落柿舎は、山本泰溪が実質的に住持していた(春の笠)。泰溪は、菊亭諸大夫山本三河守。平太溪とも記す。延享二年八月三十日生、文化七年十一月九日没、享年六十六歳。三河守は安永五年二月十五日、三十二歳以降で、この頃三宅嘯山らとの俳諧活動が知られる(五月十二日付山本三河守書簡)。菊亭は、重厚が落柿舎再興にあたって後援とした公卿の今出川公である。

また、天明五年三月二十五日付素郷宛蝶夢書簡によれば、

重厚入道儀は、于今不致上京候。落柿舎も及大破候由承り申候故、花の前涅槃会に釈伽堂参詣申候。(中略) 夫より落柿舎へ参り、隣家の農人に料足わたりし修覆たのみ置申候。其事も見まほしく候て、花のころ此もの共六七輩にて尋申候(略)とあり、蝶夢が落柿舎の世話をしていた様子が知られる。

●冬、白雄編『春秋稿五篇』(同序)刊。嵯峨重厚発句一入集。

●同、北海房仙編『都の冬』(同跋)刊。発句一入集。▼蝶夢入集。

天明六年丙午(一七八六) 四十八歳

○一月、歳旦吟「そも此梅其角が枝のさけ目哉」(几董 初懷紙)。なお、同句に応えて几董の「おぼろ夜や去来屋敷の竹の月」がある(几董讃松村月溪画去来屋敷図)。

●同、「春夜探題」一枚摺に文通にて「栗田重厚」発句一入集。

○二月、几董編『初懷紙』刊。発句三(立句二)、「冬一日かすみが中のをしほ山」以下四吟興行入集。
〔連衆〕重厚・正巴・桃李・春坡。

この頃より下村春坡との交際が密に成る。

●同、成美編『魁春帖』(同序)刊。文通にて洛重厚発句一入集。

●三月十二日、闌更編『花供養』(同興行)創刊。発句一入集。

●同、後川編『こと葉の露』刊。希因三十三回忌追善集。文通にてミヤコ重厚発句一入集。

●春、尺艾編『月花塚』(同跋)刊。発句一入集。▼蝶夢入集。

○四月十二日、義仲寺奉扇会。沂風・祥然が播磨旅行中で、これに代わって髭風・重厚が執行。俳諧興行に一座し題を探る。
〔連衆〕龍川・髭風・松笙・青岬・鯉遊。瓜泥・菊二・雨石・魚傘・荷浄・立卜・唾玉・由璉・五来・雨橋・鉄翁・仏仙・重厚・巨洲・木姿・萍江・蚊山。

髭風・重厚編『奉扇会』(同日興行)刊。発句一、連句一入集。

○四月、重厚編『句双紙』刊。伴高蹊（閑田子）序。嵯峨重厚自序。同年三月和之壁駿。井筒屋庄兵衛・西村市郎右衛門・橘屋次兵衛版。守武・宗鑑を初めとして古今の俳諧師等四百四十人・四百四十句に、自らの発句を一句ずつ句合風に配す。自撰発句集としては、最大のもの。

○この頃、「其足不健、其目亦不若」と言い、すでに目が不自由になりつつあった。（句双紙）

●同、備後国府中の小林可卜（何木）編俳書『葵そら』成立。発句一入集。

○八月、重厚編『宇良不二』刊。同四年五月自序。同序は成美の板下。京都菊舎太兵衛版。発句十（立句二）、同四年五月、甲斐に遊んで得た俳諧興行二入集。

○八月二十一日、古声に宛て書簡を認める。先に『句双紙』を送付、この度に『うら不二』を送付するという書状である。発句三を寄せる。また、「小子目あしく困申候」と目が悪くなっていることを嘆いている。（天明六年八月二十一日付古声宛

重厚書簡 寺地文人蔵）【図6】

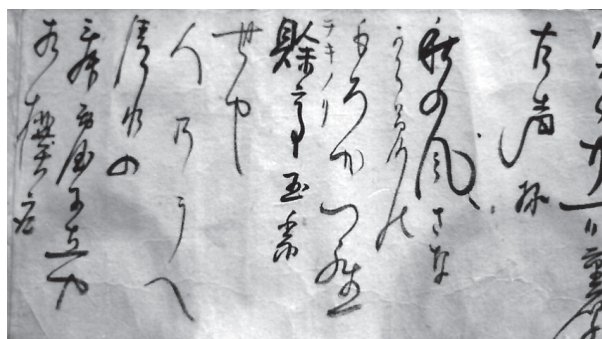
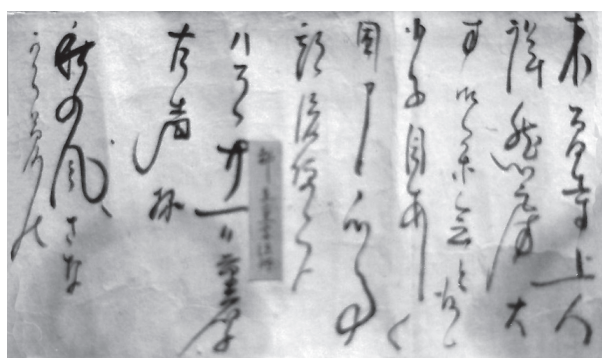
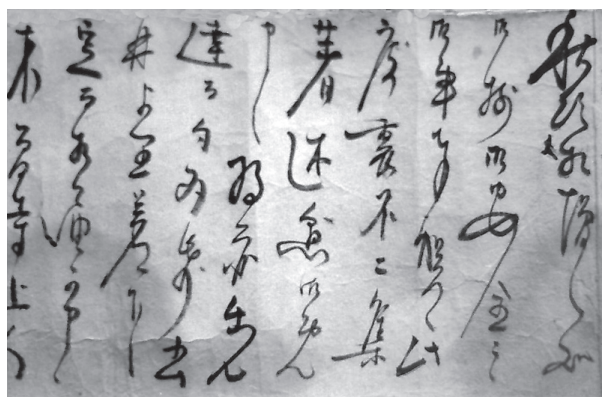


図6 古声宛重厚書簡

○九月九日、几董編『統一夜松後集』（同序）刊。「粟田口のほとり袖の川原の重厚」序文を記す。発句一入集。

○九月十日、何木（可卜）宛に書簡を認め、発句一を寄せる。（九月十日付何木宛重厚書簡）

○九月、この頃石牙に『うら不二』集を二十冊送付。（天明六年九月二十六日「雅俗日記」）

●秋、闌更編『力すまふ』（同跋）刊。発句一入集。

●同、仰山亭支白編『遅楊和舞頭歌』（同吟遊）刊。発句二入集。▼蝶夢入集。

●秋頃、粟津松本連の俳諧一枚摺に追加の発句一を寄せる。（一枚摺）

○十月十二日、義仲寺時雨会。沂風は旅行中のため、これに代わって、重厚が同会を執行する。俳諧興行に一座し、題を探る。

〔連衆〕八柳・重厚・青岬・菊二・五来・瓜泥・雨石・荷淨・雨橋・魚傘・五浮・龍川・之英・松笙・立卜・唾玉・乍及・巨洲・東舟・扇律・蚊山・応澄・闌更・泰溪・蓑聞・五嶺・月溪・輪々・吾同・三敲・貞都・鯉風・几董・木姿・巴橋・布舟・吞茶・巴川・渡口・振衣・飛沖・其由・李郊・淇青・何木・素兆・可能・梅仙・芑支・梧風・繡虎・騏道・馬田・芦水・霞外・一澄・不逸・孤洲。

重厚編『しぐれ会』（同日興行）刊。発句一、連句一入集。

○閏十月二日頃、「急用に付」江戸下向（閏十月二日付方壺宛蝶夢書簡）。

○閏十月三日頃、甲斐国の海涌山清白禪寺より石牙宛に書簡を認める。（閏十月三日「雅俗日記」）

○閏十月二十八日、江戸移住。この頃より寛政四年奉扇会（四月十二日）後、義仲寺住職・無名庵八世主と成るまで、江戸を基点として俳諧活動を行う（俳諧一陽集）。江戸橋町一丁目に住んだこともある。（中村伯先住所録・増補改訂加舎白雄全集下五五二頁）

○十一月一日冬至、五升庵において但馬の木姿を送る俳諧興行で亭主（脇句）を勤める。

〔連衆〕木姿・重厚・其白・呉琴・几董・巴橋・曾秋・闌更・月川・凡十・若翁・半桂・二柳・布舟・紫曉・塘里・去何・里秋・椿華・瓦全・蛙声・菊二・五来・青岬・巴川・三敲・暁台・青蘿・九皐・素寮・太溪（泰溪）・鳴泉・倚川・履道・蝶夢・東走。

○十一月頃、母の病気のため、江戸へ下る（天明七年正月三十日付素郷宛蝶夢書簡）。

●この年、伯先編『葛の葉表』刊。洛重厚発句一入集。

○十二月、歳暮吟「大としや塵つかの塵小かはらけ」。（乞食袋）

天明七年丁未（一七八七） 四十九歳

○一月、歳旦吟「正月や炬燵のうへの小盃」（几董 初懷紙）。同、「殿原のそれ矢ひらひぬ松のうち」（しゅんてふ）。同、「獅子舞に蝶に鎧のわたし哉」（曙双紙）。

●同、几董編『初懷紙』（同序）刊。歳旦吟一入集。

●同、泰溪編『しゅんてふ』刊。歳旦吟一入集。

●同、紫暁編『曙双紙』刊。発句二（歳旦吟二）入集。

●同、時雨窓文母編『三の朝』刊。発句一入集。

●同、嵐亭治助編『丁未青陽』刊。発句一入集。

●同、亭々坊車蓋編『俳諧歌仙七部拾遺』刊。発句一入集。▼蝶夢入集。

○三月十五日、浅草三吟を卷く。

〔連衆〕重厚・成美・蓼太。（乞食袋）

○三月、蝶夢は魯白に、重厚母の本復を知らせる「関東にて老母相煩候故、旧冬已来致下向候。本復に付、春中致帰京候筈に候。」（三月十四日付魯白宛蝶夢書簡）。

○春、虫歌観音堂の俳額に「わけ入れば川上寒し花に鳥」句を寄せる。俳額は、宮本虎杖選、願主は信濃松代の戸倉連。▼蝶夢入句。（<http://members.jcom> 井上重厚）

○夏、重厚編『乞食ぶくろ』（同序）刊。蓼太序。成美跋。江戸山崎金兵衛版。発句六（立句四）入集。次の俳諧興行四入集。

1 浅草三吟。「花に寝る我も乞食か旅千里」以下三吟歌仙。

〔連衆〕重厚・成美・蓼太。（同年三月十五日興行）

2 九龍三吟。「夏瘦や乞食ものかく筆の塵」以下三吟歌仙。

〔連衆〕重厚・楚山・荷裳。

3 鳥越三吟。「しぶ柿に礫うちけり乞食の子」以下三吟歌仙。

〔連衆〕重厚・麦宇・寸来。

4 乱吟之歌仙。「霜さむき奈良の乞食が朝茶哉」以下十八吟歌仙。

〔連衆〕重厚・素郷・画仏・平角・重雪・碩布・奈垣・才化・買雪・きく・南石・鶴歩・一菊・鶏道・吹石・蘭秀・立砂・執筆。

▼四月十二日、義仲寺奉扇会、欠席・欠詠。

●七月、今日庵安倍編〔歩十居士追悼集〕（同奥）刊。発句一入集。

○八月二十三日、「露の間を祈りながらに咄しせよ」以下十八句目までは、洛重厚・播磨吹石・奥州平角の三吟、十九句目からは平角・其黒・素郷で満尾。

〔連衆〕重厚・吹石・平角・其黒・素郷。（俳跡貼交屏風）

●八月、沂風編『宰府日記』（同序）刊。発句一入集。

○八月頃、蓼太の立句で歌仙一卷成る。

〔連衆〕蓼太・寸来・成美・麦宇・一成・泰里・亀友・平角・重厚・楚山ら（鷹の目）。

平角の需に応じて重厚が支援し、平角は江戸俳壇に登場する（岩手俳諧史）。

○この頃、江戸にあった母の追善のために善光寺に参詣する。（九月五日付如毛宛白雄書簡）

▼九月七日、蓼太没す。享年七十歳。

○秋以前、几董・蝶夢・重厚の発句一枚摺刊。（一枚摺）

●秋、誠々庵霰打編『伊奈古万呂』（同跋）刊。江戸重厚発句一入集。

○同、秋里湘夕編『拾遺都名所図会』刊。同六年七月自序。落柿舎が収録される。

落柿舎（略）柿ぬしや木ずゑはちかきあらし山 去来

近年去来の支族俳士井上重厚旧蹟に落柿舎を修補し其傍に此句を石に鐫、こゝに建てすまひし侍る（略）

なお、先の『都名所図会』（安永九年初版、天明六年再版）には未収。

○十月十二日、義仲寺時雨会。祥然・沂風編『しぐれ会』（同日興行）刊。発句一入集。但し、時雨会は欠席。

○十月、鹿島に遊び、下総国の柏日庵立砂に『もとの水』を与える。

重厚編『もとの水』（同跋）刊。内題、芭蕉翁発句集。「前落柿舎重厚」序。同序は成美の板下。安倍跋。芭蕉百回忌記念集

として立砂の援助で出版する。

○同、雪中庵三世完来編『藤衣』（同序）刊。蓼太追善歌仙一入集。但し、重厚は一句のみ付ける。

〔連衆〕成美・完来・亀文・寸来・麦宇・泰里・重厚・執筆。

●同、嵐外編『俳諧あまが家』（同序）刊。文通にて発句一入集。

●十一月、几董編、紫暁・雷夫校『きくの宿』刊。発句二入集。

●この年、李雨編、青蘿・三浦樗良作『骨書』刊。天明六年二月序。文通にて発句一入集。

天明八年戊申（一七八八） 五十歳

○一月、歳旦吟「人先に若菜呼こむ筆屋哉」。（春興帖）

○同、蝶夢は魯白に、重厚が母の病氣のため江戸で越年したことを知らせる「関東に致越年候。母病氣故に候。春中には可致帰京申越候。」（正月二十日付魯白宛蝶夢書簡）。

●同、起早庵稲後編『春興帖』刊。京重厚歳旦吟一入集。

●同、梧堂元智編『蓬萊帖』（同序）刊。文通にて在江戸重厚発句一入集。

●同、青牛山人編『桃くらひ』（同序）刊。東武重厚発句一入集。

○春、善光寺に詣るため、江戸を出立。その後、甲斐の石牙のもとに暫く逗留して、蝶夢を迎える。（宇良富士紀行・富士美行脚）

○三月十六日、裏富士に遊ぶ蝶夢・木姿が石牙を訪れて、折から石牙亭に逗留中の重厚と会合する。（前項に同）

○三月、この頃、石牙宅に蝶夢・木姿と共に遊び、半歌仙を得る。

〔連衆〕蝶夢・石牙・重厚・木姿・里塘・魚君・春鱗・梅夜・桂児。（ちどりづか）

○同十七日、恵林寺、鹽の山、菅田の社に遊ぶ。（宇良富士紀行、富士美行脚）

○同十八日、正八幡の大社へ参詣。神祢宜の家々に誘われ、差出の磯に遊ぶ。（前項に同）

○同十九日、差出の磯に芭蕉句碑を建てようとする人々に請われて、供養の俳諧歌仙を巻く。差出の磯に泊る。（前項に同）

○同二十日、石牙亭を出て、綿塚に向う。人々に杉の御坊まで見送られ、黒駒村を過ぎ、三坂峠の麓藤の木に泊る。(前項に同)
○同二十一日、三坂峠を越え、河口湖、吉田、小沼、十日市場、谷村、都留に至り、都留郡名産島に泊る。(前項に同)
○同二十二日、井倉、田野倉を経て、大月の宿に至る。猿橋を渡り、犬目、野田尻、鶴川橋を過ぎ、上野原に泊る。(前項に同)
○同二十三日、須波の関屋、関の原、吉野、小原、小仏峠へ川原宿、駒木根、八王子、本郷、八木、八幡、日野を経て府中に泊る。(富士美行脚)

○同二十四日、武蔵の国に入る。(前項に同)

○同二十八日、雨。向井氏の宅に蝶夢、木姿と語らい、松露庵を訪れ、其由の旅館に遊ぶ。(前項に同)

○四月一日、白雄を尋ねる。また、木姿の宿る多賀屋敷にて岡崎如毛を見送る。(前項に同)

○同三日、深川の泰里にまねかれ、蝶夢・其由・木姿らと俳諧に遊ぶ。(前項に同)

○同七日、御蔵前の成美に迎えられて、蝶夢・其由・麦宇・木姿らと角田川に舟遊びする。(富士美行脚・俳諧一陽集)

▼同九日～十五日、品川鮫州の海晏寺において、白雄は、芭蕉百回忌取越法会を執行する。海晏寺は鳥酔の墓所。同会に、折から江戸に滞在中の蝶夢は参会するが、俳諧興行には一座しない。なお、重厚は、十一日～十五日までの俳諧興行に一座する。

○同十一日、海晏寺において、芭蕉百回忌取越法会の俳諧百韻興行に一座する。

〔連衆〕 古慊・呉水・柴居・白雄・春鴻・雨律・車来・尋花・重厚・雅輔・星布・蒿圃・几秋・轍之・呼童・不伐・百維・執筆・。(白雄主催の芭蕉百回忌取越法会百韻)

○同十二日、前日に続いて俳諧百韻興行。

〔連衆〕 白雄・春鴻・重厚・呉水・柴居・古慊・三千彦・括囊・竹里・雨律・尋花・車来・長松・星布・雅輔・不伐・保吉・碩布・蛙声・蟻則・麦二・其汀・呼童・漣和・青藍・宣頂・智邑・執筆。(前項に同)

○同十三日、前日に続いて俳諧百韻興行。宗匠を務める。

〔連衆〕 重厚・柴居・古慊・春鴻・呉水・白雄・楚石・麦二・智邑・碩布・在陽・長松・蛙声・雅輔・車来・宣頂・雨律・星布・雨塘・執筆。(前項に同)

○同十四日、前日に続いて俳諧百韻興行。

〔連衆〕呉水・春鴻・柴居・重厚・古謙・白雄・蛙声・雨律・在陽・楚石・雅輔・長松・不伐・其汀・尋花・聴雨・星布・麦二・如毛・車来・斑雀・智邑・雨塘・此君・左達・呼童・執筆。（前項に同）

○同十五日、前日に続いて俳諧百韻興行。芭蕉百回忌最終日。

〔連衆〕春鴻・国香・白雄・古謙・柴居・呉水・重厚・楚石・在陽・聴雨・麦二・車来・蛙声・智邑・長松・雅輔・星布・雨律・如毛・暮原・左達・執筆。（前項に同）

▼同十六日、蝶夢・木姿、江戸を出立。五月中旬、京に帰着。（富士美行脚）

●四月、安倍編『俳諧五十三駅』（同序）刊。東都重厚発句三入集。

○五月上旬、帰京。甲斐、江戸に二十日余り滞在、熱海入湯の後のことである（五月二十八日付百尾宛蝶夢書簡）。

●五月、五味可都里編『農おとこ』（同奥）刊。嵯峨重厚発句一入集。

●八月、車蓋編『桃の白実』刊。東武重厚発句一入集。

●同、安倍編『百名月』（同序）刊。発句一入集。

○八月三日、夜食房夜来と共に、奥の紀行に出立し、岩手の関を越える。

随ふて落穂をひろふ侘寝哉 夜来

土くれせまる道の露霜 重厚

に始まる。また、送別の折、発句一を得る。（奥の紀行、以下九月十八日まで同。）

稗貫郡大迫の松田氏方に泊る。発句一あり。

○同四日、大迫の橡館にて、発句一を得る。

○同五日、遠野綾織を経て、遠野寝勿氏方に泊る。発句二あり。

○同六日、雨。大槌の花暁邸に泊る。発句二あり。

○同七日、雨。古里屋の東梅社に遊び、発句一を得る。

○同八日、晴。昼より大雨。花暁邸に泊る。

○同九日、雨。昼より晴。出羽の風五・東梅社・暁水・花暁らと遊び、発句三を得る。

○同十日、晴。暁水・嗣葦・夜食と舟遊びし、発句二を得る。

- 同十一日、晴。花曉邸にて送別あり。大槌吉利吉利の前川邸に泊る。発句二あり。
- 同十二日、上閉伊郡山田（船越）に泊る。後に句碑が建立される「涼しさや海より秋の風薫る」の句を得る。なお、昭和四十年に建てられた句碑には「天明八年八月 京都落柿舎二世重厚 一舟建 於船越四十八坂詠吟」とある（岩手俳諧史）。
- 同十三日、宮古津軽石に泊る。発句一あり。
- 同十四日、雨。神祇伯白川家に遊び、発句一を得る。
- 同十五日、雨。興の井に遊び、月の句を得る。また、軽砂と遊び、発句一を得る。
- 同十六日、宮古鉾が崎の大坂屋に泊る。「ひじき藻に玉虫聞ん声あらば」の重厚立句に、夜来の脇・第三と付けた連句成る。
- 同十七日、二十日、鉾ヶ崎。三日間雨に降りこめられる。東江・軽砂・呼友・遊女の此・玉元らと遊び、発句七を得る。
- 同二十一日、夜雨。田老撰待村に泊る。
- 同二十二日、二十三日、野宿。発句一あり。
- 同二十四日、二十五日、雨。九戸野田村に泊る。後日（昭和五十七年）句碑が建立される「玉川や汐も真水の秋の声」の句を得る。奥羽西行屋敷跡に建てられた句碑には「天明八年八月 重厚」とある。なお、随行了た夜来の句と並記されている（京都盛岡往ったり来たり）。
- 同二十六日、晴。十府の浦に遊ぶ。後日（昭和五十七年）句碑が建立される「夜や寒し菅菰からん十府の人」の句を得る。句碑には「天明八年 重厚」とある（京都盛岡往ったり来たり）。
- 同二十七日、馬来と遊び、発句一を得る。
- 同二十八日、晴天。大野に泊る。
- 同二十九日、晴。八戸に泊る。発句二あり。
- 九月一日、七戸に泊る。
- 同二日、野辺地に泊る。発句一あり。
- 同三日、雨。横浜。
- 同四日、田名部。
- 同五日、鵜剪山に一夜を明かす。発句二あり。鵜剪山の宝物の法華八軸には「我仕へ奉る天台の座主梶井法親王の添ふ

み」ありと記す。

○同六日、夜來の父の忌日を営むにあたって、手向の発句一を寄せる。

○同七日～九日。七・八日雨、五日余り雨に降りこめられる。田名部熊谷氏に泊る。浮賤らと遊び、発句三を得る。

○同十日、加藤何某が落柿舎の画像をのぞみて、去來忌を営む。手向の発句二を寄せる。また、棹鶴の家に遊び、長良文台を見る。発句一あり。

○同十一日、雨。横浜に泊る。

○同十二日、野辺地に泊る。

○同十三日、五戸壺川に遊び、後の月の句一を得る。

○同十五日、亥の刻雨。二戸福岡の下斗米（庄琴）に遊び、発句一を得る。

○同十六日、鳥越の観音の岩屋、御坂、末の松山、北公上御堂の観音などを巡る。

○同十八日、岩手の麓に戻る。

●九月、夜來編『奥の紀行』成る。発句四十四（立句一）、連句二入集。

○この頃、久慈・二戸金田一村・二戸福岡に、重厚の撰する「句額」が奉納される。（岩手俳諧史）

▼十月十二日、義仲寺時雨会。沂風編『しぐれ会』（同日興行）刊。但し、同会には、欠席・欠詠。

●十二月八日、几董編『遊子行』（同奥）刊。発句一入集。

●十二月、紫暁編『松のそなた』（同序）刊。在江戸重厚発句一入集。

○冬、遅月編『一夜流行』（同跋）刊。「前落柿舎重厚」序文を寄せる。▼成美跋。

安永・天明年間

○一月五日、花雪宛に書簡を認める。新年の挨拶と「摺もの」の送付を述べる。（正月五日付花雪宛重厚書簡）【図7】

○八月十七日、三井寺の露光に宛てて書簡を認める。送付の『塚の記』に「白露一封」を受け取った礼状である。発句一を寄せる。（八月十七日付露光宛重厚書簡）【図8】

天明年間

○五月五日、重厚手細工の硯を「懸御め申候」と朔順に贈る。書中の重厚句「蚊の声やうらもかへさぬ庵の壁」は、天明六年四月刊の『句双紙』に出る。なお、重厚作の硯は現存する。（五月五日付朔順宛重厚書簡）【図9】

○この頃、青蘿・重厚作『長月の夜』刊。洛橋治版。闌更序。次の俳諧興行二入集。

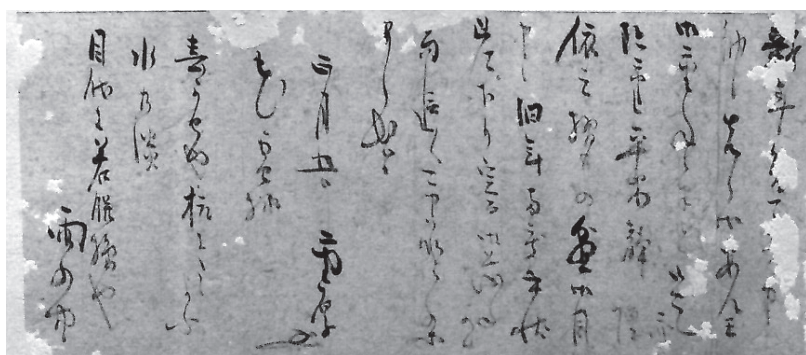


図7 花雪宛重厚書簡

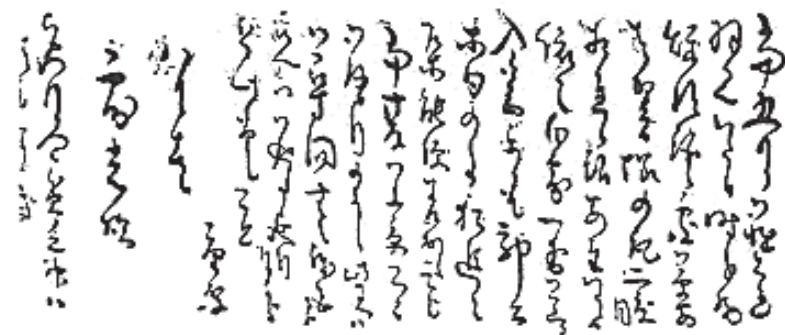


図8 露光宛重厚書簡

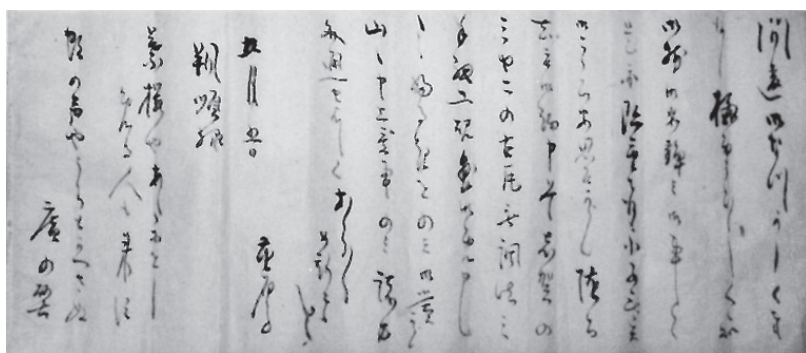


図9 朔順宛重厚書簡

1 青蘿立句・重厚脇の両吟歌仙。

2 「よく肥て夜寒もしらぬ軒かな 重厚」を立句とする青蘿との両吟歌仙。

●同、五明編『星あかり』刊。嵯峨重厚発句一入集。

寛政元年（天明九年一月二十五日改元）己酉（一七八九） 五十一歳

●一月、几董編『初懷紙』（同序）刊。発句一入集。

●同、春鷗舎来之編『除元集』刊。発句一入集。

●同、落梅窩星池編『春曙帖』刊。発句一入集。

●二月、車蓋編『誰が恋』刊。在江戸重厚発句一入集。

○春、成美編『浅草』（同跋）刊。歌仙一入集。

〔連衆〕遅月・重厚・成美・麦宇・寸来。

●同、如雲窟飛川編『彦陽十境集』（同序）刊。洛重厚発句一入集。

●同、片雲戸編『影法師』（同跋）刊。夢想庵万空追善集。洛重厚発句一入集。

●三月、素釣・石睡・尺艾等編『こてふづか』（同序）刊。発句一入集。

▼四月十二日、義仲寺奉扇会。沂風編『奉扇会』（同日興行）刊。但し、奉扇会は欠席・欠詠。

▼五月二十日、几董が重厚に書簡を認める。（寛政巳酉句録）

○五月下旬頃、几董および紫暁に書簡を認める。（前項に同）

○六月七日、重厚の書簡が几董のもとに届く。発句十一。（前項に同）

○六月中旬、几董に宛てて書簡を認める。其角・重厚の両吟半歌仙を寄せる。なお、几董は、これに続けて、其角・几董の両吟で歌仙を満尾させる。（巳酉筆記晋明集第五稿・小鳥）

▼六月十九日、几董が重厚に書簡を認める。（寛政巳酉句録）

○閏六月、几董に宛てて書簡を認める。（前項に同）

○閏六月二十九日、重厚の書簡が、几董のもとに届く。発句五を記す。(前項に同)

○閏六月頃、備後の可卜(何木)から重厚、太溪(泰溪)に伝言がある(閏六月二十一日付可卜宛蝶夢書簡)。

●夏、子坤編『はすの浮は』(同跋)刊。一囀舎追善集。嵯峨重厚発句一入集。

●同、烏兎房眉山編『肥後のもの』(同序)刊。発句一入集。

●七月、闌更編『奉納集』刊。在江戸重厚発句一入集。

●秋、名利菴葵編『あか冠』(同跋)刊。文音にて発句一入集。

○同、この頃から、奥州盛岡の平角邸の梅園に、寛政三年春頃まで滞在する。秋の発句四、および、俳諧興行一を得る。

〔連衆〕平角・重厚・夜来・其黒。(其梅)

●十月上旬、青蘿編『観月楼句集』(同跋)刊。但し、天明六年五月、青蘿の観月楼記成る。桃如追善集。文通にて発句一入集。

▼十月十二日、義仲寺時雨会。一萍編『しぐれ会』(同日興行)刊。但し、重厚は同会に欠席・欠詠。

●同、栗本玉屑編『うらあふぎ』(同跋)刊。文通にて在江戸重厚発句一入集。

▼十月二十三日、几董没す。享年四十九歳。

●これ以前、几董板下・春坡編『小鳥』が完成する。但し、寛政五年の刊行。

寛政二年庚戌(一七九〇) 五十二歳

○一月、歳旦吟「世並よく人かすみけり日本橋」。(除元集)

●同、来之編『除元集』刊。在江戸重厚発句一入集。

●同、冬の日庵編『春興』刊。発句一入集。

○二月、紫曉編『鐘筑波』(同跋)刊。江戸重厚発句一、几董追善の歌仙興行一入集。

〔連衆〕亡人几董・成美・重厚・其由・宗讃・素綾・袁丁・一成・寸来。

●春、採茶庵梅人編『寛政二年梅人歳旦帖』(同奥)刊。発句一入集。

- 春、白雄編『春のおとづれ』刊。発句一入集。
- 四月十二日、義仲寺奉扇会。一萍編『奉扇会』（同日興行）刊。江戸重厚発句一入集。但し、奉扇会は欠席。
- 五月、近江国人別帳に「三井寺山内光浄院末寺（略）義仲寺看主重厚」とする。本稿「元文四年」項（3頁）参照。
- 八月、梅人編『かしま紀行』（同跋）刊。洛重厚発句一入集。
- 秋、杉風編・梅人校『冬かつら』（同跋）刊。洛重厚発句一入集。
- 同、奥州に遊び、秋の句二を得る。（其梅）
- 十月十一日、石牙編『ちどりづか』（同興行）刊。天明八年三月興行の半歌仙、並びに文通にて発句一入集。
- ▼十月十二日、義仲寺時雨会。一萍編『しぐれ会』（同日興行）刊。但し、重厚は同会に欠席・欠詠。
- 同、平角の梅園に滞在中、二夜庵瓜坊と宗讃とが訪れて、「芭蕉忌や君がおしへの愚を守る」を立句とする歌仙を巻く。
- 〔連衆〕重厚・平角・宗讃・瓜坊・執筆。（平角編芭蕉百回忌）
- 同、宮津の内藤白児編『一声塚百廻忌』（同日興行・序）刊。文通にて近江重厚発句一入集。
- 十月、烏明編『俳諧松露庵隨筆』（同奥）刊。文音にて京都重厚発句一入集。
- 同、几董編『よし野紀行』（同序）刊。寛政元年執筆。発句一入集。
- 冬、奥州に遊び、冬の句十三を得る。（其梅）
- 同、可楽庵桃路編『芭蕉翁百回忌 華鳥風月集』（同跋）刊。発句一入集。
- この年、雅松編『其みちのく』（同序）刊。山城重厚発句一入集。
- 同、平角編『しばふくかぜ』刊。重厚が序文を寄せ、発句四、歌仙一入集す。
- 〔連衆〕（杉風）・（芭蕉）・重厚・平角。
- 同、重厚編『十波羅蜜』刊。去来・越人・野坡・惟然・支考・許六・其角・嵐雪・文章・曲水の蕉門十哲を評す。「十の指か、ねて見ばや月の友」以下八吟歌仙入集。
- 〔連衆〕重厚・其由・成美・袁丁・寸来・一成・麦宇・宗讃。
- 十二月、歳暮吟「春待や古郷の文の片便」。（俳人重厚私大巻・其梅）

寛政三年辛亥（一七九一） 五十三歳

○一月、歳旦吟「はつ鶏やよその二日は何ごゝろ」。（俳人重厚私大巻）

○同、この年の歳旦吟から「俳人重厚私大巻」（仮題）の執筆がはじまる。同書は、寛政十三年（享和元年）歳旦吟までを収める句帖である。

●同、来之編『除元集』刊。文音にて発句一入集。

●同、紫暁編『あけぼの草紙』刊。在南部重厚発句一入集。

●春、山鳥房晋溪編『はつずり』（同序）刊。在南部重厚発句一入集。

○二月十五日、平角の梅園に、重厚の「花か実の名もひさ残れ園の梅 重厚 寛政三年辛亥二月十五日 円斎平角」の句碑が建立される（平角編『芭蕉百回忌』）。この頃まで奥州に滞在して、春の句二を得る。また、この滞在中に、其角の印を平角に贈る（其梅・随斎諧話）。

●二月、霞打編『俳詣実色』（同序）刊。当世豪家の部に、蝶夢・無外庵既白・不二庵二柳・江涯・几董・白雄と共に登載され、発句四入集す。

●三月、有隣編『たね茄子』刊。アハツ重厚発句一入集。

●春、梅人編『統深川集』（同序）刊。洛重厚発句一入集。

▼四月十二日、義仲寺奉扇会に欠席・欠詠。

○五月五日、「既に九年の春秋を経てふたび岩手の関をこゆる 鑑山や五月五日の草ふまん」の句を得る（はすのくき）。なお、九年前の岩手の関越えは、天明二年秋頃から陸奥に遊んだ『みちのくぶり』をいう。

○六月頃、重厚は「今以江戸に居」る。（寛政三年推定六月二十四日付可卜〈何木〉宛蝶夢書簡）

▼六月十七日、青蘿没す。享年五十二歳。

●六月、松下編『こぞのなつ』（六月二十三日興行）刊。嵯峨重厚発句一入集。

○七月十二日、志雪窓三白編『はすのくき』（同奥）刊。発句二（立句二）、「名月や浮世にくもる人の影」以下三吟歌仙一入集。

〔連衆〕重厚・其黒・三白。

○この頃、成美に会い、句を寄せる。(厚薄集)

○七月二十七日、去来庵において、青蘿追善の俳諧興行に一座する。「蚊ばしらを吹くづしたる嵐かな」以下六吟表六句成る。〔連衆〕重厚・成美・袁丁・宗讃・寸来・是三。(水の月)

●七月、椿花亭西村定雅編『さくら簪』刊。発句一入集。

▼九月十三日、白雄没す。享年五十四歳。

●九月、馬来編『鵜之音』刊。京重厚発句一入集。

●秋、文母編『心一』(同跋)刊。洛嵯峨重厚発句一入集。

○十月十二日、義仲寺時雨会。実門編『しぐれ会』(同日興行)刊。発句一入集。但し、時雨会は欠席。

▼この頃、栗津文庫落成。(しぐれ会)

○同、重厚編「百廻忌小冊」成る(十月二十九日付方壺宛蝶夢書簡)。但し、この小冊については未詳。

○同、重厚、沂風は内裏に召されるが、蝶夢が「重厚は栗津無人にて難遣候。御両子として御取扱ひ候ひて、何の憚有間敷候」とし、参らず(十一月十四日付杜音・曾秋宛蝶夢書簡)。

●冬、玉屑編『水の月』(同序)刊。青蘿追善集。同年七月二十七日の「蚊ばしらを」の表六句入集。

●この年、烏明編『追善談言史』刊。鳥醉二十三回忌・百明七回忌追善集。発句一入集。

●同、紫曉編『この時雨』刊。几童三回忌追善集。江戸重厚発句一入集。

●同、烏明編『俳諧松露庵随筆』刊。発句一入集。

寛政四年壬子(一七九二) 五十四歳

○春、尺艾編『なにはの春』(同跋)刊。発句一、春興の俳諧一入集。

〔連衆〕尺艾・成美・心遂・月川・宗讃・寸来・執筆。

●一月、山鳥坊呂蛤編『初すゞり』刊。在東都重厚発句一入集。

- 春、来之編『春興集』（同序）刊。発句一入集。
- 二月、夜雨庵玄兎編『春の帖』（同序）刊。東武重厚発句一入集。
- 春、蘭更編『奉納其二集』（同奥）刊。発句一入集。
- 三月、義仲寺に帰る。（寛政四年十二月一日付可都里宛成美書簡）
- 四月十二日、義仲寺奉扇会。同会に出座し、題を探る。
- 〔連衆〕 笙洲・実門・蚊山・千影・菊二・青岬・巨洲・松笙・菰支・芹溪・応澄・立卜・唾玉・有文・雨橋・得往（沂風）・乍及・蝶醉・大虫・重厚・蝶夢・瓦全・廻候・駟丹・呉楼・木姿。
- 実門編『奉扇会』（同日興行）刊。洛陽重厚発句一、連句一入集。
- 四月二十七日、義仲寺にて雲裡房三十三回忌追善俳諧「昔植し」歌仙なる。「席上探題」「手向発句」「余興」の発句三なる。
- 〔連衆〕 応澄・巨洲・蝶夢・葛巾・千影・青岬・蚊山・笙洲・芹溪・重厚・得往・蝶醉・立卜・有文・松笙・雨橋・唾玉（椎のわか葉）。
- 六月頃、西下。「重厚は風雅に致西下候」（六月二十一日付魯白宛蝶夢書簡）。
- 奉扇会后、義仲寺住職・無名庵八世主と成る。魯白よりの重厚、沂風への書簡が蝶夢のもとにあり、「重厚は此節より義仲寺え留主居に引こし申候」と伝える（七月二十二日付魯白宛蝶夢書簡）。
- 六月二十三日、文里編『まつものしるし』（同跋）刊。江戸重厚発句一入集。
- 六月、三步庭青人編『みの虫』（同跋）刊。風猪・弁児追善集。洛重厚発句一入集。
- 同、紫曉編『まだら日記』（同奥）刊。在京重厚発句一入集。
- 夏、菊溪庵都雀編『法の水』（同奥）刊。正因十三回忌追善集。発句一入集。
- 七月十九日、青雲居騏道編『新華摘』（同日興行）刊。義仲寺重厚発句一入集。
- 七月、一陽井素外『俳諧古今句鑑拾遺』（同跋）刊。「赤草」の項に発句一入集。

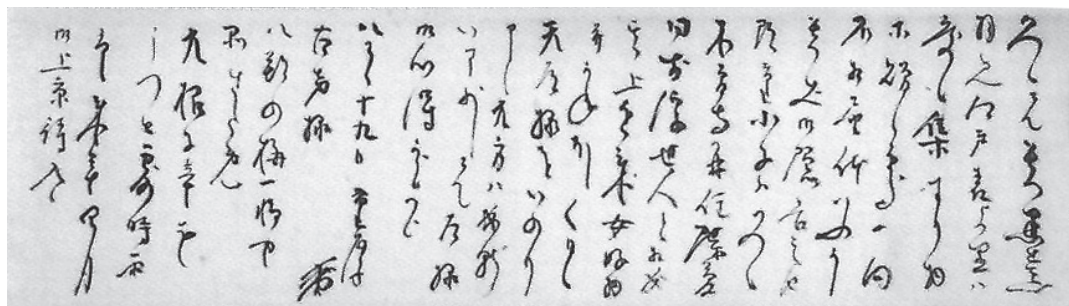


図10 古声宛重厚書簡

○八月十九日、古声に宛て書簡を認める。発句二入。書簡中「小子又々木曾寺再住」とある。（八月十九日付古声宛重厚書簡）【図10】

●八月、脱負編『夢の松風』（同序）刊。風虎追善集。文音にて粟津重厚発句一入集。

●秋、小夜庵五明編『霜の声』（同序）刊。京重厚発句三入集。

○十月十二日、義仲寺時雨会。重厚の主催で、俳諧興行に一座、題を探る。

〔連衆〕五来・重厚・得往・松笙・巨洲・青岬・蚊山・菊二・芹溪・雨橋・千影・笙洲・菟支・乍及・鶴助・柏翁・唾玉・瓦好・有文・立卜・瓜泥・甘谷・呉笠・夜来・桃李・松友・丈石・春芦・蝶夢・可能・蛙方・琴桃・木姿・茶狂・都雀・其成・巴陵・騏道。

重厚編『しぐれ会』（同日興行）刊。発句一、連句一入集。

●同、古声編『もゝとせのふゆ』（同日興行）刊。発句一入集。

●同、菊男編『時雨塚百回忌』（同日興行）刊。発句一入集。

○十一月頃、目の病気が進み、校合が難しい状況であった。「重厚は如仰木曾寺に居申候へ共、眼氣にて校合難成」という（十一月四日付魯白宛蝶夢書簡）。

●冬、定雅編『しなえらび』（同奥）刊。発句一入集。

●この年、跨山編『鷺十上人発句集』（同序）刊。発句一入集。

寛政五年癸丑（一七九三） 五十五歳

○一月、歳旦吟「陽炎や二日見て行浜庇」。（あけぼの草紙）

○同、伏見の梅溪に遊び、紫暁・闌更との三ツ物成る。

〔連衆〕紫暁・重厚・闌更。（前項に同）

●同、紫暁編『あけぼの草紙』刊。義仲寺重厚発句一、三ツ物一入集。

●春、来之編『春興集』（同序）刊。発句一入集。

○二月頃、二条殿より芭蕉百回忌として召される（二月二十三日付去何宛蝶夢書簡）。

▼二月二十二日、義仲寺普請始まる。（前項に同）

●二月、紫曉編『も、ちどり』（同序）刊。粟津重厚発句一入集。

●同、瓜坊・眉山編『続小菰』（同序）刊。発句一入集。

●三月十二日、闌更編『花供養』（同興行）刊。義仲寺重厚発句一入集。

▼三月十九日、古声は、蝶夢の紹介状を持参して、鳴海の千代倉家に蔵する芭蕉の笈を一見する。（千代倉家日記抄四十二）

●春、一無庵丈左編『奥のしほり』（同序）刊。京都サガ重厚発句一入集。

○春頃、母を供して東へ下る。浅間山・善光寺に詣でて春の句を得る。（水薦刈）

○四月十日、この日より同月十二日まで義仲寺奉扇会。芭蕉百回忌の追善俳諧興行百五十巻を巻く。蝶夢後見、重厚主催で執り行う。同日は、蝶夢立句、重厚脇以下一順の表六句をはじめとして、各巻重厚脇句の表六句三十六巻が成る。

〔連衆〕蝶夢・○△重厚・○得往・○千影・○青岬・○巨洲・○△五来・○△芹溪・○△蚊山・○△夜来・○石蘭・○瓜泥・

○△古声・○淇青・○松笙・○△乍及・○△曾秋・○洞夢・○△有文・○△青橘・○巴陵・○習之・○△方壺・○甫尺・

○虚白・○△潭月・○菊男・○瓦全・○△芑支・○△尺艾・○字兆・○雨橋・○馬随・○△蝸茗・○馬田・○△一古・

○△都雀・○△髭風・○志諺・○龍川・○騏道・○△木姿・○△白醉・○△左人・○隴花・○△去何・○△酒動・

○△流水・○塘里・○△素竹・○文耕・○東舟・○芦水・○△杜音・○唾玉・○△吳明・○△蘭蕙・○馬瓢・○△涼秀・

○魚潜・○△五浮・○桃里・○△葛巾・○鶴助・○蓑聞・○效枝・○蘭戸・○瓦好・○何木・杜陵・其成・△瓜沙・○紫甲・

○△柏翁・○△無諍・○△文石・○△李山・△吳笠・雨来・光幽・○△松友・△湖萍・○△鹿輿・○△可章・△理一・

○吳川・○△重定・立卜・雄紅・○△甘谷・馬涯・○△百萌・△不染。

〔注〕これらは俳諧興行の初めの一巡を示すものではなく、それに一座した者の名簿である。また、○は、同月十一日にも

出座。△は、同月十二日にも出座。（祖翁百回忌）

○四月十一、前日に続いて、各巻重厚脇句の表六句四十巻成る。

〔連衆〕蛙声・△洛二・呂蛤・△来之・△慈周・逸人・△賈友・自橋・△芋々・△虹光・△柳露・△蓼化・△艸斧・△素考・

△二薑・一楓・樹石・葉司・干當・△元隣・逮雅・皿茶・△斗雪・尋古。

〔注〕これらは俳諧興行の初めの一巡を示すものではなく、それに一座した者の名簿である。また、前日と重複する者は四月十日の「連衆」の項に○印を付して、ここでは省略した。△は、同月十二日にも出座。（前項に同）

○四月十二日、前日に続いて、各巻重厚脇句の表六句二十七卷成る。

〔連衆〕文誰・右文・狐村・左文・漣月・松波・仙国・雅石・眠花・秋水・梅斜・文橋・花笠・鯉夢・花月・金竟・和笑・李三・来屯・柳夫・駒丹・志江・呉鼎・李逕・秋江・芦月・嘯山・志柳。

〔注〕これらは俳諧興行の初めの一巡を示すものではなく、それに一座した者の名簿である。また、四月十一日・十二日と重複する者は、省略した。（前項に同）

○同、東巖公（二条殿）立句、重厚脇句以下一順の百韻を巻く。

〔連衆〕東巖公・重厚・闌更・玉屑・臥央・右稻・石蘭・涼宇・毛條・五嶺・五齡・蝸国・梧堂・五陵・無曇・楓里・芦涯・東圃・五栗・梅国・士朗・国方・龍山・蛙方・月坡・眉紅・仙子・脱負・五風・其的・乙坡・馬北・良交・狐頂・干當・涼秀・礪水・尺艾・月窓・青牛・羅城・章古・布舟・古瓢・岩苔・化麦・車蓋・梅舎・右香・洗洲・花樵・嵐外・員武・田旭・瓜涼・右契・菁莪・玄駒・桃睡・字竹・完而・松溪・葵・騏六・南陽・大隼・帶梅・呉井・之楓・仙兒・蓬洲・白黛・万岱・素月・昆明・觀風・嵐月・弁二・墨山・素兄・桃之・古塘・月峰・可斗・觸呉・白岡・五艸・兆始・貞松・眉山・朔蘭・巴六・柳子・其成・五周・不木・月居・百池。（前項に同）

右の二条前左大臣東巖公より発句あり。

旅寝しつる道年々の茂り哉 東巖公

君が光にはせを玉捲 重厚

他に、直筆の「正風宗師」額と紫幕を寄進される。（四月二十八日付歩簫宛蝶夢書簡・道の杖）

▼この頃、神祇白川家より「桃青霊神」の神号が贈られる。芭蕉に神号が贈られるのは、次の通りである。

・寛政五年 — 芭蕉百回忌に、神祇白川家から「桃青霊神」の神号が贈られる。なお、同年、二条家から「正風宗師」が追号されている。

・文化三年 — 朝廷から「飛音明神」の神号が贈られる。（明治書院『俳句講座』1、市橋鐸「天保俳諧史」）。この神号の出どころは明確にしないが、芭蕉句「古池や蛙飛び込む水の音」によるものである。同句は、近世後期に様々な影

響を与えた芭蕉頭彰俳諧の象徴的な句の一つであり、この句に因む神号は偶像化された芭蕉を象徴している。

・天保十四年 — 芭蕉百五十回忌に、二条家の幹旋で神祇官領家の吉田家から「花本大明神」の神号が贈られる。なお、二条家には、二条家俳諧宗匠と花の本宗匠の称号がある。

▼同、本山三井寺よりは、紫の菊の幕、提燈等が寄せられる。(四月二十八日付歩簫宛蝶夢書簡)

五月六日付魯白宛蝶夢書簡によれば、二条殿、三井寺御門跡からの寄進については「是は少も看主重厚願出申候にては無之、自然の勢ひに候よし、はじめて参候刻には驚申候。かならず祖翁の余光とは不存候。」という。

○同、尺艾発句、重厚脇の十二吟連句成る。(百華集 所蔵名芭蕉百韻)

百本の扇手向んこの一夏 尺艾

言葉つきせぬ古茶薫る庵 重厚

尺艾編『百華集(所蔵名芭蕉百韻)』(同序)刊。奉扇会と思われる連句一、発句一入集。

〔連衆〕尺艾・重厚・石蘭・古声・五来・魚潜・瓦全・菊男・逮雅・李山・得往・蚊文。

▼同、芭蕉百回忌によせて、播磨旅行中の紫暁が、「年ぐに」の発句を、重厚のもとに贈る。(ももちどり)

○四月二十九日、風律十三回忌追善の俳諧興行に一座する。風律は天明元年四月二十九日没。

〔連衆〕五鹿・重厚・蝶夢・執筆瓦全。(後の旅)

五月、五鹿編『後の旅』(同奥)刊。発句一並びに、風律十三回忌追善の俳諧興行一入集。

●五月十二日、車蓋編『小鍋立』(同日興行)刊。発句一入集。

○五月二十七日、泉福寺において、芭蕉百回忌を修行する。(義仲寺と蝶夢)

●五月、花鏡井燕志・花養窓琴上編『笠の塵』(同序)刊。発句(立句)一入集。但し、付句は、燕志の脇句のみである。

▼同、蝶夢著・狩野正栄画『芭蕉翁絵詞伝』が、芭蕉百回忌にあたって編纂刊行される。

●七月、蝶夢編『新類題発句集』刊。発句十九入集。

●七月、九鳳舎馬肝編『あさぎり』(同序)刊。義仲寺 重厚発句一入集。

●同、支潤編『はなのちり』(同序)刊。粟津重厚発句一入集。

○八月十五日、幻住庵において、芭蕉百回忌を修行する。(義仲寺と蝶夢)

●八月、不夜庵二世五雲編『その秋』刊。太祇追善集。義仲寺 重厚発句一入集。

●同、鳥明編『池のむかし』（同序）刊。皇都重厚発句一入集。

●同、如桂編『秋の声』（同奥）刊。志計追善集。義仲寺 重厚発句一入集。

●九月十二日、魚潜編『花塚集』（同日興行）刊。発句一入集。

●彼岸、平井未両・其朝編『さ、栗の露』（同序）刊。其両三回忌追善集。発句二入集。但し、うち一は、重厚が九州行脚の折の句で、其両の句帳からの再録。

●九月、蝶夢編『笠塚百回忌』（同序）刊。発句一入集。

○同、江戸において、白雄追善の俳諧興行に一座する。「あら寂しこと葉の露の置所」以下八吟歌仙を巻く。

〔連衆〕重厚・心遂・月川・袁丁・寸来・宗讃・成美・執筆。（俳諧冬瓜汁）

●秋、俚尤編『俳諧これもよし』（同序）刊。栗津重厚発句一入集。

●同、其成編『画讃集』刊。大津重厚発句一入集。

●十月五日、田辺（舞鶴）の逸見木越編『烏塚百回忌』（同興行）刊。発句一入集。

▼同、洛東の双林寺西阿弥亭興行が修行。芭蕉句「旅人と」を立句とする蝶夢脇以下一順の歌仙興行あり。（祖翁百回忌）

○十月十日、これより二夜三日間、義仲寺において、芭蕉百回忌追善の念仏を修行、重厚が主催する。（前項に同）

○十月十一日、三井寺の僧正を請して、一座の経陀羅尼が行われる。（前項に同）

○十月十二日、義仲寺時雨会。芭蕉百回忌正当会。「塚に伏ておもへど遠し枯尾花」以下一順五十韻を巻く。

〔連衆〕重厚・蝶夢・石蘭・魯白・扶石・五来・得往・蚊山・乍及・千影・芑支・芹溪・唾玉・夜来・瓦好・有文・青岬・雨橋・古音・石牙・瓦全・紫暁・其成・鯉夢・立卜・朧花・巨洲・鶴助・桃里・蓑聞・馬田・柏翁・杜陵・雄紅・青湖・斗流・尺樹・都雀・志諺・南浦・其園・古塘・桃睡・苢涯・蘭芝・騏道・百萌・葛巾。（前項に同）

○同、完来立句以下一順の俳諧興行成る。但し、表八句以下略。

〔連衆〕完来・重厚・蝶夢・歌白・石蘭・午心・馬肝・執筆。（前項に同）

▼同、湖東多賀の月川庵において、芭蕉百回忌追善俳諧興行。月川立句以下一順の歌仙を巻く。但し、表六句以下略。（前項に同）

○同、平角編『無功德』（同序）刊。義仲寺において、同書の序文を認め、発句一を寄せる。

○同、筑紫高良山社内の芭蕉靈神社碑の銘を記す。

筑紫高羅山社内芭蕉靈神の社碑銘

歌は出雲八重垣 連歌は新破理都久波 俳諧は筑紫の高良山に芭蕉靈神まし／＼て風雅の実を聞給ふ

寛政百回忌の日 粟津野の重厚謹誌

（文化四年十一月十四日奥、南吟著「黄昏随筆」）

ここに、重厚の「今よりはぬさともならむ枯尾花」の句碑が建立される（芭蕉翁略伝）。なお、天保二年建立の翁社がある（石に刻まれた芭蕉）。寛政五年四月十二日の芭蕉百回忌時、芭蕉に神号が贈られた項目参照。

○十月、玉屑編『道の燈かげ』（同序）刊。「前の落柿舎の主重厚」跋文を記し、文音にて義仲寺 重厚発句一入集。

○同、都雀編『みちのかげ』（同序）刊。粟津重厚発句一、芭蕉句「旅人と」を立句とする一順歌仙一入集。

〔連衆〕（芭蕉）・都雀・蝶夢・巨洲・蚊山・乍及・石蘭・千影・五来・芹溪・雨橋・夜来・瓦好・何木・青岬・菟支・得往・有文・松笙・朧花・鶴助・蓑聞・桃里・柏翁・馬田・唾玉・呉笠・瓜泥・雄紅・龍川・杜陵・雨来・淇青・立卜・重厚・執筆。

○同、李山編『月の雪』（同跋）刊。「粟津芭蕉翁於碑前」跋文を認め、義仲寺 重厚発句一を寄せる。

○同、蝶醉編『蕉翁百回忌』（同序）刊。発句一入集。

○同、金令舎道彦・建部巢光・宗讃編〔あみだ坊〕刊。粟津重厚発句二入集。

○同、道彦・巢光・宗讃編『蕉翁墨跡』刊。粟津重厚発句一入集。

○同、貞松編『なもほとけ』（同序）刊。発句一入集。

○同、敲水編『とをかわづ』（同序）刊。発句一入集。

○同、時雨坊一草編『潮来集』（同序）刊。発句二入集。

○十二月、青阿（双林寺堂守）編『こがらし集』（同成立）刊。発句一入集。

○冬、春鴻編『俳諧冬瓜汁』（同跋）刊。白雄三回忌追善集。粟津重厚発句二（立句一）、同年九月興行の「あら寂し」八吟歌仙一入集。

○同、木朶編『松葉塚』（同序）刊。義仲寺 重厚発句一入集。

●同、蘭二編『さ、ふね』（同序）刊。発句一入集。

●同、清夫佐久間義天編『百とせづか兵庫』（同跋）刊。近江重厚発句一入集。

○この年、重厚編『たわらの口』刊。自序。発句六、次の歌仙六入集。

1 二条殿下公立句、貞徳脇、幽斎第三、以下重厚・一成の両吟歌仙。

2 烏丸光広立句、立圃脇、以下重厚・井谷の両吟歌仙。

3 去来立句、其角脇、素堂第三、以下重厚・宗讃の両吟歌仙。

4 芭蕉立句、探丸脇、以下重厚・其由の両吟歌仙。

5 其角立句、嵐雪脇、以下重厚・寸来の両吟歌仙。

6 許六立句、芭蕉脇、蘭嵐第三、以下重厚・袁丁の両吟歌仙。

○同、春坡編『小鳥』・『小艸』刊。橘仙堂善兵衛版。但し、『小鳥』は寛政元年の成立。『小鳥』に序文、発句四十七、歌仙一入集。なお、同歌仙は、寛政元年六月中旬に、几董との書簡によって満尾させたもの。『小艸』に発句六、俳文四（山莊記・長崎行・東夷行・山の名）、次の連句五入集。

1 芭蕉句「春もや、」を立句とする歌仙。〔連衆〕（芭蕉）・春坡・重厚・執筆。

2 芭蕉句「原中や」を立句とする歌仙。〔連衆〕（芭蕉）・重厚・春坡。

3 春花立句の表六句。〔連衆〕春花・春峰・重厚。

4 春峰立句の表六句。〔連衆〕春峰・春花・重厚。

5 春坡の「冬の夜や」を立句とする十二句。〔連衆〕春坡・春花・重厚・無極・南昌。

○同、伊勢南大路の森谷斑鳩が、重厚のもとに身を寄せ、剃髪する。因みに、これ以前の重厚が江戸住いの折に、入門している（霜のかね）。『小艸』（寛政五）に夏の発句と、『さ、栗の露』（寛政五）に秋の発句との入集が初期のものである。

●同、平角編『芭蕉翁百回忌』刊。寛政三年建立の「花か実の」の重厚句碑図、同二年十月十二日芭蕉忌の「芭蕉忌や」の歌仙一入集。

●同、筑紫坊完而編『も、の枯葉』刊。芭蕉百回忌追善集。発句一入集。

●同、車蓋編『椎の陰』刊。芭蕉百回忌追善集。発句一入集。

- 同、青吟編『故郷塚百回忌』刊。発句一入集。
- 同、素大・樗木・野了編『月いづこ』刊。芭蕉百回忌追善集。粟津重厚発句一入集。
- 同、蘭更編『奉納其三集』刊。アハツ重厚発句一入集。
- 同、双鳥編『此まこと』刊。発句一入集。
- 同、丹後河守の無諍編『ずゝ(数珠)塚集』刊。文音にて発句一入集。
- 同、巢居編『ひふみの巻』刊。発句一入集。
- 同、三好梨陰編『とこしへのうめ』(同序)刊。近江発句一入集。

寛政六年甲寅(一七九四) 五十六歳

○一月、柳莊編『水薦菰』(同跋)刊。洛陽重厚発句四入集。「母を供して東へ下る」折の発句、および、善光寺参詣の様子が知られる。

- 二月、柳也編『春眠集』(同奥)刊。柳几追善集。発句一入集。
- 三月十二日、蘭更編『花供養』(同興行)刊。粟津重厚発句一入集。
- 三月、泰古編『霞そめて』(同序)刊。発句一入集。
- 五月、木兎庵米砂編『蓮の浮葉』(同序)刊。素輪追善集。粟津重厚発句一入集。
- 六月、呂蛤編『雁風呂』(同序)刊。粟津重厚序文を寄せる。発句五(立句一)、「秋の風川二筋に流れたり」以下三吟歌仙一入集。但し、同歌仙は、重厚・几重の両吟半歌仙に、呂蛤・重厚の両吟を継いで満尾している。
- 〔連衆〕重厚・几重・呂蛤。
- 夏、蘭更・車蓋編『発句題林集』刊。発句十四入集。
- この頃、烏明編『俳諧松露庵随筆』刊。皇都重厚発句一入集。
- 七月、夏雄編『華の旅』(同序)刊。義天追善集。文通にて近江重厚発句一入集。
- 八月、巢居編『竹のやどり』(同跋)刊。発句一入集。

○九月、重厚編『祖翁百回忌』刊。十卷十冊。井筒屋庄兵衛・橘屋治兵衛版。寛政五年四月十日〜十二日、同年十月十日〜十二日に執行した芭蕉百回忌追善俳諧興行の百韻一、五十韻一、表八句一、表六句一〇四入集。その他は、全国から寄せられた芭蕉追善の俳諧を収めている。

○同、騏道編『草笛』（同跋）刊。発句一、幻住庵興行一入集。

〔連衆〕騏道・臥央・昆明・騏六・巢居・紀鳳・葛巾・干當・蘭蕙・漁更・箕風・百萌・樂二・唐水・青阿・慈周・二薑・吳鼎・吾兮・桐五・馬涯・草斧・巨洲・元隣・素考・牛眠・五英・蓼化・故常・東甫・烏考・成憲・其成・飛川・引牛・以兮・千影・蚊山・鯉一・許風・白孚・曾友・鯉丈・稻香・文山・尼觀寿院・重厚・執筆。

○十月十二日、義仲寺時雨会。重厚の主催で、俳諧興行に一座し、題を探る。

〔連衆〕芄支・重厚・杜凌・青岢・雨橋・五来・朧花・有文・千影・芹溪・乍及・唾玉・夜来・無極・斑鳳・蚊山・立卜・瓦工・巨洲・鶴助・瓦全・桃里・吳笠・木姿・湖萍・夏栗・買山・一蜂・其成・得往・月川・騏道・都雀・志諺・文堂・後菊・左文・橘治。

重厚編『しぐれ会』（同日興行）刊。発句一、連句一入集。

●十一月、二夜庵五芳編『新さむしろ』（同序）刊。近江重厚発句一入集。

○同、畿行編『なぐさみ艸』（同序）の集句がはじまり、重厚は自筆の発句一を寄せる。なお、同帖は、諸俳人の自筆による発句を、長年にわたって収集されたものである。

●同、紫暁編『歩月の章』刊。発句一入集。

○同、三車編『こまつか集』刊。跋文を寄せ、義仲寺重厚発句二入集。

○同、重厚・沂風ともに、内裏に召される。蝶夢は参内せず。（十一月十四日付杜音・曾秋宛蝶夢書簡）

●冬、金兔編『花盛集』（同奥）刊。粟津重厚発句一入集。

寛政七年乙卯（一七九五） 五十七歳

○一月、歳旦吟「歌枕七草などを出たちかな」（春興集）

●同、来之編『春興集』刊。発句一入集。

●同、嗽芳庵猿左編『逢か室』（同跋）刊。洛重厚発句三入集。

●一月二十五日、石蘭編『梅の会』（同日興行）刊。義仲寺重厚発句一入集。

●三月二十八日、東瓦編『ちりゆく花』（同序）刊。知海一周忌追善集。義仲寺重厚発句一、追悼の歌仙一入集。

〔連衆〕東瓦・旧国・闌更・五雲・定雅・斗雪・呂蛤・菱湖・雷夫・狐秀・車容・一虎・都雀・熊三・春坡・春花・来之・春峰・南昌・其汀・几溪・呂舟・呂計・鈍来・虎岳・自懷・五原・橘仙・重厚・斑鳩・無極・あし丸・金兔・買山・嘯山・執筆。

●三月十二日、闌更編『花供養』（同興行）刊。江州粟津重厚発句一入集。

●三月、青流洞青鯉編『寛七集』刊。江州重厚発句一入集。

○九月、丈左編『俳諧八僊歌』（同跋）刊。東洋法眼筆の重厚消像画一葉に、重厚が発句を記したものを収める。丈左との両吟歌仙一入集。

〔連衆〕丈左・重厚。

●秋、一茶房亞堂編『たびしうゐ』（同序）刊。発句一入集。

●同、五雲編『あきの別れ』（同序）刊。義仲寺重厚発句一入集。

○十月十二日、義仲寺時雨会。重厚の主催で、俳諧興行に一座し、題を探る。

〔連衆〕雨橋・重厚・蚊山・乍及・斑鳩・巨洲・千影・杜凌・方広（沂風）・五来・青寄・朧花・芑支・有文・無極・潭月・藏六・ノへ・呂蛤・百杵・都雀・一陽・志秀・可能・花縣・元亨・繡虎・李三・止雀・買山・北花・一茶・丈左・花月・騏道・馬涯・墨古・其成。

重厚編『しぐれ会』（同日興行）刊。発句一、連句一入集。

○同、田東庵花縣編『尾華うつし』の序文を、堂宰重厚記す。発句一入集。

●十月、蝶夢編『俳諧名所小鏡』刊。京重厚発句二十二入集。

○十一月、幻住庵において、俳諧興行あり。枇杷園井上士朗らと同座する。（燕々重厚年譜）

●同、騏道編、馬涯・白孚校合『鉢かづき』刊。幻住庵探題の発句一入集。

▼十二月二十四日、蝶夢没す。享年六十四歳。

●十二月、冠芳斎閑空編『俳諧きまかせ』（同跋）刊。粟津重厚発句一入集。

○冬、呂蛤編『金剛心』（同跋）刊。几董七回忌追善集。重厚序文を寄せる。粟津重厚発句二（立句一）、歌仙二入集。

1 「雪仏むかし才ある男かな」以下一順歌仙。

〔連衆〕重厚・呂蛤・方広・斑鳩・蚊山・千影・五来・春坡・熊三・狐秀・杜栗・夏田・車容・菱湖・其汀・青我・春花・春峰・南昌・一虎・波静・几溪・鈍来・自懷・呂舟・五原・文晴・呂計・雷夫・騎石・紫雀・倭更・其成・橘仙・紫暁・執筆。

2 三吟歌仙。〔連衆〕春坡・呂蛤・重厚。

○同、春陽舎山色編『かかしの影』（同跋）刊。来之追善集。粟津重厚発句一、追善の俳諧興行入集。

〔連衆〕嘯山・山色・賈友・老箸・志江・秋虹・鷺卿・林鳥・一冠・思成・至幸・富嶺・風水・路朝・梅風・巴濠・文可・志桃・淇岸・箕風・駝岳・雅石・城鳥・秋花・松波・古野・五口・眠花・松翠・芹水・仙車・花竺・駟丹・重厚・雪馬・金波・遠山・竹下・呂蛤・佐野・白鷗・錦歌・秋水・蓬雨・来雨・素流・千賀・橘仙・黛山・瓦全。

○十二月三十日、義仲寺において、蝶夢の初七日法会を営む。（蝶夢年譜）

●この年、紫暁編『雪の光』刊。几董七回忌・蕪村十三回忌追善集。発句一入集。

●同、烏明編『俳諧松露庵随筆』刊。京都重厚発句一入集。

●同、完来編『秋の夜』刊。発句一入集。

寛政八年丙辰（一七九六） 五十八歳

○一月、歳旦吟「餅腹や西湖の柳夢に見し」（三朝喆）。「羽子板に乗て置けり落椿」（梅の会）。「かけ的に霞を射ぬく乙矢哉」（俳諧松露庵随筆・都雀春興集・花無津美）。

○一月二十四日、蝶夢の初月忌法要を義仲寺に営み、龍が岡に碑を建立する。（蝶夢年譜）

●同、石蘭編『梅の会』（同日興行）刊。粟津重厚発句一入集。

- 一月、烏明編『俳諧松露庵隨筆』刊。皇都重厚発句一入集。
- 同、都雀編『春興集』刊。粟津重厚発句一入集。
- 同、二夜庵編『三朝吟』刊。アハツ重厚発句一入集。
- 同、葎雪庵編『歳旦』刊。粟津重厚発句一入集。
- 同、完来編『歳旦』刊。粟津重厚発句一入集。
- 同、猿左編『竹原聖』(同跋)刊。洛重厚発句三入集。
- 二月、丈左編『狭名辺墳集』(同序)刊。粟津重厚発句一入集。
- 同、木茶還曆記念集『寿詞石腸児』(同跋)刊。湖南重厚発句一入集。
- 三月十二日、闌更編『花供養』(同序)刊。粟津重厚発句一入集。
- 春、買山編『春の画合』(同奥)刊。アハツ重厚発句一、次の連句三入集。及び、「千句集重厚評高判」の十句選を入集する。
- 1 九吟歌仙〔連衆〕吟路・重厚・買山・如木・梅斜・一蜂・瓢庵・梅径・三千貫。
- 2 三吟半歌仙〔連衆〕一蜂・重厚・買山。
- 3 両吟表六句〔連衆〕一蜂・重厚。
- 同、丈左編『花無津美』(同跋)刊。跋文を寄せ、粟津重厚発句一入集する。
- 同、岷山編『春囊』(同跋)刊。前落柿舎重厚発句一入集。
- 四月、至峰編『夢のまくら』(同跋)刊。義仲寺重厚発句一入集。
- 五月、旦々坊編『いくしみつ』の跋文を記す。
- 同夏、『いくしみつ』(同序)刊。跋文を寄せ、発句一を入集する。
- 同、八巢蕉雨編『松の炭』刊。アハツ重厚発句一入集。
- 六月二十二日、孔雀庵志江編『なつくさ』(同序)刊。文霞十三回忌追善集。近江重厚発句一入集。
- 六月、井口菊二編『かなしぶみ』刊。蝶夢追善集。文通にて発句二入集。
- 七月十二日、青々舎竹也編『其蓑塚』(同序・跋)刊。義仲寺重厚発句一入集。
- 七月十五日、泊庵の魂祭に列する。(燕々重厚年譜)

○九月、芳園編・鈍雅画『俳諧百家仙』(同序)刊。重厚肖像画一葉および、発句一入集。

●同、七彩堂奇淵編『松風会』(同序)刊。栗津重厚発句一入集。

●秋、丈左編『な、もみぢ』(同跋)刊。湖南重厚発句一入集。

●同、八桑谷山人入素編『勸進帖』(同跋)刊。栗津重厚発句一入集。

●同、青鯉編『寛政八丙辰秋帖』刊。発句一入集。

●この頃、可都里・士朗編『な、し土里』の寛政八年の項に、秋の発句一入集。但し、刊行は同十年。

○十月十二日、義仲寺時雨会。重厚の主催で、俳諧興行に一座し、題を探る。

〔連衆〕芹溪・重厚・千影・朧花・蚊山・五来・杜凌・斑鳩・有文・一陽・乍及・方広・雨橋・友文・可能・去何・瓦全・馬涯・都雀・止雀・花縣・亞溪・騏道・甫尺。

重厚編『時雨会』(同日興行)刊。発句一、連句一入集。

○十月、柏原瓦全・方広(沂風)編『意新能日可麗』刊。蝶夢一周忌追善集。発句二、瓦全との両吟歌仙一入集。

〔連衆〕瓦全・重厚。

寛政九年丁巳(一七九七) 五十九歳

●一月、二夜庵編『三朝吟』(同奥)刊。江アハツ重厚発句一入集。

●同、猿左編『さ、れ石』(同跋)刊。洛重厚発句二入集。

●同、露下亭秋水編『春興集』刊。発句一入集。(燕々重厚年譜)

○二月十六日、「西上人の六百年忌を草庵にいとなみて 娑婆に居てし事かたし法の花」の句を詠む。(ぬさぶくろ)

同秋、一草編『ぬさぶくろ』(同序)刊。西行追善の発句一入集。

○三月一日、飛驒の加藤歩簾に書簡を認める。(燕々重厚年譜)

●三月十二日、蘭更編『花供養』(興行)刊。栗津義仲寺重厚発句一入集。

○三月、去来百回忌取越につき、成美に勸進する。(随斎句藁・菊のうはさ)

●春、蕉雨編『万寿楽』刊。発句一入集。

●同、耕淵編『はいかいよひの春』刊。近江粟津重厚発句一入集。

●同、蓬戸亭壺仏編『つとのくさぐさ』(同跋)刊。義仲寺重厚発句一入集。

●四月十七日、玉屑編『散はな』(同日興行)刊。但し、寛政七年三月序。青蘿七回忌追善集。義仲寺重厚発句一入集。

●五月六日、古元編『つゆのそで』(同跋)刊。隆枝追善集。文通にて大津義仲寺重厚発句一入集。

●夏、醉郷祭酒長斎編『やまかげ集』(同序)刊。発句一入集。

●七月、暮柳舎車大編『ゆめのあと』(同序)刊。アハツ重厚発句一入集。

○閏七月二十三日、洛東岡崎の本光寺において、蝶夢三回忌追善の俳諧興行あり。「露三とせ苔むす石となりにけり」以下一順連句(四十六句)を巻く(萩のむしろ)。

〔連衆〕重厚・方広・瓦全・其争・巴陵・只言・效枝・年男・只有・松童・五来・如幻・去何・千影・唇風・誰姿・蚊山・此得・温中・芹溪・都雀・花月・甫尺・其成・志江・雅石・秋水・素朴・賈友・鶴翅・林鳥・梅兄・青暉・如風・青岬・雨橋・乍及・東舟・瓜泥・菊二・夏栗・芹水・巨洲・芹谷・斑鳩・執筆。

●八月、有無庵五芳選『いぬ槇』(同奥)刊。粟津重厚発句一入集。

●九月、田禾(飯田篤老)編『猿法師ものがたり』(同跋)刊。発句一入集。

●同、長翠編『黒襦宜』(同序)刊。発句一入集。

●同、冠羅・春蟻編〔冠羅春蟻両吟集〕刊。附録の秋興に発句一入集。

○十月十二日、義仲寺時雨会。重厚の主催で、俳諧興行に一座し、題を探る。

〔連衆〕蚊山・重厚・杜凌・四老・芹溪・雨橋・五来・一陽・乍及・有文・千影・鶴助・立卜・呉笠・左文・桃里・右近・斑鳩・巨洲・朧花・方広・唾玉・騏道・一茶・青岐・槿馬・湖萍・応美・歌夕・としを・馬涯・廬中・一松・箕風・文行・執筆。

重厚編『時雨会』(同日興行)刊。発句一、連句一入集。

●十月、梅雨編『くさのかげ』(同序)刊。発句一入集。

●同、尚規編『冬の月』(同序)刊。近江重厚発句一入集。

- ▼十一月一日、石牙没す。享年六十五歳。
 ●冬、魯白編『遠山の雪』（同跋）刊。蝶夢三回忌追善集。近江重厚発句一入集。

寛政十年戊午（二七九八） 六十歳

- 一月、歳旦吟「小正月鼠の宮に参らばや」。（あけぼの草紙）
 ●同、紫暁編『あけぼの草紙』刊。発句一入集。
 ●二月、方広（沂風）編『萩のむしろ』（同跋）刊。寛政九年閏七月二十三日の蝶夢追善俳諧興行を収める。
 ○この頃、蝶夢の供養のために、経を一石に一字ずつ書写する。（萩のむしろ）
 ●三月、希言編『百物語』（同跋）刊。発句一入集。
 ○春、義仲寺を斑鳩に譲る。斑鳩は義仲寺を引継ぎ、号を祐昌に改める。（時雨会）
 ●同、歌雄編（堅田集）（同序）刊。大津重厚発句一入集。
 ●同、枇杷園士朗編『山吹集』（同跋）刊。アハツ重厚発句一入集。
 ▼五月三日、蘭更没す。享年七十三歳。
 ●七月初め、斗入編『花たちばな』（同跋）刊。発句一入集。
 ●七月十日、猿左編『俳諧発句帳』刊。洛重厚発句一入集。
 ●九月、青々処卓池編『橋日記』刊。発句一入集。
 ●同、幾夜庵斗醉編『こぞのしをり』刊。大津重厚発句一入集。
 ●同、宝晋堂呉山編『すゝきの月』（同序）刊。文通にて粟津重厚発句一入集。
 ●秋、黄華荈升六編『黄華集』（同序）刊。アファミ重厚発句一入集。
 ●同、尺艾編（なにはの月）（同跋）刊。近江重厚発句一入集。
 ●同、玉屑編『あきの錦』（同序）刊。発句一入集。
 ○十月十二日、義仲寺時雨会。同会に出席し、題を探る。

〔連衆〕四老・祐昌・千影・芹溪・蚊山・杜凌・五来・左文・一陽・雨橋・有文・呉笠・重厚・湖萍・立卜・ノヘ・騏道・馬涯・升六・文行・乙人・沙陸・青岬・唾玉。

祐昌編『時雨会』（同日興行）刊。発句二入集、うち一は「桃青院」とする。連句一入集。

○この頃、視力がはなはだ衰えて、「二つの目を失」うという（時雨会）。ただし、享和元年の歳旦吟までを記す「俳人重厚私大巻」が自筆とみられ、文字に乱れがあるものの完全に失明しているのではないと推察される。

●十一月、漫々編『霜夜ほとけ』（同序）刊。石牙一周忌追善集。江州重厚発句一入集。

●十二月、一草編『つくだ集』刊。アハツ重厚発句一入集。

●冬、二木編『しら梅』（同序）刊。発句一入集。

寛政十一年己未（一七九九） 六十一歳

●一月、榎本星布編『松の花』（同跋）刊。粟津重厚発句一入集。

●同、有竹居万和編『松内集』（同校合）刊。義仲寺重厚発句一入集。

●同、丈左編『発句題苑集』刊。発句四入集。

●二月、拾宜編、交風追善集『春のあらし』（同序）刊。卷末に前義仲寺重厚発句一入集。

●三月十二日、成田蒼虬編『花供養』（同興行）刊。義仲寺重厚発句一入集。

●三月、成美編『浅草はうご』（同奥）刊。発句一入集。

●春、尺艾編『俳諧花月集』（同序）刊。近江重厚発句一入集。

●同、芙蓉窓来雅編『華の土産』（同序）刊。大津重厚発句一入集。

●同、升六編『花柑子』刊。アファミ重厚発句一入集。

●五月、八千坊駝岳編『俳諧十家類題集』刊。附録の部に発句一入集。

▼六月十二日、吉田保次郎宛泰溪漢書簡あり。泰溪、嘯山、空中庵南嶽との三吟を抜き書きするという。同年九月興行の『菊のうはさ』に入集のものであろう。

●夏、銀杏庵柴居編『くらま畚』刊。粟津重厚発句一入集。

○九月十日、落柿舎において、去来百回忌追善俳諧興行。九十六回忌を取越して執行。重厚の後見で、落柿舎三世の泰溪が主催する。俳諧興行に一座し、題を探る。

〔連衆〕琴舟公・泰溪・重厚・吾同・狐洲・柜柳・彦太・去舟・南嶽・旦烏・六蔵・蘇鎮・樟鹿・蚊石・花紅・吾来・方広・休山・祐昌・又丸・百丸・都雀・東鳥・喜叶・鶴翅・自来・九和・檀姿・樹山・鶴太郎・枕流・林鳥・半斗・執筆。
(菊のうはさ)

○同、泰溪編『菊のうはさ』(同日興行)刊。去来百回忌追善集。発句四、連句二入集。連句の一は、同日の落柿舎歌仙興行。他は、去来句「柿ぬしや」を立句とする脇起り半歌仙。

〔連衆〕(去来)・泰溪・重厚。

○九月、星布編『都鳥』(『みどりの松』とも)(同序)刊。重厚は「義仲寺評」の選句二十七と、発句四入集。春鴻・其堂・完来・耕淵・丈左・雨什・虎杖・可都里・士朗・星布らとともに選者に加わる。

●秋、奇淵編〔松風会〕(同序)刊。義仲寺重厚発句一入集。

○十月朔日、秋葉山に出掛けた帰りに、木朶の紹介状を携え、芭蕉の笈を蔵する鳴海の千代倉家を訪ねるが、七代当主伝芳の体調が勝れず、断られる。「粟津義仲寺僧秋葉山帰りにて、吉田宿木朶子状相添来候得共、自分不快旨断申遣」とある(千代倉家日記抄四十二)。

○十月十二日、義仲寺時雨会。同会に出座し、題を探る。

〔連衆〕千影・祐昌・巨洲・左文・又呼・杜凌・重厚・芹溪・雨橋・有文・五来・湖萍・宇洋・唾玉・呉笠・一陽・騏道・升六・四老・文行・未塵・馬田・万和・去何・梢舟・ノへ・方明・執筆。

祐昌編『時雨会』(同日興行)刊。発句一、連句一入集。

●十二月二十五日、紫曉編『常磐の香』(同日興行)刊。燕村十七回忌追善集。発句一入集。

寛政十二年庚申（一八〇〇） 六十二歳

- 一月、青鯉・清流編『浪速帖』刊。粟津重厚発句一入集。
- 同、燕市編『徳万歳（内題、品さだめ・笠やどり）』刊。発句一入集。
- 同、凡化編『鬼やらひ』（同跋）刊。近江重厚発句一入集。
- 三月五日、義仲寺 重厚は、一茶宛に、摺物入りの書状を認める。騏道・祐昌発句とともに発句二を記す。四月二日に一茶の許に届く。（急通記）
- 三月、亨編『塵窪（別題まさきつる）』（同跋）刊。粟津重厚発句一入集。
- 同、小蓑庵支元編『いはな集』刊。桃青院 重厚序、発句一入集。
- 同、あかざ庵青岐編『さくら塚』（同奥）刊。義仲寺 重厚発句一入集。
- 春、升六編『花見次郎』（同序）刊。アヰミ重厚発句一入集。
- 同、玉屑編『はるのひかり』（同序）刊。発句一入集。
- 四月、東几・己千編『二季のつゆ』（同跋）刊。百尾（寛政十年六月二十五日没）・山呼両士追善集。近江重厚発句一入集。
- ▼四月三十日、沂風没す。享年四十九歳。
- 五月八日、重厚送付の寛政十年刊『しぐれ会』が、須原屋より一茶のもとに届けられる。（急通記）
- 五月十五日、越後の井口茂兮・鈴木牧之宛に書簡を認める。善光寺奉額の十評の一人に加わり、点料として「南鐙五片」を落掌したことが知られる。同撰は、享和元年八月序『十評発句集』に入集。
- 五月二十七日、下村春花の三十五日追善の発句を寄せる。（藪かうじ）
- 五月、猿左編『手児奈集』（同奥）刊。発句一入集。
- 同、玉屑編『槐亭集』（同跋）刊。発句一入集。
- 六月、一炊庵編『宗因文集』（同序）刊。近江重厚発句一入集。
- 同、奇淵編『新かはづ合』（同序）刊。近江重厚発句一入集。
- 夏、升六編『俳諧発句題葉集』（同序）刊。近江重厚発句三十三入集。

○七月七日、七夕の句「みずいらず聞ざる恋やおしの歌」を得る。(俳人重厚私大巻)

●八月、春坡編『藪かうじ』刊。春花追善集。粟津重厚・桃青院 重厚発句三入集。

●九月、魯石編『萩の露』(同跋)刊。義仲寺 重厚発句一入集。

●秋、奇淵編『松風会』(同序)刊。義仲寺 重厚発句一入集。

○十月十二日、義仲寺時雨会。同会に出座し、題を探る。

〔連衆〕又呼・祐昌・千影・士篤・吐月・瓜泥・不染・雨橋・龍天・唾玉・有文・呉笠・四老・左文・巨洲・芹溪・杜凌・鴻水・文行・蕉雨・魯江・字洋・聞證・重厚・阿声・五来・方明・騏道・塘里・百杵・藏六・如毛・一陽・湖萍・北至・太楞・ノヘ・汝海・百丸・宋和・双南・玉洋・岐東・執筆。

祐昌編『時雨会』(同日興行)刊。発句一、連句一入集。

○十一月八日、祐昌は、義仲寺『時雨会』を、成美・巢兆宛を含めて、一茶に送る。(急遞記)

●十一月、露栄編『筆のこほり』(同跋)刊。発句一入集。

●同、草露庵文兆編『冬扇』(同跋)刊。近江重厚発句一入集。

○冬、星布編『ふぐるま』(同序)刊。義仲寺 重厚は、月並選句と、発句一入集。丈左・虎杖・其堂・完来・春鴻・耕淵・雨什・葛三・星布らとともに前年に続いて月並選句に携わる。

●同、桂亭鶴雄編『志珂不元』(同序)刊。近江重厚発句一入集。

●同、三宅嘯山編『俳諧獨喰』刊。発句二入集。

●この年、耒耜編『菊の香』(同序)刊。義仲寺 重厚発句一入集。

●同、小見山天老編『梅藏人』刊。発句一入集。

○十二月、歳暮吟「行としや勤て至るもの忘」。(俳人重厚私大巻)

寛政年間

○重厚編『あさかり』刊。発句一入集。北村季吟・松尾宗房等古人の書簡・俳文を集めたもの。寛政元年刊『浅草』に広告

が出ている。

●重厚が義仲寺を三井寺山内光浄院の末寺とする。本稿「元文四年」（3頁）の項、三井寺の人別帳参照。

義仲寺むかし本山なき寺は停止のよし、公儀より仰られし事あり。其節三井園城寺の末寺となる。其時に先師蝶夢、此のち代々持僧は俳諧師相続すべきよしを三井へ願はる。其趣寺へも御承引ありしを、近ごろ重厚、又よのつねの末寺となせしよし。それより次第に祐昌の代に至りて淋しく成行侍ると也。（黄昏隨筆）

○六月十九日、春坡に宛て善光寺柳莊の上京、猿左の摺物送付を報せる。重厚の善光寺参詣のうちの一つが、寛政六年成立の柳莊編『水薦菰』に出る。また、猿左編の刷物に重厚の句が入集したものに寛政七年成立『逢が室』、同八『竹原聖』、同九『さざれ石』、同十『俳諧発句帳』、同十二『手児奈集』の五冊がある。（六月十九日付春坡宛重厚書簡）【図11】

○春坡が幻住庵に芭蕉彩色木像を寄付するにあたっての取次をする。木像台の裏に「国分村幻住庵本尊はせを翁木像寄付 京師下村春坡 取次義仲寺重厚」とある。大津市泉福寺に蔵する。（図録「芭蕉と近江の門人たち」）

○夜来・無極・湖萍・斑鳩（祐昌）・重厚らの発句一枚摺刊。「斑鳩」の号は寛政十年夏以前。

○寛政十年夏以降、片仮名・平仮名のいろは歌のそれぞれを頭に据えて、連句二巻を試みる。また、一から十までと、百千万億のそれぞれを頭に据えた冠句十四句を成す。

（祐昌編『俳諧以呂波韻』）

○風羅堂関叟編『夏木立』刊。発句四、其角句「鶯の身を」を立句とする表六句一入集。「連衆」（其角）・重厚・祐昌・執筆。「祐昌」の号は寛政十年夏以後。

○上野国の山行らの芭蕉句碑の建立を後見する。「時鳥招や麦のむら尾花 翁 上毛新

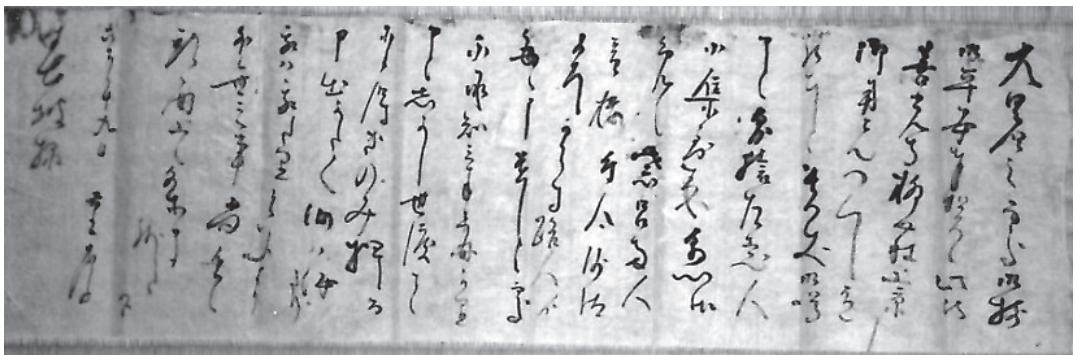


図11 春坡宛重厚書簡

田境」「無名庵第七世重厚書」とする。(石に刻まれた芭蕉)

●来之編『春興集』刊。発句一入集。

●一幹著青容編『一幹老人句集』刊。洛陽重厚発句一入集。なお、重厚句は寛政元年の几董『初懷紙』に入集している。

●井眉編『正月日記』(執筆)刊。一月三日、アハツ重厚発句一入集。

●暁台編『熱田三歌仙』刊。但し、安永四年序、文化二年頃跋。粟津重厚発句一入集。寛政九年春前後の刊行か。

●関叟編『すゝぬき』刊。義仲寺重厚発句一入集。

●南枝編『西国順廻うめ柳さうし』成る。諸俳人の自筆句帳。桃青院重厚発句一を寄せる。

●恒丸編『続埋木』刊。近江重厚発句一入集。

●淇竹編『砧のひゞき』刊。粟津重厚発句一入集。

▼芭蕉の陶像を瓦師井上七左衛門に焼かせる。(錫馬著義仲寺)

享和元年(寛政十三年二月五日改元) 辛酉(一八〇一) 六十三歳

○一月、歳旦吟「朔日の梅一りんや日のはじめ」。(俳人重厚私大巻)

○同、自筆句帖(俳人重厚私大巻)成る。発句三十、俳文十一、画三、歌三、その他一あり。

●三月、橋夢編『なみのおと』(同跋)刊。発句一入集。

●同、友国・布石・瑞馬・雪寿・魚昭・井眉編『句六景集』(同序)刊。アハツ重厚発句一入集。

●同、史公編・曾大校『新題林発句集』(同序)刊。発句五入集。

●春、桃亭秋屋編『花はさくら』(同序)刊。発句一入集。

▼四月十四日、嘯山没す。享年八十四歳。

●四月、桃舎編『花のおく』(同序)刊。江州粟津重厚発句一入集。

●四月、若人編『鶴芝四』(同跋)刊。発句一入集。

●五月、宗祇庵香風編『田のほとり』(同序)刊。宗祇三百年忌集。近江重厚発句一入集。

▼六月十九日、烏明没す。享年七十六歳。

●六月、岱青編『蒿』刊。発句一入集。

●同、士朗・道彦・李台編『鶴芝集』刊。発句二入集。

●夏、蛙方編『画兄弟』（同跋）刊。義仲寺重厚発句一入集。

●同、馬印編『はるのすさみ』（同跋）刊。発句一入集。

●同、周義編『翌の花』（同跋）刊。夜話亭權馬追善集。序文を寄せ、発句一入集す。

●七月、塘里編『はつかづき』（同序）刊。月川追善集。序文を寄せ、発句一入集す。

○八月、星布編『蝶の日かげ』（同跋）刊。芭蕉句「蝶の飛ばかり野中の日かげ哉」の句碑建立記念集。序文を寄せ、発句一入集す。

●同、天姥虎杖編『つきよほとけ』（同跋）刊。白雄追善集。近江重厚発句一入集。

○同、茂分編『十評発句集』（同序）刊。十人の評者のうちの一人として、湖南義仲寺重厚奉納句の撰を行う。

○十月十二日、義仲寺時雨会。同会に出席し、題を探る。

〔連衆〕龍天・祐昌・五来・芹溪・杜凌・芹江・千影・又呼・蕉雨・四老・鴻水・宇洋・湖萍・唾玉・有文・呉笠・蓬皐・騏道・阿声・東白・京夢・亀梁・未塵・亞溪・去何・此得・干當・北莖・方明・如竹・重厚・ノへ。

祐昌編『時雨会』（同日興行）刊。発句一、連句一入集。

○十月二十三日、義仲寺においての「夜しぐれや嘶し相手も皆若し」以下三吟半歌仙の几董追善興行あり。

〔連衆〕重厚・紫暁・祐昌。（夢の猪名埜）

●十一月、九淵斎宴々編『栗まき集』刊。栗津重厚発句三入集。

○十二月二十三日、蝶夢七回忌追善の俳詣興行に一座する。

〔連衆〕故蝶夢・古声・瓦全・李山・重厚・祐昌・巨洲・乍及・瓜泥・不染・唾玉・芹溪・淇青・東舟・五来・千影・杜凌・菊二・騏道・蘭之・三敲・家風・月巢・秋水・誰姿・志江・雅石・竹下・何大・塘里。

●十二月、古声編『比叡の月』（同跋）刊。蝶夢七回忌追善集。序文、発句一、十二月二十三日の連句一入集。

○この頃、生涯禁足の誓をたてる。（比叡の月）

●十二月、五彩堂桐栖編『ちどりぎ、』（同序）刊。発句一入集。

○冬、紫暁編『夢の猪名埜』（同序）刊。几童十三回忌追善集。発句二（立句二）、十月二十三日の三吟半歌仙一入集。

●この年、秋暮亭葛三編『風やらい』刊。近江重厚発句一入集。

●同、車大編『あめのはし』（同執筆）刊。アハツ重厚発句一入集。

●同、菊二編『夜の梅』刊。青岬追善集。発句一入集。（燕々重厚年譜）

享和二年壬戌（一八〇二） 六十四歳

○一月、歳旦吟「元日や人の日までは雨なかれ」。（無底籠）

●二月、白図編『三日月集』（同奥）刊。発句一入集。

●同、志朗編『玉笈集』（同奥）刊。発句一入集。

○三月、丈左還曆集『杖の節』（同年春序）刊。粟津重厚跋文、発句一入集。跋文に「病眼終に毫とる事を忘れ日々物ぐさく何せんすべなし」という。なお、花押がある。

●同、空山坊白醉編『ちさとの春』刊。粟津重厚発句一入集。

●四月十四日、滄浪居三宅李流編『俳諧かれ蘆』（同筆）刊。嘯山追善集。江粟津重厚の追善発句一入集。

●夏、夜人・松菊・桃二・時来編『面目棒』（同跋）刊。アフミ重厚発句一入集。

●同、湖水編『まつばかき』（同序跋）刊。アハツ重厚発句一入集。

▼七月十一日、瀧沢馬琴が落柿舎を訪れるが、かなり荒廃していたらしく、左の如く記している。（燕々重厚年譜）

さかの落柿舎は、二尊院より四五町間、道藪の中にあり。土人もしらず。今はもる人もなくて、その地主も農民の得となる。座敷二畳、勝手一畳、甚だくづれたり。

柿の木や月ばかりもる秋の庵

○十月十二日、義仲寺時雨会。祐昌は筑紫に旅行中のため、これにかわって、五来・重厚が同会を執行する。俳諧興行に一座し、題を採る。

〔連衆〕 宇洋・五来・千影・芹溪・龍天・杜凌・又呼・鴻水・芦江・蕉雨・有文・唾玉・左文・士篤・不染・瓜泥・重厚・烏頂・鶴助・湖萍・騏道・漁更・蓬皐・史明・桐五・四老・澗齋・瓦全・玉洋・布雪・丈左・玉也・儲之・買山・是三・執筆。

五来・重厚編『時雨会』（同日興行）刊。発句一、連句一入集。

●同、玉洋編『雪のふくろ』（同序）刊。発句一入集。

●十月、呉山編『無底籠』（同跋）刊。アハツ重厚発句一入集。

○冬頃（十月廿七日か）、義仲寺において、二柳らと同座の十吟歌仙興行に一座する（不二庵追悼句集）。

〔連衆〕 奇淵・重厚・不二・孚舟・蘭室・冰几・井眉・桃処・左蘭・執筆。

●冬、雲浪舎編・青雲下校『雪つぶて』（同跋）刊。発句一入集。

享和三年癸亥（一八〇三） 六十五歳

○一月、歳旦吟「ニツ有正月うれし神参」。（曙草紙・都会帖・在原文庫）

○同、歳旦吟「正月や閏も有てたのもしき」。（三津人立机記念俳諧集）

●同、三津人編「三津人立机記念俳諧集」（同序）刊。ヨシナカ寺重厚発句一入集。

●同、尺艾編『芭蕉翁古式之俳諧』（同奥）刊。粟津重厚発句一入集。

●同、半醒庵玉洋編『みどりぶくろ』刊。発句一入集。

●春、春夜楼編『曙草紙』（同筆）刊。発句一入集。

●同、生々瑞馬編『都会帖』刊。粟津重厚発句一入集。

▼三月二十八日、二柳没。享年八十一歳。

○四月三日頃、二柳の初七日に、アハツ重厚は追悼の一句を詠む。（不二庵追悼句集）

この後、「不二庵追悼句集」成る。享和二年冬頃（十月二十七日か）、義仲寺における二柳らと同座の十吟歌仙興行も入集。

○夏、可中庵文角編『わかば集』刊。重厚自筆の句稿一、および肖像画一葉入集。

●九月二十六日、奇淵編『松風会た、び草』（同日興行）刊。発句一入集。
●秋、麦太編『ほとゝぎす集』（同序）刊。義仲寺重厚発句一入集。

○十月十二日、義仲寺時雨会。芦江・重厚の主催で、俳諧興行に一座し、題を探る。

〔連衆〕蕉雨・芦江・龍天・重厚・又呼・鴻水・唾玉・有文・五来・杜凌・宇洋・芹溪・烏頂・千影・是三・不染・瓜泥・瓜州・藏六・温中・青霞・洞夢・鷺橋・巴山・ノヘ・月江・芦水・師由・流霞・東走・四老・左文・史明・馬田。

芦江・重厚編『時雨会』（同日興行）刊。発句一、連句一入集。

●十月、菊溪編『ゆめのあきふゆ』（同跋）刊。粟津重厚・近江重厚発句二入集。

●冬、尺艾編『月雪集』（同序）刊。よし仲寺重厚発句一入集。

●この年、菊溪編『雪のやま』（同序）刊。近江重厚発句一入集。

文化元年（享和四年二月十一日改元） 甲子（一八〇四） 六十六歳

○一月、大津馬場墓地の入口に供養碑を建立する。同正面「法界万霊」、右側面「享和甲子正月」、左側面「願主重厚」。

●同、名利庵かつら編『初文台』（同興行）刊。義仲寺重厚発句一入集。

●春、五彩堂矩随編『試毫集』刊。義仲寺重厚発句一入集。

○一月十八日、重厚没す。大津馬場墓地に葬られる。墓碑正面「桃青院重厚」、同背面「享和甲子正月十八日」。

●二月、蚊足庵墨樵編『草の露』（同序）刊。発句一入集。

●三月、存古・麦阿編『はまびさし』（同奥）刊。近江重厚発句一入集。

●同、桃処編『桃下華葉』（同序）刊。不二庵追善集。義仲寺重厚



図12 重厚墓

発句一入集。

●同、乙二編『はたけざり』（同序）刊。発句一入集。

●十月、攻水園伯先編『香組草』（同序）刊。近江重厚発句一入集。

文化年間

▼閑斎によって、重厚の位牌が義仲寺に置かれる。表「桃青院重厚比丘」、裏「文化元甲子正月十八日 閑斎置」

年次未詳

○寛政七年十二月二十四日蝶夢没以前、「うめがゝの」両吟歌仙なる。

〔連衆〕蝶夢・重厚。（たそがれ随筆、文化四年刊蝶夢十三回忌集わすれずの山）。

○『面影さうし』を著す。「嵯峨道人重厚」の自署。「剣配」「鯛」「保夜」「堅香子」「育暦」「三味線」「芭蕉の旅姿」の画を添えた俳文。（山本唯一先生教示）

○平角が晩年に隠棲した庵を、嵯峨の櫟谷にちなんで命名し、「櫟谷亭記」を記す。

○一月、試筆。蝶夢発句、重厚脇の両吟歌仙を巻く。（黄昏随筆）

●夏頃、「干松露や夏の山家の野菜物」の一句を得る。（一枚摺）

○月溪画重厚・瓦全発句の一枚摺刊。

▼重厚は、俳諧を能くする祐昌に義仲寺を譲るが、文化元年に重厚が没すると、後を追うように文化四年に祐昌も没した。

祐昌は、文化四年十月初旬に煩い、同年十一月二十六日に伊勢南大路に帰郷する。その後、まもなく同年十二月九日に没した。享年四十余歳。祐昌追善集『霜のかね』が、文化五年（序）に千影によって編まれている。

井上重厚年譜稿 地域別主要俳人一覧

凡例

- 一 本一覽は、年譜から重厚の動向が知られる重要な俳人に注目したものである。なお、重厚と蝶夢については凡そ全般に渡っているので特に取り上げない。
- 一 俳人名の別号や文字表記の異なるものについては、主な活動の名で立項し、その他は（ ）に併記する。
- 一 「芭蕉」「去来」等の古人は採録しない。
- 一 配列は主な活動の地域別とする。
- 一 所在は年毎で示し、同一年の重複は取らない。表記は次のように略記する。
元文元年↓元一 明和二年↓明二 安永十年↓安十 天明↓天 寛政↓寛 享和↓享 文化↓化
- 一 参考資料となるものについては、「」に記す。

〔山城・京〕

菊亭殿（今出川公）	〔京〕	明七	天五						
吾東	〔京〕	明七	明八	安一	安二	安三	安四	安永頃	〔安八没。蝶夢弟子〕
梅応	〔京〕	明八	〔貞門点者〕						
几董	〔京〕	明八	安五	天二	天三	天四	天五	天六	天七 天八 寛一
		寛二	寛三	寛五	寛六	寛七	享一	〔寛一没〕	

沂風（得往・方広）	〔京〕	明八	安一	安二	安六	安七	安八	安九	天一	天二	天三
		天五	天六	天七	天八	寛一	寛三	寛四	寛五	寛六	寛七
		寛九	寛十	寛十一	〔寛四以降得往、寛七以降方広、寛十二没〕						寛八
諸九	〔京〕	安一	安六	天一	〔天一没〕						
瓦全	〔京〕	安二	安三	安四	安八	安九	安永頃	天一	天三	天六	寛四
		寛六	寛七	寛八	寛九	享一	享二	年次未詳			寛五
琴之	〔京〕	安四	天一	〔文下・諸九追善〕							
秋里湘夕（籬島）	〔京〕	安五	天七	〔書肆〕							
闌更	〔京〕	天一	天三	天五	天六	天明頃	寛一	寛四	寛五	寛六	寛七
		寛八	寛九	〔寛十没〕							
春坡	〔京〕	天二	天六	寛一	寛五	寛七	寛十二	寛政頃	〔化七没〕		
泰溪（太溪）	〔京〕	天五	天六	天七	寛一	寛十一	〔化七没〕				
嘯山	〔京〕	天五	寛五	寛七	寛十二	享二	〔享一没〕				
紫曉（春夜桜）	〔京〕	天六	天七	天八	寛一	寛二	寛三	寛四	寛五	寛六	寛七
		寛十	寛十一	享一	〔化三頃没〕						
月溪（呉春）	〔京〕	天六	年次未詳								
丈左	〔京〕	寛五	寛七	寛八	寛十一	寛十二	享二				
買山	〔京〕	寛六	寛七	寛八	享二						
〔近江〕											
菊二	〔近江〕	明七	明八	安二	安四	安六	安八	安永頃	天一	天三	天五
		天六	寛四	寛八	寛九	享一					
露光	〔三井寺〕	明八	安六	安七	安永頃	天一	天明頃				

祐昌（斑鳩）〔義仲寺〕 寛五 寛七 寛八 寛九 寛十 寛十一 寛十二 寛政頃 享一
 享二 年次未詳 〔江戸で重厚に入門、伊勢の人、寛十以降祐昌〕

〔丹後 但馬〕

百尾 〔丹後宮津〕 安二 安三 〔寛十没〕
 木姿 〔但馬〕 天一 天六 天八 寛四 寛五 寛六

〔伊賀〕

浮流 〔伊賀〕 安二 安七 安八 安九 安永頃 天一 天二 〔天二没〕
 桐雨（蓑虫庵） 〔伊賀〕 安二 安四 安八 天一

〔遠江 甲斐〕

白輅（白露）〔遠江浜松〕 安七 天二
 石牙 〔甲斐〕 天四 天六 天八 寛二 寛五 〔寛九没〕

〔美濃 尾張 飛騨 信濃〕

君里 〔美濃〕 安四 〔しろね塚建立〕
 暁台 〔尾張〕 天一 天六 寛政頃
 士朗 〔尾張〕 寛五 寛七 寛八 寛十 寛十一 享一
 其川 〔飛騨高山〕 安九 天一
 一茶 〔信濃〕 寛七 寛九 寛十二

〔武藏・江戸〕

白雄（春秋庵）〔江戸〕 明八 安九 天二 天三 天四 天五 天八 寛二 寛三 寛五 享一

〔寛三没〕

成美 〔江戸〕 安二 天一 天三 天四 天六 天七 天八 寛一 寛二 寛三 寛四

寛五 寛九 寛十一 寛十二 〔化十三没〕

蓼太 〔江戸〕 安五 天一 天三 天七 〔天七没〕

泰里（河上庵）〔江戸〕 安八 天一 天四 天七 天八 〔去来庵〕

登舟（閑鷗亭）〔江戸〕 天一

古友（松承庵）〔江戸〕 天一 天四

楼川 〔江戸〕 天一 天四

浙江 〔江戸〕 天一

吟江 〔江戸〕 天一

春鴻 〔江戸〕 天三 天四 天八 寛五 寛十一 寛十二 〔白雄追善〕

完来 〔江戸〕 天七 寛五 寛七 寛八 寛十一 寛十二 〔雪中庵三世〕

星布 〔江戸〕 天八 寛十一 寛十二 享一 〔白雄、烏明門〕

〔奥羽〕

素郷 〔奥羽盛岡〕 安二 安四 天二 天三 天五 天七 〔蝶夢門〕

平角 〔奥羽盛岡〕 天二 天三 天七 寛一 寛二 寛三 寛五 年次未詳 〔重厚門〕

北達 〔奥羽〕 天二 天三

吟耕 〔奥羽〕 天二 天三

其黒 〔奥羽〕 天二 天七 寛一 寛三

三白	〔奥羽〕	天二	寛三
夜来	〔奥羽〕	天八	寛一
			寛四
			寛五
			寛六
			寛政頃

〔摂津・大坂〕

瓜坊	〔摂津〕	天一	寛二	寛五
二柳	〔大坂〕	天一	天六	寛三
尺艾	〔大坂〕	天四	天六	寛一
				寛四
				寛五
				寛十
				寛十一
				享三

〔播磨〕

青蘿	〔播磨〕	天一	天三	天六	天七	天明頃	寛一	寛三	寛九	〔寛三没〕
----	------	----	----	----	----	-----	----	----	----	-------

〔備後〕

古声	〔備後田房〕	安八	天六	寛四	寛五	享一
何木（可卜）	〔備後府中〕	天六	寛一	寛三	寛五	

〔筑前〕

魯白	〔筑前長崎〕	安六	安七	安八	安九	天一	天二	天三	天四	天七	天八
		寛四	寛五	寛九							

枕山	〔筑前長崎〕	安六									
月湖	〔筑前植木〕	安六	安七								
湖桂	〔筑前植木〕	安六	安八	寛四	寛五						
蝶醉	〔筑前〕	安六	寛五	〔寛三没〕							
其両	〔筑前篠栗〕	安六									

井上重厚
発句稿

凡例

- 一 本稿は、井上重厚の発句を成立年次順に配列したものである。原則として、前書、発句、肩書、俳号、出典、*注記の順に記す。
- 一 俳号については、肩書等があるものは記し、「重厚」のみのものは省略する。
- 一 使用の便を考えて、私に句番号を付す。
- 一 出典は、版本等の書名は（ ）、写本等の仮題は〔 〕とする。
- 一 版本所収の句については、序・跋等の年月日によって、可能な限り成立年次に近いと推定される順に配列する。成立年次の推定の根拠についてはその旨を注記する。
- 一 未出版の句帳や墨蹟等は、可能な限り成立年次順に配列する。
- 一 俳書等に入集の句が、二書以上に収録されている場合は、初出によって配列する。成立年代順に列記し、異同については注記する。ただし、文字遣いなどの表記の異同については、同一句とみなして出典のみを掲げる。
- 一 本文の文字は概ね現行の字体に統一し、濁点・句読点を私に付す。おどり字・当て字等は原本に従うが、次のように統一する。

- | | | |
|---------------------------|------------------------------------|--------|
| ひらがな一字 | ↓ | ゝ |
| 濁音一字 | ↓ | ゞ |
| 漢字一字 | ↓ | 々 |
| 二音以上の繰返し | ↓ | く |
| 初句索引を付す。所在は句番号で示す。 | | |
| 入稿後に知り得たものについては、補遺として付す。 | | |
| 個人の出典の所在は、以下のとおりである。（敬称略） | | |
| 慶照寺 | 広島県府中市出口町 | 田坂英俊 |
| 寺地文人 | 広島県世羅郡世羅町 | （旧甲山町） |
| 可卜 | 広島県府中市小林可卜 | （何木） |
| 井口家 | 現、大津市歴史博物館蔵 | |
| 夢望庵 | 乾憲雄 | |
| 金福寺 | 『金福寺参詣記』（藤田真一、富田志津子編・著、和泉書院、二〇二二年） | |

明和七年 庚寅（一七七〇） 三十二歳

1 菜の花や二階ざしきに夕日さす 嵯峨重厚（梅の草紙）

* 明和七年二月はじめ序、この頃の成立。

2 散る時の噂は聞ず帰り花 嵯峨重厚（施主名録発句集）

* 明和七年三月十五日序、同春の成立。但し、同五年四月十二日付、義仲寺芭蕉堂再建募縁疏あり、同五年成立の可能性もある。

3 六月や富士の白きも岩手水 嵯峨重厚

（一人一首短冊篇）

* 明和八年三月跋、同七年六月の成立。

4 夕しぐれ急ぬかほで戻る牛 嵯峨重厚（しぐれ会）

* 明和七年十月十二日時雨会以前の成立（文通）。

5 ぶり／＼やあるは添乳の枕にも 京重厚

（類題発句集・俳諧実色）

* 明和七年十二月序、これ以前の成立。但し、安永三年三月の刊記があるので、これ以前の可能性もある。

『俳諧実色』には、肩書が無い。

6 赤草や夕日に重き水の色

（類題発句集・俳諧実色・俳諧古今句鑑拾遺）

* 明和七年十二月序、これ以前の成立。但し、安永三年三月の刊記があるので、これ以前の可能性もある。

守歳

7 年守るやことに藁家はわらふとん 落柿舎

〔明和八年梅応歳旦帖〕

* 明和七年歳暮吟。

吾落柿舎に籠り此道に心をゆだね、其昔名士の鉢叩きかれし事など思ひよりて

8 化し野へ行も戻りも鉢叩 〔明和八年梅応歳旦帖〕

* 明和七年歳暮吟。

明和八年 辛卯（一七七二） 三十三歳

9 書ぞめや嵯峨に譲りのすゞりいし 〔梅応歳旦帖〕

* 明和八年歳旦吟。

名月

10 見えぬものは浦の火ばかりけふの月 〔高德院発句会〕

* 明和八年八月四日成立。これ以下、12まで同様。

案山子

11 知れさを^たしてに構へたるかかし哉 〔高德院発句会〕

* 明和八年八月四日成立。

陶師

12 草の露破ても見せん陶師 〔高德院発句会〕

* 明和八年八月四日成立。この一句見せ消ち。

13 落のこる柿をむしりて手向かな 〔去来忌〕

* 明和八年九月十日、去来忌俳諧興行。

14 菌のぬけし客ばかり也納豆汁 (しぐれ会)

* 明和八年十月八日、五升庵興行。

15 しぐるゝやとりわけ鳩のたゝずまる (しぐれ会)

* 明和八年十月十二日、時雨会興行。

16 木がらしや夜すがらうごく草の軒 嵯峨重厚

(秋かぜの記・浴の日記・新類題発句集・俳諧独喰)

* 安永元年春序、明和八年冬の成立。下五「草の庵」

(浴の日記・新類題発句集・俳諧独喰)

17 山畑や麦まきつけて人も来ず 洛陽重厚 (まつの蟬)

* 明和八年序、同年冬の成立。

安永元年 (明和九年十一月十六日改元) 壬辰 (一七七二) 三十四歳

18 むかひあふ梅と柳や十二坊 洛重厚

(折つゝじ集・句双紙)

* 安永元年冬校了、同年春の成立。但し、明和元年秋跋

なので、同年春の可能性もある。『句双紙』には、肩

書が無い。

19 散ぎわの梅見付たりあらし山 (秋しぐれ)

* 安永元年八月序、同年春の成立。

20 秋の暮古がね商ふ人いかに 洛重厚 (墨のほひ)

* 安永元年の『折つゝじ』に続いての刊行 (付録の目録に依る)。

21 あたゝまる山の窪みや炭けぶり (しぐれ会)

* 安永元年十月八日、五升庵興行。

22 しぐれ会や床に猿蓑炭だはら 嵯峨重厚 (しぐれ会)

* 安永元年十月十二日、時雨会興行。

有七宝池八功德水充滿其中

23 池水のむましや雁も鳴も居る (しぐれ会)

* 安永元年十月十二日、時雨会興行。

24 ぬす人の残して置ぬ干かぶら (猿利口)

* 明和九年序、安永元年冬の成立。但し、安永四年秋跋なので、これ以前の可能性もある。

安永二年 癸巳 (一七七三) 三十五歳

25 ちる木の葉中にまじるや髪の落 (しぐれ会)

* 安永二年十月八日、五升庵興行。

26 うつむいて塚に時雨をきく夜哉 嵯峨重厚 (しぐれ会)

* 安永二年十月十二日、時雨会興行。

去年の冬、蝶夢法師の建られし石のしるしを見て、こゝなん庵の跡よと懐旧のなみだをながす。そも祖翁此山に住給ひしは、元禄三年の夏にして、ことしまでは八十四年に成ぬれば、礎のひとつも見えず、その世の名残としては、たゞまづたのむの椎の木立のみ今もしげれり

27 さればこそ小笹にうづむ椎のから (しぐれ会)

* 安永二年十月十二日、時雨会興行。

安永三年 甲午 (一七七四) 三十六歳

28 柿買に問れてかたるむかしかな (落柿舎日記)

* 安永三年九月十日、去来忌興行。

29 うぐひすや鳴そこなふて隠れけり 洛西嵯峨重厚 (手向の声)

* 安永三年九月二十日興行。

30 枇杷の花ひそかに咲てものくし (巨石宛重厚書簡)

* 安永四年歳旦句と並記されている。「枇杷の花」は冬の季語なので、安永三年冬の成立か。

安永四年 乙未 (一七七五) 三十七歳

31 蛤の喰しめて居る余寒かな サガ重厚

(安永四乙未歳旦)

* 安永四年歳旦吟。

32 曲ものの嗅や木の芽漬 サガ重厚

(神風館入楚歳旦・巨石宛重厚書簡)

* 安永四年歳旦。巨石宛書簡では、上五「曲ものも」、肩書がない。

33 かつくりと飛越ひろし春の水 (既七とせ)

* 安永四年四月序、同年春の成立。

34 庵しめて居たき水ありすみれ草 (笠の露・雪の台)

* 安永四年八月十三日興行を収録、同年春の成立。肩書「嵯峨」(雪の台)。

人記品 寿命無有量以愍衆生故

35 きらさじと竹をからむやからすふり (笠の露)

* 安永四年八月十三日興行。

36 簀むしは案山子の捨し子成べし 京重厚

(いしなとり・さびしをり・句双紙・新類題発句集・題林発句集・俳諧十家類題集・俳諧新五百題)

* 安永四年十一月刊、同年秋の成立。中七「案山子の捨てた」(句双紙)。肩書「落柿舎」(さびしをり)。また、類題集の四書には、肩書が無い。

37 しぐれ会に提て参るや嵯峨の柿 嵯峨重厚

(しぐれ会)

* 安永四年十月十二日、時雨会興行。

38 雪霜に道わけそめんしろね塚 嵯峨重厚 (しろね塚)

* 安永五年三月序、同四年冬の成立。

39 殿はらは弓手はさみて雪の原 嵯峨落柿舎重厚

(俳諧蓮華会集)

* 安永五年六月序、同四年冬の成立。

安永五年 丙申（一七七六） 三十八歳

悼

40 花葵さきも登らでしぼめるか 嵯峨落柿舎重厚

（蚊幃内）

*安永六年秋跋であるが、蝶羅追悼句のため、同五年五月六日没以後の成立。

41 嵯峨にしぐれ粟津にしぼる袂かな 嵯峨重厚

（しぐれ会）

*安永五年十月十二日、時雨会興行。

安永六年 丁酉（一七七七） 三十九歳

よし野にて

42 立枯のさくらおしみて山めぐり サガ重厚（芳野行）

*安永六年三月奥、同年春の成立。

43 花の陰見しらぬ人の笑顔かな 洛陽重厚

（桐の影・句双紙）

*安永六年四月端作り、同年春の成立。

44 や、もすれば梅匂ひけり竹の奥 サガ重厚

（春慶引・俳諧餅黄鳥・句双紙）

*安永六年机墨庵文誰『春慶引』、同年春の成立。『餅黄鳥』は肩書「嵯峨」。『句双紙』には肩書が無い。

45 足のべて寝るや月夜のはしり舟 洛陽重厚

（秋のわかれ・句双紙）

*安永六年九月序、同年秋の成立。

46 むらしぐれけふや枯野をかけめぐる 嵯峨重厚

（しぐれ会）

*安永六年十月十二日、時雨会興行。

四季の折ふしごとに聞たる諸好士の発句どもの蓬戸亭の古き机に残れるを書あつめて、ありし世をしのぶ

47 雪翁や吹ちらさるゝ鷺の羽 重厚（雪の味）

*安永七年九月序、同六年冬の成立。

安永七年戊戌（二七七八） 四十歳

海松堆眺望

48 伊予山のほのかに白し五月晴 京重厚（鳥塚集）

*安永八年三月序、同七年五月の成立。

49 片しぐれ須磨に寝し夜の心地かな 嵯峨重厚

（しぐれ会）

*安永七年十月十二日、時雨会興行。

50 我庵の門を枯野のかぎり哉 落柿舎重厚

（雪の五歌仙・句双紙）

*安永八年一月十八日興行を収録、同七年冬の成立。但

し、天明元年四月刊なので、安永九年冬の可能性もある。なお、『句双紙』には、肩書が無い。

安永八年 己亥（一七七九） 四十一歳

51 遊ぶにも世の中よかれ月と梅 洛重厚

（鳥塚集・句双紙・はるのひかり）

* 安永八年三月序、同年春の成立。『句双紙』・『はるのひかり』には、肩書が無い。

52 三条と五条は遠しおぼろ月 （風の蟬）

* 安永八年八月序、同年春の成立。

53 傘をほし忘れけり夏の月

（俳諧くらみ坂・年次未詳六月五日付古声宛書簡 慶照寺蔵）

* 安永九年二月七日序、同八年夏の成立。

追悼

54 秋の暮たのみにならぬ命かな 京重厚 （風の蟬）

* 安永八年八月序、同年秋の成立。

55 川淀や白きかもめを月の友 京嵯峨重厚

（春秋稿初篇・松露随筆・江戸みやげ）

* 安永九年春序、同八年秋の成立。前書「すみだ川に遊びて」（松露随筆）、前書「角田川」（江戸みやげ）。肩書「皇都」（松露随筆）。

56 野は枯て牛の喰て見るか、し哉 （続寒菊）

* 安永九年四月序、同八年秋の成立。

筑紫にありて会式を思ふ

57 時雨会の空はこゝにも西のはて 嵯峨重厚

（しぐれ会）

* 安永八年十月十二日時雨会の成立（文通）。

明和・安永年間

58 花ちりて河水ひろく成にけり （七老亭之賦・句双紙）

* 明和・安永年間の成立。下五「流れけり」（句双紙）。

安永年間

59 北嵯峨やひそかに匂ふ露の臺 京都重厚

（烏明月次集・四季のくさぐさ）

* 安永七年頃か。

60 月影や是も木のはし炭のをれ （樗良画重厚讃）

* 樗良が木屋町三条に無為庵を移したのは、安永五年六月。これ以降か。

天明元年 （安永十年四月二日改元） 辛丑（一七八二） 四十三歳

61 夏山に石きりおとす木魂かな （四季供養）

* 天明元年四月四日序、同年夏の成立。

62 聖堂に白き牡丹の散日かな 嵯峨重厚（もとの巢）

* 天明元年閏五月序、同年夏の成立。

63 ほとゝぎす鳴や千筋の江戸の町

（江戸みやげ・句双紙）

* 天明元年八月序、同年夏の成立。

64 中／＼に雨ともならず雲の峰

（江戸みやげ・句双紙・新類題発句集）

* 天明元年八月序、同年夏の成立。

65 白菊の影ぼし寒し薄月夜

（江戸みやげ）

* 天明元年八月序、同年秋の成立。

上野にて

66 水無月や雲の八重たつ松桜

（江戸みやげ）

* 天明元年八月序、同年秋の成立。

此地に去来庵をむすべる時

67 片々は我手伝はんぎの垣

（江戸みやげ・俳人重厚私大巻）

* 天明元年八月序、同年秋の成立。前書「去来庵記

鶏が鳴東なる新川にふるき家あり。こゝに半日の閑
を守りて風流にとめるものは泰里、登舟のふたりなり

けらし。むかしをしたひもて行儘そこを去来庵とよば

しめ、軒に一もとの柿有。よつて、こずゑは近き嵐山

のおもかげを尽し、萩の垣あらはに結わたしてわたし

鹿の子のへびみちあり。柚の香にむかしのぶや、竹

の貢をあみて小鍋かしぐ処をまうけ、住ところはつか

に畳しひたに過ず。西の壁の上に先生の画像をかけて

俳諧の神をまつり、よるもののおさむべきふすまを入

て、色紙まくれし跡ものこす。すべていにしへ人の洒

落を好て、工たる調度もなく座もち伝し鳴滝の硯いし、

嵐山の筆屋が筆、さるみの、炭だはら、となみ山、有

磯海、菊の杖、こ菊杯いさゝかとり揃たるのみ。其世

風情ならんか。予もこゝに來りてときあへるをともに

歌て、此記を書とはなりぬ」（俳人重厚私大巻）

去来庵閑

68 あきの夜や寝ざめてさがす硯筆

（江戸みやげ・句双紙・新類題発句集）

* 天明元年八月序、この頃の成立。下五「硯箱」（句双

紙・新類題発句集）。前書は『江戸みやげ』のみ有る。

69 白露のこれにもをけりたばこの葉 （浦の月・句双紙）

* 天明元年八月序、この頃の成立。

70 誰泣ぞ姨捨山の雨の月 京重厚（さらしな集）

* 天明元年八月端作り、この頃の成立。

71 つくばいに石路の花みる月夜哉 京重厚（百花集）

*天明二年二月刊、同元年秋の成立。

72 初しぐれ筆ほしげなる画像哉 (金福寺参詣記)

*天明元年十月十日、金福寺俳諧興行。

73 千町田やしぐれに曇る鶴のこゑ 嵯峨重厚

(しぐれ会・句双紙)

*天明元年十月十二日、時雨会興行。『句双紙』には、肩書が無い。

74 冬がれや石切山のたゝずまる 嵯峨重厚

(わすれ花・俳諧名所小鏡)

*天明二年三月序、同元年冬の成立。

天明二年 壬寅(一七八二) 四十四歳

野々宮の藪のうめほのかに匂ひそめ、嵐山にあそ

ぶ鶯の声めづらしくも興ある庵のあした

75 味噌水に春風わたれ膳の上 落柿舎重厚

(重厚 初懷紙)

*天明二年重厚編歳旦帖。

76 交りや木地の炉縁に夜の友 落柿舎重厚

(重厚 初懷紙・句双紙)

*天明二年重厚編歳旦帖。

77 雨ばれや水菜くゝたつ丹波口

(重厚 初懷紙・句双紙・新類題発句集)

*天明二年重厚編歳旦帖。

78 傘に鼠巢を喰ふ雨夜哉 嵯峨重厚

(臥央 初懷紙・句双紙)

*天明二年歳旦帖、同年春の成立。『句双紙』には、肩書が無い。

79 菜の花の奥に蔵うつ木とり哉 皇都重厚

(松露随筆・句双紙)

*天明二年歳旦帖、同年春の成立。中七「中に蔵うつ」(句双紙)。『句双紙』には、肩書が無い。

春

80 弓になる竹見て置ん春の月

(几董 壬寅初懷紙・句双紙)

*天明二年春序、同年春の成立。『句双紙』には、前書が無い。

81 春の夜や風情をつくす廻り炭 (俳諧都枝折・句双紙)

*天明二年二月序、同年春の成立。

82 氷壳額汗して走る也

(みちのくぶり・句双紙・葛の葉表)

*天明三年一月刊、同二年夏の成立。肩書「洛」(葛の葉表)

83 花火焚中を阿修羅が木太刀哉 (みちのくぶり)

*天明三年一月刊、同二年夏の成立。

84 流よるや夕顔の瀬の崩築 (みちのくぶり)

*天明三年一月刊、同二年夏の成立。

85 湯の山や菊を主に幾日寝ん (浴の日記)

*天明二年九月四日作。

86 柿ひとつ取落しけり小山伏 (浴の日記)

*天明二年九月五日作。

87 赤犬の常山華が中に吠かな

(浴の日記・春秋稿三篇・句双紙・山吹集)

*天明二年九月六日作。上五「友犬の」・下五「吼る也」

(句双紙)。肩書「嵯峨」(春秋稿三篇)、同「アワヅ」

(山吹集)。

88 蒟蒻の華見付けたり山畠 (浴の日記・句双紙)

*天明二年九月七日作。下五「雨の暁」(句双紙)。

午の刻雨ふる折からの興は

89 簀売やみのをほどけばきりぐす (浴の日記)

*天明二年九月七日作。

90 長き夜の風情なるべし班節 (浴の日記)

*天明二年九月七日作。

91 簀にはせる木の子珍し様もたせ (浴の日記)

*天明二年九月八日作。

92 板壁のはきめに秋の夕日哉 (浴の日記)

*天明二年九月八日作。

93 中く下戸も興あれ菊の主 (浴の日記)

*天明二年九月九日作。

手向

94 嵯峨に似し松の木山に柿もがな (浴の日記)

*天明二年九月十日作。

95 咲にけり小分山の初ざくら (浴の日記・句双紙)

*天明二年九月十二日作。中七「水分山の」(句双紙)。

96 すゞしさや汐の干潟のうつせ貝 (浴の日記)

*天明二年九月十二日作。上五「春風や」・下五「やら

せ貝」(句双紙)。

97 僧ふたり月見の中の月見哉 (浴の日記)

*天明二年九月十二日作。

98 後の月しぐれの桂影たのむ (浴の日記)

*天明二年九月十三日作。

一日鶯宿に遊びて

99 木賊刈翁にとへば女助山

(浴の日記・みちのくぶり・句双紙・秋の夜・俳諧名所

小鏡)

*天明二年九月十四日作。

屏風画讃

100 遊ぶ日の糸にくる也糸桜 (浴の日記)

*天明二年九月十四日作。

101 山畑やかゝしを赤き蕎麦の茎 (浴の日記)

*天明二年九月十八日作。

粟津時雨会奉納

102 刀打夢は破れて小夜時雨 (浴の日記・しぐれ会)

*天明二年九月十八日作。肩書「行脚」(しぐれ会)。

103 葉茶嚙て秋をわびけり山の上 (浴の日記・句双紙)

*天明二年九月十九日作。

104 里の子や柿の間の筑紫打 (浴の日記)

*天明二年九月二十日作。

105 やぶさめの本を語りて木の子狩 (浴の日記)

*天明二年九月二十日作。

106 朝寒や日和さだまる奥の不二

(みちのくぶり・句双紙・俳諧名所小鏡)

*天明三年一月刊、同二年秋の成立。

107 榊の文字面白し雲の暮 (みちのくぶり)

*天明三年一月刊、同二年秋の成立。

108 名月や西へ落ても須磨の海 京重厚 (とも鶴)

*天明三年二月序、同二年秋の成立。

109 あだし野や霜にけさ見る月の欠 嵯峨重厚

(春秋稿二篇・句双紙)

*天明二年撰、同年冬の成立。『句双紙』には肩書が無い。

110 うかれ女の雪擲や都しま (みちのくぶり・俳諧名所小鏡)

*天明三年一月刊、同二年冬の成立。肩書「京」(俳諧名所小鏡)。

111 三尺の釦を振る氷柱かな (みちのくぶり)

*天明三年一月刊、同二年冬の成立。

天明三年 癸卯 (一七八三) 四十五歳

112 ありと聞ししるしも消て壺董 (みちのくぶり)

*天明三年一月刊、同年春の成立。

113 堅香子の花見付たりあたゝ良根 (みちのくぶり)

*天明三年一月刊、同年春の成立。

114 琥珀掘山を後に春くれぬ

(みちのくぶり・句双紙・七名八駄付合要録)

*天明三年一月刊、同年春の成立。肩書「洛」(七名八駄付合要録)。

115 うめが香や竹の嵐は夜のもの

(几董 癸卯初懷紙・春秋稿四篇・句双紙)

*天明三年歳旦帖、同年春の成立。上五「鶯や」(句双紙)。

紙。肩書「京」(春秋稿)。

116 春雨や小路くの蚯蚓ほり 嵯峨重厚

(嫁披露)

*天明三年歳旦帖、同年春の成立。

117 黄金積て車押けり春の霜 洛嵯峨重厚

(むさしの三歌仙・鷓鴣帖・句双紙)

*天明三年九月下旬跋、同年春の成立。『鷓鴣帖』・『句双紙』には、肩書が無い。

118 北嵯峨や春の雨夜に衣うつ 嵯峨重厚

(もの、おや・句双紙・三の朝・丁未青陽・続深川集)

*天明三年十一月刊、同年春の成立。肩書「洛」(続深川集)。また、『句双紙』・『三の朝』・『丁未青陽』には、肩書が無い。

119 ものたらぬ桜一木に情あり 嵯峨重厚 (花のおきな・句双紙・俳人重厚私大卷・可卜(何木)蔵真蹟一紙)

*天明三年冬序、同年春の成立。前書「何くれとたびに日をふりて上野の花はつかに青葉のこずゑを見る」(俳人重厚私大卷・可卜蔵真蹟一紙)。『句双紙』には、肩書が無い。

120 摺鉢の音おもしろし春の月 サガ重厚

(無名集・句双紙)

*天明四年春序、同三年の成立。『句双紙』には、肩書が無い。

121 子子の涌や浮世のうつせ貝 (無名集・句双紙・も、の枯葉・題林発句集・俳諧新々五百題)

*天明四年春序、同三年の成立。中七「うくや浮世の」(俳諧新々五百題)。

122 秋雨や圃三反杉の苗 (無名集・句双紙)

*天明四年春序、同三年の成立。

123 こがらしの夢がしらみて烏啼 (無名集・句双紙)

*天明四年春序、同三年の成立。

郊外

124 夏のくれたばこの虫の咄し聞 (五車反古・影法師)

*天明三年十月跋、同年夏の成立。『影法師』には、「洛」の肩書があり、前書が無い。

125 分入ば川上寒し花に鳥 さが重厚

(五車反古・句双紙・虫歌観音堂俳額・華鳥風月集・俳階きまかせ・発句題苑集・新題林発句集)

*天明三年十一月跋、これ以前の成立。肩書「粟津」(きまかせ)。

126 こがらしや世にすぐれたる竹五本 (きまかせ・句双紙)

*天明三年十一月跋、これ以前の成立。上五「十月や」(句双紙)。

127 葱はらや鴨たちはのさゝら波 京都重厚

(俳諧松露庵随筆)

*天明三年刊、同年冬の成立。

天明四年 甲辰(一七八四) 四十六歳

128 春の宵ある人ひとり斎す サガ重厚 (几董甲辰初懷紙・夕暮塚・句双紙・桃くらひ・俳諧実色)

*天明四年歳旦帖。肩書「嵯峨落柿舎」(夕暮塚)、肩書「東武」(桃くらひ)。また、『句双紙』・『実色』には肩書が無い。

129 鶯にかえことせばや桐火桶 (松露随筆・菅の小菴集)

*天明四年歳旦帖、同年春の成立。

題しらず

130 庵の春我に撃壤友もがな (鶴鶴帖・句双紙)

*天明四年一月刊、この頃の成立。『句双紙』には、前書が無い。

131 夜の花筆を血になすおもひ哉

(甲辰壇林会句記・句双紙)

*天明四年二月二十四日から三月十一日までの間の成立。
下五「思ひ有」(句双紙)。

132 山寺や花に明行柿贈 (甲辰壇林会句記)

*天明四年二月二十四日から三月十一日までの間の成立。
あなかしこ桜が後のすみれ草 京都重厚

133 天明四年三月序、この頃の成立。『句双紙』には、肩書が無い。
(栗の肆・句双紙)

134 竹の子にかゝれとしてしも夜の雨 (しらぬひ六歌仙・句双紙・題林発句集・万寿楽・発句題葉集)

*天明四年三月序、この頃の成立。

135 雪解や藪の中なるわすれ水 (春秋稿四篇)

*天明四年冬序、同年春の成立。

136 春の月黒酒つくる夜なるべし (春秋稿四篇)

*天明四年冬序、同年春の成立。

差出磯眺望

137 うら不二や皐月はれ行夜の山

(宇良不二・こと葉の露・句双紙・俳諧名所小鏡)

*天明四年五月序、この頃の成立。但し、同六年八月刊なので、この年以前の可能性もある。これ以下、146まで同様。肩書「ミヤコ」(こと葉の露)。『句双紙』『俳諧名所小鏡』には肩書が無い。

甲斐の国酒折の神社は、日本武尊にして、そのかみ東夷征伐の御時、新はり筑波を過て幾夜かねつる。かゝなべて夜には九夜日には十日をと火とす。翁の下の句つきたる。是ぞ連歌のはじめなるべし。されば、此次歌の御筆のまゝを石に工なしで、今尚神体と崇奉るとなむ。さるは、かの出雲の国にその八重垣のあとたれますがごとし。

138 心すゞし一夜こもりて連歌せん (宇良不二)

*天明四年五月序、この頃の成立。但し、同六年八月刊なので、この年以前の可能性もある。

不和川

139 日斜に魚釣人のかちわたり (宇良不二)

*天明四年五月序、この頃の成立。但し、同六年八月刊なので、この年以前の可能性もある。

身延山

140 夏ごもりや法花千部の山おろし

(宇良不二・俳諧名所小鏡)

*天明四年五月序、この頃の成立。但し、同六年八月刊
なので、この年以前の可能性もある。

郡内にて

141 桑市や喧嘩の中の朝ごもり (宇良不二・句双紙)

*天明四年五月序、この頃の成立。但し、同六年八月刊
なので、この年以前の可能性もある。『句双紙』には、
前書が無い。

恵井寺両袖の桜は、武田信玄快川国師和漢の贈答

あり。

142 時に感ずむかし二人のなつ木立 (宇良不二)

*天明四年五月序、この頃の成立。但し、同六年八月刊
なので、この年以前の可能性もある。

塩山冷湯

143 つめたしやなつの涌温泉のいりごゝろ (宇良不二)

*天明四年五月序、この頃の成立。但し、同六年八月刊
なので、この年以前の可能性もある。

釜無川の辺、五味氏に遊ぶ日、既に暮なんとする

時、一群山鳥弧雲外と吟ずる人あり

144 ほとゝぎすある夜時を見付たり (宇良不二・句双紙)

*天明四年五月序、この頃の成立。但し、同六年八月刊

なので、この年以前の可能性もある。『句双紙』には、
前書が無い。

くすし早川氏の住ける差出の磯は、家あつきぐ
しく耕て喰ひ、織て着る。聖者翁を守りて古き世
の名残あり。

145 蚕時と申して立ぬ葉とり (宇良不二)

*天明四年五月序、この頃の成立。但し、同六年八月刊
なので、この年以前の可能性もある。

146 六月や葉広の桜雨をまつ (宇良不二・とをかわづ)

*天明四年五月序、この頃の成立。但し、同六年八月刊
なので、この年以前の可能性もある。

147 夏瘦は取かへせども秋のかぜ 落柿舎重厚

(秋風塚集)

*天明五年四月刊、同四年秋の成立。

先生、長崎の聖堂に寓居し給ふとき、柿に七の徳
ある事を文に作りて、はらからに贈給ひし事、卯
七が筆記に見えたり

148 けふ爰に柿七絶の嘶かな 京重厚 (むかしぎく)

*天明四年九月興、これ以前の成立。

天明五年 乙巳 (二七八五) 四十七歳

149 犬神人の酒もり交ぬ松の内 さが重厚

(几董初懷紙・句双紙・題林発句集)

*天明五年歳旦吟。上五「弦召の」(題林発句集)。『句双紙』には、肩書が無い。

悼

150 呼やいかに友へる春のむら千鳥 (春の笠)

*天明五年九月序、下里(郷)常和(和菊)同年二月二日没後の成立。

151 寝鳥射ル弓なからまし梅白し (新雜談集)

*天明五年立秋奥、同年春の成立。

152 多羅柴のひろはに月の明やすし (奉扇会)

*天明五年四月十二日奉扇会の成立(文通)。

153 噓るやいもがあはせの木賊色 嵯峨重厚

(春秋稿五篇・句双紙)

*天明五年冬序、同年夏の成立。中七「君が裕の」(句双紙)。

154 名月や我白骨の影法師

(新雜談集・俳人重厚私大卷・重厚肖像自画讃)

*天明五年立秋奥、この頃の成立。

155 ばせを葉にもりて手向ん野菜もの (魂まつり)

*天明五年秋序、魂まつりの折の成立。

からかねをもて、俳の事二つの灯籠を仏前にさ、
げて、はらからの陽子居士が善魂をねもごろにと
ふ人は、むさしの国蔵前の成美とぞいふめり。け

ふやさいはひこの寺に、はせを翁の魂祭るとて、

居士がかりの位牌をならべ、その灯籠を供養せる
あるじの法師が心遣ひのあらましを集のすゑにし
るす

156 迎火や手にはとられぬ前の露 (魂まつり)

*天明五年秋序、魂まつりの折の成立。

157 きりぐす鳴や米なき布ぶくろ 洛重厚 (骨書)

*天明六年二月序、同五年秋の成立。但し、天明七年刊
なので、同年以前の可能性もある。また、序文には
「二十とせ近きむかしなる月花の詠」とあるので、明
和四年頃の可能性もある。

158 初雪やあは津文庫の柱たて (しぐれ会)

*天明五年十月十二日、時雨会興行。

159 冬の夜や竹のふしみの古手市 (都の冬・蓬萊帖)

*天明五年冬序、この頃の成立。肩書「在江戸」(蓬萊
帖)。

去年の冬、留守の庵に会して、塩山亭眺望

160 冬一日かすみが中のをしほ山 (几董初懷紙)

*天明六年二月刊、同五年冬の成立。

天明六年 丙午（一七八六） 四十八歳

春興

161 そも此梅其角が枝のさけ目哉

（几董 初懷紙・几董 讚月溪画去来屋敷図）

* 天明六年歳旦吟。

162 朝かぜや松の花ちる柳筥 栗田重厚

（丙午睦月「春夜探題」一枚摺）

* 天明六年一月刊、この頃の成立。

163 朝酒に嗽ぎけりはるの水

（几董 初懷紙）

* 天明六年二月刊、この頃の成立。

164 市立の矢引木綿や春の風

（月花塚・句双紙）

* 天明六年一月十三日序、この頃の成立。

165 拾はれし児生たちぬ春の山 洛重厚（魁春帖・都鳥）

* 天明六年二月序、この頃の成立。肩書「江州栗津」

（都鳥）。

166 かゝる日をまこと心や雨の花

（花供養）

* 天明六年三月十二日花供養会興行。

167 豆腐ひく隣おきたりほとゝぎす

（奉扇会）

* 天明六年四月十二日、奉扇会興行。

168 名月や今宵雨夜の品さだめ

（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。これ以下、⁵⁵⁸まで同様。

169 初夢やみる物ならば親の顔

（句双紙・八僊歌・発句題苑集・新題林発句集）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

170 青梅や酢吸ふ聖いかならむ

（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

171 虫ぼしや御傘淀川油粕

（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

172 初しぐれ待てや夜の糸車

（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

173 春の夜やふる歌かたるつくし人

（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

174 いなづまか夫御覧ぜよ曼珠沙華

（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

175 夏野ゆく我影法師草にしむ

（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

176 秋のくれ中／＼をかし桐火桶

（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

177 世は都安らひ祭鉢たゝき

（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

178 厄仏上手にうそをつきてけり

（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

179 冬の梅雨の欺く苔かな

（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

180 我影や団扇の影や月のかげ (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

181 瓜畑の足跡かくせ白蔵王 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

182 暁のうめ折る衛士が袂かな (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

183 足袋はかぬ禿かあいし年忘 (句双紙・きくの宿)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。中七「禿かはゆし」(きくの宿)。

184 雛形の女あそびや小正月 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

185 仰向にころびて涼し生の松 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

186 もの、葉に鶺鴒の鮓や露時雨 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

187 花もどり咄更行局かな (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

188 海老がらに風吹わたる春日哉 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

189 此里の座頭隙なき花見哉 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

190 元日や常もさびしき嵯峨のおく

(句双紙・雁風呂・花の下蔭)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。肩書「近江」(花の下蔭)。

191 むら雨や人立さわぐ干生念仏 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

192 宮人の沓踏込で若菜哉 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

193 菖蒲湯や難波入江の舟の人 (句双紙・新類題発句集)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

194 初雪や甘とみゆるひえの山 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

195 みじか夜を独髪とく女かな (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

196 雨降りや誰にあかれて置火燵 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

197 今はとて藤戸に鳴や春の雁 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

198 朝顔のほだしや白き花の数 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

199 盃にほる、人なき花見かな (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

200 草いろく二月の雨の幾日ふる (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

- 201 島よりや子にはとれ共雨の花
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 202 は、木々の二本立けり秋の雨
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 203 朝まだき日の岡こへて蜩うり
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 204 折罪もなくて冬木の桜かな
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 205 潮待やものうき冬のかゝり船
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 206 牛借て嵯峨中の梅見歩行ん
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 207 根問して児の指さす土筆
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 208 横雲に四条通りの踊かな
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 209 徒に寝ましや月に我四十
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 210 やま鳥の尾に引かかれ天の河
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 211 遠のりや花の木の間の敵かくれ
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 212 稗くふて世にかたよるや秋の風
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 213 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
立出て炭わる夜の嵐かな
(句双紙)
- 214 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
古郷や野松しぐれて人立り
(句双紙)
- 215 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
木がらしに向ふて立り鹿の角
(句双紙)
- 216 水仙や三日口閉て詠居る
(句双紙・宰府日記)
- 217 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
何となう蒟蒻は秋のすがた哉
(句双紙)
- 218 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
花瓜の蔓や通ひて木津難波
(句双紙)
- 219 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
牛祭何にたとへん月夜哉
(句双紙)
- 220 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
仁和寺や尻こそばゆき花の中
(句双紙)
- 221 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
ほんのりと夕日さしけり枇杷の花
(句双紙)
- 222 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
蟹の子の母よぶ声や秋の暮
(句双紙)
- 223 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
あき風に崩しもやらず浜庇
(句双紙)

- 224 朔日の精米こぼすや雪の庭
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 225 拝たし盥にうつる月の蝕
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 226 しのみや青田を逆ふ筑後川
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 227 木々の葉は残らず落て水仙花
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 228 とも摺の竹や夜明の春の風
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 229 角切や小路がくれの鹿を追ふ
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 230 雨とふり露とかはりて小しめぢ
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 231 元山やつゝに付る蟻の道
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 232 石菖やありのまゝなる春の色
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 233 春雨や弓の弦さすねぢけ人
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 234 引のこす小松が中の茨かな
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 235 友ほしき春の雨夜の巨燵かな
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 236 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
繰舟や祭もどりの泣上戸
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 237 冬の日のありたけさすや一ツ松
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 238 いかのぼり一日雲に聳けり
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 239 思ふ事跡からふへる火燵かな
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 240 うかれ女に花の夢とふ巨燵哉
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 241 冬の夜や焦して戻す小提灯
(句双紙・俳諧歌仙七部拾遺・伊奈古万呂)
- 242 提て行花にとまれる胡蝶哉
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 243 雨後の月さながら梅の白さ哉
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 244 蟬鳴や現につかむ塗まくら
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 245 柿買の我を見知るや西の京
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)

246 ゆふだちに折目正しき扇哉 (句双紙)

247 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
蚊帳垂て墨する人の姿かな (句双紙)

248 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
すゞしさや鳥居のおくの松の風 (句双紙)

249 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
舷に長しみじかし鱸釣 (句双紙)

250 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
岩船や木瓜の花ちる峰つゞき (句双紙)

251 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
夏瘦やもたるゝものも竹柱 (句双紙)

252 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
萍や海月の通る水の筋 (句双紙・題林発句集)

*天明六年三月跋、これ以前の成立。中七「海月のかへ
る」(題林発句集)。

253 すみよしの御田におりて春の雁 (句双紙)

254 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
我死ば雪に埋めよみのと笠 (句双紙)

255 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
さぞな伊勢多賀を懸たる年籠 (句双紙)

256 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
舛飲や下戸にはくもれけふの月 (句双紙)

257 海松ふさの酔に戻りけり杉の箸 (句双紙)

258 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
正月を祝ふかち人の袴かな (句双紙)

259 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
福藁やちりに交る杜家の庭 (句双紙)

260 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
花の座に酔の菟蓐や僧仲間 (句双紙)

261 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
白川や石を丸めて雪仏 (句双紙)

262 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
蓮の根やげに肖柏が牛の角 (句双紙)

263 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
蚊柱や江口の君がかりの宿 (句双紙)

264 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
矢を負し鶴の上毛やみのゝ雪 (句双紙)

265 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
世の中は喰ふてはこして花の春 (句双紙)

266 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
引狼の人にもよらず春の月 (句双紙)

267 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
長き日の膝にあまるや鹿子結び (句双紙)

268 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
島原や雨夜の梅の薄にほひ (句双紙)

- *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 269 三ツ山を三ツ見る雪の朝かな
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 270 養父入を中にはさむや階子壳
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 271 花に酒我を化すな夜の殿
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 272 さびしさを二つ重ねし紙子哉
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 273 ひえの山いくつ重ねて今朝の春
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 274 節客やこゝには弓の素引して
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 275 初雪や焼筆あてる東やま
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 276 月雪や花と並びの歌かるた
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 277 落にきと人に語るな生くるみ
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 278 海老を喰ふ和尚はいかに秋の暮
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 279 獅子飛や一村そよぐ紙幟
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 (句双紙)
- 280 狩野桶にあられたばしる山路哉
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 281 早乙女やみのと近江の蓑と笠
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 282 木がらしや琴に打べき桐二本
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 283 濡ながら木の葉焚けり坊が妻
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 284 多景島や男ひとりを花紅葉
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 285 朝寒や子守が赤きひたひ髪
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 286 随身の弓にかけたる葵かな
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 287 雪ながらお手にたふる、檜かな
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 288 牡丹ちりて心ねぢけたり廿日ほど
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 289 人更にもものも申さず皐月山
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 290 煤とりや杠馬に落る朝の月
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 (句双紙)

- 291 春の霜櫛かざして通る也
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 292 紙燭して見れば跡なし冬の蜘蛛
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 293 雪の雁遠里小野を鳴過て
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 294 蠅よ蠅はへ打作る糊による
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 295 雪の雁野中の杭にとまりけり
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 296 むら雨や日吉祭の山おろし
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 297 蜻蛉や我とくるまる蜘蛛の網
（句双紙・題林発句集）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。「とんぼうや我とくゝまる蜘蛛の糸」（題林発句集）。
- 298 なつかしき堇の茎や苔清水
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 299 水粥に白梅嗅ん山の寺
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 300 有が中に茨にそふてをみなへし
（句双紙・新類題発句集）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 301 八朔や木丸どの、朝ぼらけ
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 302 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
朝起や勤て夏の寺まゐり
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 303 撫子や夫相応の風が吹
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 304 筆結ふや瀧本坊の春の雨
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 305 二十五の菩薩ねるかと朧月
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 306 此寺の九年母にがし雨の暮
（句双紙・題林発句集）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。中七「九年母くるし」（題林発句集）。
- 307 雨寒し取ひろげたる興福寺
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 308 のどけしや弓は袋に甲斐の駒
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 309 秋のくれ貧乏神を送りけり
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 310 紅葉照や牛の貝ふく谷の奥
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 311 五間の間の水筋伝ふ蛭かな
（句双紙）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 312 春かぜのこ、も吹也鳥部山
（句双紙・新類題発句集）
*天明六年三月跋、これ以前の成立。

313 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
桜寒し雨に明ゆくあらし山
(句双紙)

314 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
花もどり茶湯はじめる一間哉
(句双紙)

315 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
川口や舟押分てすゝみ舟
(句双紙)

316 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
白沢の笑ふがごとき春日哉
(句双紙)

317 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
花ぐもり真葛原に風もなし
(句双紙)

318 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
今に成て鼠も喰ずすて扇
(句双紙)

319 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
花にうたひ月に酔しも懺悔せん
(句双紙)

320 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
鶉ともならで麦くふ鼠かな
(句双紙)

321 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
そも玉子未生已前は何仏
(句双紙)

322 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
死もせで花に鯛くふうき世哉
(句双紙)

323 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
炉びらきや市にはさかる松の庵

(句双紙・題林発句集・俳諧新五百題)

*天明六年三月跋、これ以前の成立。中七・下五「市にはさまる松の坊」(題林発句集・俳諧新五百題)。

324 裏須磨や桜咲ほどのかた庇
(句双紙)

325 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
火を焚ぬ庵さへ春の雨夜哉
(句双紙)

326 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
舌崎や涼みあまりて潮がしら
(句双紙)

327 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
一つ葉の枯てさびしや一葉づゝ
(句双紙)

328 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
灌仏や白雲低き水薬師
(句双紙)

329 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
大原女の黒木にかへる雛かな
(句双紙)

330 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
唐丸の上に立けり大根花
(句双紙)

331 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
片里や無尽祝ひの花角力
(句双紙)

332 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
名月や帆船が上の博多ぶし
(句双紙・名所小鏡)

*天明六年三月跋、これ以前の成立。中七「帆船が上に」(名所小鏡)。

- 333 蛸や鳥居のおくの翌ならふ (句双紙・題林発句集)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。中七「高野のおく
 の」(題林発句集)。
- 334 をどり子や日は入ても寺の門 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 335 明ゆくや雪げに叫ぶ寺の猿 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 336 酔ざめや松を後に春の暮 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 337 しのゝめや葵使の江戸を立 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 338 袖摺の松をうしろに蕨とり (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 339 夕がほや糸とる尼に鶏眼あり (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 340 草枯て池に水ます入日かな (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 341 中／＼に死なじ雑煮の喰ごゝろ (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 342 六月や道に煩ふ重砂子 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 343 君が代や花にわらじの雑事銭 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 344 西風や樗にかゝるたゝら雲 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 345 枝低き一重桜の槌ぐもり (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 346 麦打や親子昼寝の井の字窓 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 347 かき上て清水結んざれ萩 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 348 寒月や五辛ゆるさぬ寺の門 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 349 柴の戸や木の葉の上の錢二百 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 350 春風や箱の口はる干うどん (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 351 ぬくめ鳥と是をいふがに羽抜鳥 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 352 雨晴や雉子鳴原の浅みどり (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 353 乗かけに紅葉かざして宇津の山 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 354 飼桶を馬のころばす田植哉 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 355 山寺になれて春待齡かな (句双紙)

- * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 356 穴ごもる蛇の行へやは、そ原 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 357 成就院さも涼しげに若楓 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 358 尾長鳥冬木の梅のかざし哉 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 359 坂本や松に夕日の稲すゝめ (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 360 書初や扇に画く桃太郎 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 361 かも川の螢は甘きにほひ哉 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 362 おもひかへて枕崩すや霜の朝 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 363 石山や石立かくすうら若葉 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 364 冬一日加茂に集ふと思ひけり (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 365 梅ちるや嵯峨へ出でくるさくら摺 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 366 山萩の下こそりする兔かな (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 367 早苗ぶりや妹がかゝえし山折敷 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 368 雪村が画くにひとし雪の人 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 369 一すぢに心を染よ願の糸 (句双紙・題林発句集)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。中七「思ひを染よ」(題林発句集)。
 370 馬さくれの氷を走る鼠かな (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 371 雁風呂や北は果なき海の雲 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 372 冬がれや石の鳥居に日の暮る (句双紙・題林発句集)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 373 夕立や白き風吹く竹の奥 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 374 室君の梅もて参る彼岸哉 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 375 花に行や桜の涉し錢五文 (句双紙・潮来集・あみだ坊)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 376 朝風や尾ごしの鴨の袖を摺 (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。
 377 壺袖もちぎれと走る風巾のふし (句双紙)
 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。

378 夕がほをふるひ落すや鉤くづ (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

379 桶とりや思ふ事みな面の内 (句双紙・短冊)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。前書「壬生念仏」

(短冊)。

380 花もたぬ寺とてはなし鱗藏 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

381 渋谷や家の後の糸鶏頭 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

382 雷のいつはりがまし花の雲 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

383 団扇ひさぐ市女立けり橋の北 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

384 梵論や竹吹初る春のかぜ (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

385 松の露に袂よごして遊ばや (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

386 夕蟬やあふとねふくの袖にちる (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

387 松原に蛤焼や春のくれ (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

388 名月やひとり観じて愚に雲 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

389 ごぼく／＼とさらし搗けり春の暮 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

390 打水の跡に下るや蜘蛛の糸 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

391 砂物のすゞし四月の池の坊 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

392 龍灯の松にうつりて雨寒し (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

393 日の筋や鳩の浮巢のかいつくる (句双紙・題林発句集)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

394 駒犬の足く／＼りけり神無月 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

395 拝殿に琵琶法楽の月夜哉 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

396 裸子のころびあるくや蚊屋の裾 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

397 山がらす啼や卯月の根なし雲 (句双紙・彦陽十境・す、きの月)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。肩書「洛」(彦陽

十境)、同「粟津」(す、きの月)。

398 山井や水かれ／＼につむ紅葉 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

399 さびしさや菊と我との影ぼうし (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

- *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 400 ごろ／＼と昼寝はじめる陸月哉
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 401 年わすれ河豚買ふ人をとゝめけり
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 402 世のさまや令法つみ亦杉菜摘
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 403 爪とらむ薺の汁を猫の臭
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 404 飛入の角力速に負てけり
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 405 日の暮て左背子舞けり蓑と笠
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 406 鳩鳴や楓にこもる太子堂
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 407 稲垣にけらるゝ冬の朝日かな
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 408 盃のなかばなりけり花の雨
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 409 にげなしや野菊にかゝる牛の尿
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 410 したゝるき雨の雫や花柊櫛
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 411 麦秋や隣の村も酢が切る
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 412 弦召や汗の玉ちる小手の上に
 (句双紙・新類題発句集・題林発句集・独喰・俳諧短冊纂攷)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。上五「犬神人」
 (纂攷)。中七「汗のたばしる」(新類題発句集・独喰)、
 下五「小手の上」(新類題発句集・題林発句集・独喰)、
 「小手の山に」(纂攷)。
 413 舟造る大工出揃ふ春辺哉
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 414 飼猫の声合せけり寒の雨
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 415 髪置や守袋の蜷むすび
 (句双紙・題林発句集)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 416 初しぐれ神に仕る人ゆかし
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 417 雨の月心にくまはなかりけり
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 418 伐透す竹に日のさす坊の春
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 419 酒造る家に飼たる鶉かな
 (句双紙)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。

- 420 三布蒲団かけてつめたし置火燵
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 421 杜若白きは己が其まゝか
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 422 木母寺や人も遊ばぬ小六月
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 423 撰分てひとつに包若葉哉
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 424 猪牙舟やみな一様の汗払ひ
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 425 さる人の衣紋つくるや梅の月
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 426 塊に草もえ立や甲賀谷
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 427 朔日に南天の実をかこひけり
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 428 うき旅を思ひ直すや小夜砧
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 429 雨の日の詠は浅黄ざくら哉
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 430 夜の花もの狂はしき法師哉
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 431 葦踏で主がほせり庭せゝり
（句双紙・かなしぶみ）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 432 * 天明六年三月跋、これ以前の成立。前書「去来庵にて」、上五「葦ふんで」（かなしぶみ）。
- 432 かれ葦や淀野の沼の鉄気水
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 433 ばせを雨にやれ扇風に裂てかなし
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 434 きりぐす鳴や七ツの迎ひ駕
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 435 立かはり人涼けりくぼみ堂
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 436 鶏頭やあまり赤さに日のくるゝ
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 437 日斜に小倉堤を行しぐれ
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 438 朧夜やひやりと顔に梅のちる
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 439 門番に水もらひけり心太
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 440 待明す月にうれしき野寺哉
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 441 しら露やむさしと思ふ草もなし
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
- 442 陽炎のかた尻かける雨気哉
（句双紙）
* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

- *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 443 川床や加茂と葛野の水くらべ
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 444 白雲と見しはひが目か普賢像
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 445 春風や妹が手業の握り墨
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 446 霜月や鍛冶が女の神せゝり
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 447 秋の山わたくし雨の晴間かな
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 448 籠るともなくて墨摺巨燵哉
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 449 芋汁のすゝみ過たり青あらし
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 450 朝霧や道ある方に牛吼る
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 451 八朔やこゝろ尽しの梅の花
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 452 早乙女の休み所や寺の椽
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 453 けし粒にも書く春の夕哉
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。

(句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)

- 454 松原に細引こゑや春の宵
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 455 我さかと終にはなりぬ年の暮
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 456 薦の芽や色紙まくれし壁に這ふ
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 457 山茶花を軒のかざしや梓神子
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 458 初日影そも日向とは日にむかふ
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 459 門すゝみ小家がちなる西の京
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 460 かし寺や時雨る中に碁の音す
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 461 打水もやがて乾くや石の竹
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 462 下垂のかた袖はねて鶴の箸
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 463 口切に呼れて行や柿ばかま
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 464 地に落す小鳥啼けり焼野原
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。

(句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)

- 465 白妙や桜がもとの朝きよめ
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 466 たま／＼に寺で物くふ花見かな
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 467 六月や葛の松原袖かをる
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 468 ネンカラニかた寄る春の日影哉
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 469 竹椽に甘葉辛菜や薄氷
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 470 犬神の術絶てけり島の春
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 471 春雨や投壺見に来る美少年
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 472 朝戸出や蒜の籬にわかれ霜
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 473 綾杉の板戸に移る春日哉
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 474 行年や毛ぬきにかゝる若白髪
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 475 春雨や眼鏡に曇る上絵書
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 476 ながき日や石部に泊る越後獅子
*天明六年三月跋、これ以前の成立。
(句双紙)
- 477 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
生鮒の蓋にはぬるや夜の音
(句双紙)
- 478 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
蚊の声や裏もかへさぬ庵の壁
(句双紙・年次未詳五月五日付朔順宛書簡)
- 479 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
秋のくれ竈に埋む芋がしら
(句双紙)
- 480 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
生延たほどは隙なし桜がり
(句双紙)
- 481 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
丹波路や菊にも酒の鬼ごろし
(句双紙)
- 482 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
箱崎の明るを月のうらみ哉
(句双紙)
- 483 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
古畑や日暮て迷ふ蕎麦の中
(句双紙)
- 484 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
粽ゆふ男に左甚五郎
(句双紙)
- 485 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
室町や馬鹿に鯛くふ蛭子講
(句双紙)
- 486 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
鳥籠に鼠付けり冬の雨
(句双紙)
- 487 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
須磨寺の時雨に逢ぬ旅役者
(句双紙)

487 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
青空やまことを添る帰花

(句双紙)

488 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
春風や童遊びの日にかはる

(句双紙)

489 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
能なしの花に狂ふや二日酔

(句双紙)

490 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
口めて思ふ事なし春袋

(句双紙)

491 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
辞世ともなれや初老の筆始

(句双紙)

492 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
卯月野や牛はなれ鳥雲に入

(句双紙)

493 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
世並よく人霞けり日本橋

(句双紙・小鳥・来之除元集)

494 *天明六年三月跋、これ以前の成立。前書「春景」、肩書「在江戸」(除元集)。

495 僧正のつくねて置し蚊帳かな

(句双紙)

496 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
火うつりや枝炭にほふむら紅葉

(句双紙)

497 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
秋たつや大きな家に人もなし

(句双紙・雁風呂)

*天明六年三月跋、これ以前の成立。

498 行秋や手をつくねたる嵯峨の奥

(句双紙・遅楊和舞頭歌・鶉之音)

499 *天明六年三月跋、これ以前の成立。肩書「京」(鶉之音)。
白蓮や瓶に水はるあかり床

(句双紙)

500 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
葉がくれに染尽しけり番椒

(句双紙)

501 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
二番子や巢立雀の声せまる

(句双紙)

502 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
立かはり菖蒲湯にごす大工哉

(句双紙)

503 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
つゝ折や雪踏とらるゝ石ぐるま

(句双紙)

504 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
黒ぼこの泥に塵引乙鳥かな

(句双紙)

505 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
斧入て冬木さくらの句ふ哉

(句双紙)

506 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
綿弓の曇らぬ音や春の雨

(句双紙)

507 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
柴の戸に留主と書たる芭蕉哉

(句双紙)

508 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
冬の日や石切る軒の石仏

(句双紙)

*天明六年三月跋、これ以前の成立。

509 昼中に椿落けりあかり床 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
510 安らひやあまりはやさば花散ん

(句双紙・新類題発句集)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

511 鳩藏の軒に巢つくる雀かな (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

512 雨こつて崩るゝごとし雲の峰 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

513 花の陰下戸にくれたき枕かな (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

514 早蕨やすぐろの薄姫小松 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

515 何人ぞ牡丹を覗くしのび笠 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

516 追風や五月廿日の海の闇 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

517 船岡や雲林院の秋の鐘 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

518 春風や軒に糸まく水車 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

519 夕立や庭に寝てゐる寺の犬 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

520 行雁や何を枝折に海のうへ (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。
521 縄提て人ゝむやふゆ木立 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

522 十分に花咲にけり生す柿 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

523 松原に白張かすむ御幸哉 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

524 万歳や鷹様出て九条殿 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

525 御廊下に米こぼしたる喜定哉 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

526 塊に下駄の齒重し五月道 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

527 嗅で見るものか蛙の干物など (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

528 市中や雨夜の月の蚯蚓鳴 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

529 寒菊のおくれをとらぬ句ひ哉 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

530 操の人形見にゆく枯野哉 (句双紙)

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

531 田にし鳴や真野の入江の夕附日 (句双紙)

- *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 532 池寒き番神堂の木葉哉
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 533 髻髷と椿落けり月の前
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 534 火串さすや余所は神鳴る雲の脚
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 535 里の子や薄刈く手切るく
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 536 早乙女の歌やそのまゝ百千鳥
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 537 ほとゝぎすよるべの水の月明り
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 538 けふ幾日同じ所に雨蛙
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 539 むら雨や寺は桂の菊ばたけ
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 540 夏山やまくり手したる飛驒工
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 541 影となり日なたとなりて菊畑
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 542 撫子や押水たるむ大和川
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。

(句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)

- 543 引繩に蛸壺空し秋の風
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 544 春の雪ひそかに積る東求堂
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 545 へんくゑの声ある夜の雪吹哉
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 546 旅まくら二百十日と人申
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 547 春雨や膝立直す経机
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 548 もろくの草はともあれ枯芭蕉
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 549 昼からの梅のみだれや風の筋
 (句双紙・松のそなた・常盤の香)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。肩書「在江戸」
 (松のそなた)。
 550 帰花ものにまぎれぬ心かな
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 551 露の萩あらゆる草に似たる哉(句双紙・俳諧阿海が家)
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。
 552 等閑に喰ひ余しけり寒鳥
 *天明六年三月跋、これ以前の成立。

(句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)
 (句双紙)

553 冬がれや椽に仰向く竹の下駄（句双紙・新類題発句集）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

554 月あかき二条通や盆の人（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

555 木賊刈袖に落けり二日月（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

556 うす暮や馬の爪切る雪明り（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

557 我父の束帶つけん今朝の春（句双紙）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。

天子の舞御覧といふ事を

558 東遊び五徳の冠者出るあらむ（句双紙・摺物）

* 天明六年三月跋、これ以前の成立。前書「舞御覧を題にて」（摺物）。

559 春雨や芝居崩れの綿ぼうし（力すまふ）

* 天明六年七月序、同年春の成立。

560 明ゆくや一夜の松に梅花（統一夜松後集）

* 天明六年九月九日序、同年春の成立。

此句春夜楼よりきこゆ

561 妹が手に蛭まねけよ菜摘茶屋（葵そら）

* 天明六年夏成立、同年夏の成立。

562 秋の風さながら夢のもろかづら

（八月二十一日付古声宛重厚書簡 寺地文人蔵）

* 天明六年八月二十一日。これ以下、564まで同様。

563 除て玉需世や人のうへ

（八月二十一日付古声宛重厚書簡 寺地文人蔵）

* 天明六年八月二十一日。

564 清水の舞台に立や相撲取（八月二十一日付古声宛重厚書簡 寺地文人蔵）

* 天明六年八月二十一日。

565 風の薄吾にもあらぬ夕べ哉

（九月十日付何木（可卜）宛重厚書簡）

* 天明六年九月十日。

566 白きより消やしぬらん秋の蝶（遅楊和舞頭歌）

* 天明六年秋吟遊。

567 しぶ柿に礫うちけり乞食の子（乞食袋）

* 天明七年夏序、同六年秋の成立。

568 妻なしの細工見せけり鶉籠（一枚摺）

* 天明六年奥、同年秋の成立。

569 時雨会や護摩酔す、める旅の客（しぐれ会）

* 天明六年十月十二日、時雨会興行。

570 霜寒き奈良の乞食が朝茶哉（乞食袋）

* 天明七年夏序、同六年冬の成立。

571 大どしや塵つかの梅小かはらけ

（乞食袋・新類題発句集）

* 天明七年夏序、同六年歳暮吟。中七「塵塚のちり」

(新類題発句集)。

572 胸あはぬ妹が着せたる蒲団哉

(曙双紙)

*天明七年歳旦帖、同六年歳暮吟。

天明七年 丁未 (一七八七) 四十九歳

573 獅子舞に蝶に鎧のわたし哉

(曙双紙)

*天明七年歳旦吟。

574 正月や炬燵のうへの小盃

(初懷紙・新類題発句集・竹原聖)

*天明七年歳旦吟。上五「初はるや」(新類題発句集)。

肩書「京」(新類題発句集)・同「洛」(竹原聖)。

575 殿原のそれ矢ひらひぬ松のうち

(泰溪しゆんてふ・松露随筆)

*天明七年一月刊、同年歳旦吟。中七「逸矢ひろふ

や」(松露随筆)。

576 華に寝る我も乞食か旅千里

(乞食袋)

*天明七年夏序、同年春の成立。

577 七癖の我にうめ咲旅寝かな

(乞食袋)

*天明七年夏序、同年春の成立。

578 夏瘦や乞食ものがるゝ筆の塵

(乞食袋)

*天明七年夏序、同年夏の成立。

579 一夜く欠て行也高灯籠

(歩十居士追悼集)

*天明七年七月奥、この頃の成立。

上に仕へて私なく、例の風雅をおこたり玉へる
人に

580 露の間を祈りながらに咄しせよ 洛重厚 (真蹟)

*天明七年八月二十三日の成立。

581 朝戸出や露になれたる丸天窓 嵯峨重厚 (農おとこ)

*天明八年一月序、同七年秋の成立。

582 秋雨やむかしをとこの夜手習 (一枚摺)

*天明七年以前成立の几董句と並出するので、同年秋の成立。

583 ばせを忌や通夜の雨間の高念仏 (しぐれ会)

*天明七年十月十二日時雨会の成立。

天明八年 戊申 (一七八八) 五十歳

584 人先に若菜呼こむ筆屋哉 京重厚 (稻後春興帖)

*天明八年歳旦吟。

585 歩人に護盗子もなしよ箱根山 東都重厚

(俳諧五十三駅)

*天明八年四月序、これ以前の成立。

586 行違ふ葵使ひやうつの山 (俳諧五十三駅・名家短冊帖)

*天明八年四月序、これ以前の成立。下五「ほとゝぎす」(名家短冊帖)。

587 遣羽子や打出の浜の友千鳥

(俳諧五十三駅・名所小鏡)

* 天明八年四月序、これ以前の成立。

588 鯨つく嘶も尽て門涼 東武重厚(桃の白実・誰が恋)

* 天明八年夏序、この頃の成立。肩書「在江戸」(誰が恋)。

589 名月や我とし隠す影もなし

(百明月・鷺十上人発句集・わかば集)

* 天明八年八月序、この頃の成立。

590 秋風や大同二年の跡を見ん (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。これ以下、

633まで同様。

591 秋のくれ画る人にものをいふ (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

592 朝風やたばこの広葉露乱る (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

593 朝寒や菅菰羽折馬の上 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

594 山深し檀木にかゝる秋の雲 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

595 家に住心してけり秋の雨 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

596 常住に心の儘や秋の空 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

597 秋の水心の池も有ならん (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

598 打出て初月見ばや小槌川 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

599 龍灯も上るものかも松の月 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

600 若水や古き唱歌もありとこそ (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

601 命なり我おり比出を秋の暮 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

602 此頃や日にく秋の鰯雲 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

603 月照るや玉を延たるものゝ影 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

604 秋入や其ふた神の捧もの (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

605 涼しさや海より秋の風薫る (奥の紀行・句碑)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

606 海山に秋のみちたる風情かな (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

607 待宵や粧ひ見せよ十二神 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

608 奥の井や月に鯨の啞有らん (奥の紀行・小鳥)

- 609 天明八年八月三日から九月十八日の成立。前書「浄土の浜に石をつみては、父母のしきりに恋しく、槽声なみを打て腸氷るばかり」下五「鳴あらむ」(小鳥)。
花芒人もこゝろは散安き
(奥の紀行)
- 610 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
ひじき藻に玉虫聞ん声あらば
(奥の紀行)
- 611 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
秋の暮袋披や唯ひとり
(奥の紀行)
- 612 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
はつ汐の船とめてけり鋏が崎
(奥の紀行)
- 613 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
先たのむ月の名なりや宮古島
(奥の紀行)
- 614 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
高波や岩にさからふ秋の声
(奥の紀行)
- 615 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
秋の雨旅に居てさへつゝがなし
(奥の紀行)
- 616 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
色かへぬ松のみどりや家の風
(奥の紀行)
- 617 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
おもふこといひ残しけり鶉立
(奥の紀行)
- 618 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
髭有らば宗祇に似たり秋の雨
(奥の紀行)

- 619 玉川や汐も真水の秋の声
(奥の紀行・句碑)
- 620 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
夜や寒し菅菰からん十府の人
(奥の紀行・句碑)
- 621 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
日の入や花野を馬の行所
(奥の紀行)
- 622 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
秋の蝶草にかくれて日暮たり
(奥の紀行)
- 623 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
入船や帆柱並ぶ奥の秋
(奥の紀行)
- 624 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
此山に冥加あらせ給へば池の月
(奥の紀行)
- 625 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
秋の夜や蚤の剣は何地獄
(奥の紀行)
- 626 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
ものゝ葉にはしばみ盛よ念仏せん
(奥の紀行)
- 627 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
白菊や何の心の香に匂ふ
(奥の紀行)
- 628 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
落付て花まで探れ菊の宿
(奥の紀行)
- 629 天明八年八月三日から九月十八日の成立。
影澄や地獄くゝの水の月
(奥の紀行)

630 手向には菊めし炊ん手鍋して (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

631 橋杭の鮑目見せて筆津虫 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

632 後の月影もの寒き光り哉 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

633 蔵作る手斧はじめや菊畑 (奥の紀行)

* 天明八年八月三日から九月十八日の成立。

634 弓提て一里霜ふむもみち哉 (遊子行・発句題葉集)

* 天明八年十二月八日奥、これ以前の成立。

635 京町や小うた上るりさよしぐれ (あか冠)

* 寛政元年春序、天明八年冬の成立。

636 牛かりてしぐれて見ばや須磨明石 (うらあふぎ)

(うらあふぎ)

* 寛政元年四月序、天明八年冬の成立。

安永・天明期

637 名月や貧乏神は (露光宛重厚書簡)

* 安永・天明期の成立。

天明期

638 よく肥て夜寒もしらぬ軒かな (長月の夜)

* 天明期の成立。

如一味雨隋衆生所受不同如草木といふ心を

639 しぐるゝや干ならべたる土人形 嵯峨重厚(星あかり)

* 天明期の成立。

寛政元年 (天明九年一月二十五日改元) 巳酉 (一七八九) 五十一歳

640 木や町の座敷から出る花見哉 (春曙帖)

* 寛政元年歳旦帖、同年春の成立。

641 ある僧の人ゑらみする花見哉 (来之除元集)

* 寛政元年歳旦帖、同年春の成立。

642 春の風心にかよふ朝寝哉 (初懷紙・一幹老人句集・俳人重厚私大卷)

(初懷紙・一幹老人句集・俳人重厚私大卷)

* 寛政元年歳旦帖、同年春の成立。前書「春興」(俳人重厚私大卷)。

重厚私大卷)。肩書「洛陽」(一幹老人句集)。

643 春雨や夕くれかけて崩よる (こてふづか)

* 寛政元年三月序、この頃の成立。

644 花咲て二日わするゝうき世かな 嵯峨重厚

(はすの浮は)

* 寛政元年夏跋、同年春の成立。

645 雨の花鬼こもるべき小家かな (よし野紀行)

*寛政元年記、同年春の成立。

646 桜人世界は花と成にけり (寛政己酉句録・さくら塚)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。これ以下、

656まで同様。肩書「義仲寺」(さくら塚)。

647 根深くふ人は誘はじさくらがり (寛政己酉句録)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。

648 夜桜に我衣うすき深山かな (寛政己酉句録・肥後のもの・初すゞり・俳人重厚私大巻)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。肩書「在東都」(初すゞり)。

649 牡丹咲や家は世かはり人かはる (寛政己酉句録・かしま紀行・たはらの口・栞集・一枚摺)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。上五・中七「木芍薬さく家や世かわり」(一枚摺)。中七「我は世かはり」(栞集)。下五「人かはり」(かしま紀行・栞集)。肩書「洛」(かしま紀行)。

650 牛壳の牛繫けり夏木立 (寛政己酉句録)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。

651 五月雨や東坡が作る九相の詩 (寛政己酉句録)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。

652 泣上戸下戸の扇をならしけり (寛政己酉句録)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。

653 夏もちや小仏峠風のすぢ (寛政己酉句録)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。

654 石竹や胸のほむらを日に隠す (寛政己酉句録)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。

655 白がねにかえて富けり冬牡丹 (寛政己酉句録・十波羅蜜・俳人重厚私大巻)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。前書「雪のふる夜はさむく、青楼にのぼりて小紫が錦の夜着をかぶる」(十波羅蜜)、「雪のふる夜は寒く、青楼にうかれて小紫がにしきの夜着かぶる」(俳人重厚私大巻)。

仏といふ字を題に探

653 夏もちや小仏峠風のすぢ (寛政己酉句録)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。

恨恋

654 石竹や胸のほむらを日に隠す (寛政己酉句録)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。

雪のふる夜はさむく、青楼にのぼりて小紫がにしきの夜着をかぶる

き

655 白がねにかえて富けり冬牡丹 (寛政己酉句録・十波羅蜜・俳人重厚私大巻)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。前書「雪のふる夜はさむく、青楼にのぼりて小紫が錦の夜着をかぶる」(十波羅蜜)、「雪のふる夜は寒く、青楼にうかれて小紫がにしきの夜着かぶる」(俳人重厚私大巻)。

花の咲日は戯場にうかれて団十郎が柿の素袍の袖をひく

はつ鯛や先ひれのある男ぶり

右晋子が風骨をうつす

(寛政己酉句録・十波羅蜜・俳人重厚私大巻)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。左注は655

「白がねに」句を含む。前書「花の咲日は戯場に出て団十郎に柿の素袍の袖を引」(俳人重厚私大巻)。左注が「十波羅蜜」(俳人重厚私大巻)には無い。

656 花の咲日は戯場にうかれて団十郎が柿の素袍の袖をひく

はつ鯛や先ひれのある男ぶり

右晋子が風骨をうつす

(寛政己酉句録・十波羅蜜・俳人重厚私大巻)

*寛政元年六月七日着書簡、これ以前の成立。左注は655

「白がねに」句を含む。前書「花の咲日は戯場に出て団十郎に柿の素袍の袖を引」(俳人重厚私大巻)。左注が「十波羅蜜」(俳人重厚私大巻)には無い。

波羅蜜」(俳人重厚私大巻)には無い。

657 葛水や勸学院に施薬院 (寛政己酉句録)

*寛政元年閏六月二十九日着書簡、これ以前の成立。これ以下、661まで同様。

658 抱籠に寝たふり見せる小六かな (寛政己酉句録)

*寛政元年閏六月二十九日着書簡、これ以前の成立。

659 夏参りや朝天神に夕薬師 (寛政己酉句録)

*寛政元年閏六月二十九日着書簡、これ以前の成立。

660 夕立や俄ご、ろの料理草 (寛政己酉句録)

*寛政元年閏六月二十九日着書簡、これ以前の成立。

661 高安へ大工の通ふ清水かな (寛政己酉句録)

*寛政元年閏六月二十九日着書簡、これ以前の成立。

662 大磯の遊女少なき蚊やり哉 在江戸重厚

(奉納集・題林発句集)

*寛政元年七月刊、同年夏の成立。但し、天明六年九月序なので、同年の可能性もある。

663 木母寺や麦の穂くもる月のまへ (観月楼句集)

*寛政元年九月序、同年夏の成立。

664 菊売の雨やどりけり羅生門 洛嵯峨重厚 (心二)

*寛政二年春序、同元年秋の成立。

665 鳴立て月夜となりぬ左り富士 (其梅)

*寛政元年秋の成立。これ以下、668まで同様。

666 虫撰ん袖に落るや夜這ひ星 (其梅)

*寛政元年秋の成立。

667 秋の暮算めは数添ふ七柏 (其梅)

*寛政元年秋の成立。

668 秋雨や夕暮ながら物足らず (其梅)

*寛政元年秋の成立。

669 卯の花と見えて紙すく垣ね哉 (新類題発句集)

*寛政元年冬至序、これ以前の成立。以下673まで同様。

670 中／＼に啼もつのらずかんこどり (新類題発句集)

*寛政元年冬至序、これ以前の成立。

671 八朔やかしこき梅の品さだめ (新類題発句集)

*寛政元年冬至序、これ以前の成立。

672 霜ばしら輪乗の駒の蹄かな (新類題発句集)

*寛政元年冬至序、これ以前の成立。

673 鳥の巢や雨にみだる、髪の落 (新類題発句集)

*寛政元年冬至序、これ以前の成立。

674 聞得たる行手の声やほとゝぎす (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊なので、これ以前の可能性もある。これ以下、718まで同様。

方西園が鶏の画に

675 唐土の元日問む山かづら (小鳥・発句題葉集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

南部のわたくし大といふ事を

676 はつとりや余所の二日は何ごゝろ

(小鳥・俳人重厚私大卷)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。前書

「試筆　ことしの春は此国ぶりのわたくし大なれば
菅原重厚」(俳人重厚私大巻)。

海宝禪師にまかりて

677 つばみ枝や伏見のうめの第一義 (小鳥・発句題葉集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。前書
「海宝禪師謁して」(発句題葉集)

瀬田の橋柱の古木を台子にものして、義仲寺の春
をむかふ折から、其五間のまの水を茶にむすび結
ふ。こや宇治橋の三間の水脈にして、茶道の人此
水のほがらかなる事をよくしれりとぞいふ

678 はつ鶏に声あはせけり釜の熱 (小鳥・逢が室)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。肩書
「洛」(逢が室)。

679 春の水葱洗ふ香のなくも哉 (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

680 人寒く遠目にうめのさかりかな

(小鳥・ひふみの巻・華の旅)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。肩書

「近江」(華の旅)。

681 うき猫をあづけて大和めぐり哉

(小鳥・西国順廻うめ柳さうし)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。肩書

「桃青院」 (西国順廻うめ柳さうし)。

682 瀬田蜩幾夜の星のひかりかな (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

683 霜の鐘既に八十八夜かな (小鳥・発句題葉集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

684 千貫のさくら持けり世捨人 (小鳥・新さむしろ)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。肩書

「近江」(新さむしろ)。

685 大秦の犬も送るや花戻り (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

東都

686 梅柳大名小路馬糞搔 (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

台嶺

687 大名の花守かはるゝにも (小鳥・俳人重厚私大巻)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

688 衣がへ庵はむぐらとなりにけり

(小鳥・砧のひゞき・雪のかつら・発句題葉集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

689 むら雨に品も崩さず青あらし (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

690 友食の犬も眠らずほとゝぎす (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

691 短夜や寄居虫のかはる舎もなく (小鳥・ずず塚集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。中七
「寄居のかはる」(ずず塚集)。

692 既九年の春秋をふりてふた、び岩手の関をこゆる
鑑山や五月五日の草ふまん (小鳥・

はすのくき・俳人重厚私大巻・綿屋文庫蔵貼交屏風)
*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。上五
「鑄山や」(貼交屏風)。前書「既九年のはる秋を経て
ふた、び岩手関に杖を曳」(俳人重厚私大巻)。貼交屏
風の真蹟には、前書が無い。

出羽の国に入て

693 象潟のうつ、に昼の水鶏哉

(小鳥・しばふくかぜ・勸進帖)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。中七
「うつ、を昼の」(発句題葉集)。肩書「粟津」(勸進帖)。

694 六月の水嚙けり湯殿山 (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

695 我魂を啼へらしけり夜の蟬 (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

696 蚤ふるふ千石船の月夜かな (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

竹生島より宝寺につたへし小松風といふ笙の笛、
又、鳥羽法皇の製したまひし念仏丸といふ笙の二

管を、紫竹何がしの院より此比禁中に献じ奉と、
有がたき事うけたまはりて

697 蟬啼や雲井に登る小松風 (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

698 上もなく風薫りけり念仏丸 (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

699 秋たつや生死はなれて小手枕

(小鳥・松葉塚・逢が室・松の炭・時雨集・都鳥〔みどり
の松〕・槐亭集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。肩書

「義仲寺」(松葉塚)、「アワヅ」(松の炭)、「粟津」(時
雨集)。

700 あき風やまぎれぬものは午の貝 (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

義仲公の塚の松の梢に灯をかゝげて

701 御最期の深田もてらせ高灯籠 (小鳥・発句題葉集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

切杭僧正

702 又其后なめす、きともいはまほし (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

兼好法師

703 死ねといふ四十を角力ざかり哉 (小鳥・発句題葉集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

704 神農の御代にはあらじ若たばこ (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

705 しら露は国常立の涎かな (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

医師の道は仲景を祖とし、俳諧の風流はばせを翁を師として、しかも時にはあはざる隠君子あり。彼美玉を櫃に藏てかくしたる類ひなるべし

706 我が問はゞありと答へよ露の玉 (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

かく申とおもふうち夢覚ぬ。いかなる人に対したるにや。其人なつかし

707 名月やうき世に曇る人のかげ

(小鳥・百家仙・発句題葉集・はすのくき)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。前書

「左の俳諧しりへにものして衆人みな酔り、我ひとり醒たり、と鼻の下うごめくも腹ふくる、のわざなり」
(はすのくき)。

708 蜘蛛の巣の夕露寒し羅生門

(小鳥・潮来集・発句題葉集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。中七

「夕露淋し」(発句題葉集)。

709 初しぐれ加茂は嬉しき処哉

(小鳥・なつくさ・つくだ集・松の花・都鳥〔みどりの

松〕・霜夜ほとけ・発句題葉集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。肩書

「近江」(なつくさ)、同「アハツ」(つくだ集)、同「粟津」(松の花)、同「江州」(霜夜ほとけ)。

710 水鳥の空飛ぶ雲の林かな (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

711 冬籠破らじと思ふ妄語戒 (小鳥・発句題葉集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

鼠

712 星ふけて首筋寒しねづみ穴 (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

犬

713 家守る犬に霜おく夜明哉 (小鳥・短冊)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

714 藜くふて夜遠し寝もせず霜の鐘 (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

715 鰻喰ぬ人と富士見ぬ人愚なり (小鳥)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

716 雪の日や隣へ戻す諏訪の箸 (小鳥・逢が室)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

717 ゆきの窓十二因縁尽てけり (小鳥・発句題葉集)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。

718 乾鮭の縄ふきほどく嵐哉

(小鳥・俳諧松露庵隨筆・花塚集・奥のしほり)

*寛政元年成立、これ以前の作。但し、同五年刊。中七「縄吹ちらす」(俳諧松露庵隨筆・奥のしほり)。肩書「京都サガ」(奥のしほり)。

我が友几董身まかりぬと、紫暁が遠告しらせけるに、胸つぶる、ばかり、既手のを落す。此人や常に晋子が風骨にふけり、別号を晋明といふ。其没する年四十余。角が齡又かくのごとし。

719 惜まれて死損もなし雪の人 江都重厚 (鐘筑波)

*寛政元年十一月序、この頃の成立。几董は十月二十三日没、享年四十九歳。

720 我ふるし弁慶殿を玉まつり (あさかり)

*寛政元年刊『浅草』に広告があり、この頃の成立。

721 三井寺の児参りけり年忘 (梅人歳旦帖)

*寛政二年歳旦、同元年末の成立。

寛政二年 庚戌(一七九〇) 五十二歳

722 鶯のはつ音も籠のわたしかな

(鳥吟俳家古今墨蹟・冬の日庵春興)

*寛政二年一月成立、この頃の成立。

723 はるの宵畳にこぼす油かな

(ちどりづか・竹のやどり)

*寛政二年十月十一日興行、同年春の成立。

724 西山やとぶさをちらす花の中 (春のおとづれ)

*寛政二年成立、同年春の成立。

725 郭公待夜ほぐれて愚にくらき 江戸重厚 (奉扇会)

*寛政二年四月十二日奉扇会以前の成立。

726 杜若白きはたれにまいらせん 山城重厚

(其みちのく)

*寛政二年序、同年夏の成立。

727 木守の柿に落るや夕日影 (其梅)

*寛政二年秋の成立。

728 露寒し人がほうとき草の庵 (其梅)

*寛政二年秋の成立。

729 伐あらず竹の月夜や冬の影 近江重厚

(一声塚百廻忌・さ、ふね)

*寛政二年十月十二日興行、これ以前の成立。『さ、ふね』には、肩書が無い。

はる／＼我旅寝の梅園をとふ瓜坊・宗讃を幸に、あるじをすゝめて、翁の百廻忌をいとなむこと、不可思議の因縁なり。

730 芭蕉忌や君がおしへの愚を守る

(芭蕉百回忌・しぐれ会・冬かつら)

*寛政三年春以前、同二年の芭蕉忌の成立。肩書「洛」

(冬かつら)。なお、『しぐれ会』・『冬かつら』には、
前書が無い。

731 冬の夜やおもひ忘れし足の爪 (其梅)

*寛政二年冬の成立。これ以下、743まで同様。

732 石炭のふすばりとめん夜の客 (其梅)

*寛政二年冬の成立。

霜月二日

733 雪降や喰もの探す雪の鳥 (其梅)

*寛政二年冬の成立、十一月二日の作。

734 花飛々蟻の塔組茶の木哉 (其梅)

*寛政二年冬の成立。

735 おもひ出や夜這一里の雪車に乗る (其梅)

*寛政二年冬の成立。

736 冬籠心に隙はなかりけり (其梅)

*寛政二年冬の成立。

737 雪降や大名過る河内越 (其梅)

*寛政二年冬の成立。

738 雑魚寝せん葦を飯の草むしろ (其梅)

*寛政二年冬の成立。

739 塩風呂の酔吹れけり川衛 (其梅)

*寛政二年冬の成立。

740 車押雪の轍や神田橋 (其梅)

*寛政二年冬の成立。

741 寒念仏しばしうき世の出来心 (其梅)

*寛政二年冬の成立。

742 雪車牽ん七日七日の墓まゐり (其梅)

*寛政二年冬の成立。

743 春待や故郷の文の片便 (其梅・俳人重厚私大卷)

*寛政二年冬の成立。前書「年尾」(俳人重厚私大卷)。

冬吟

744 中／＼に鰻とぐ牛の刀かな 在南部重厚

(あけぼの草紙・はつすゞり)

*寛政三年一月刊、同二年冬の成立。

745 分前の愚にかへりけり薬喰 (さくら智・発句題葉集)

*寛政三年六月序、同二年冬の成立。

寛政三年 辛亥 (一七九二) 五十三歳

746 春の水榎の株にたゝへたり (其梅)

*寛政三年春の成立。

747 春の夜やしばし眠りて舌を噛む (其梅)

*寛政三年春の成立。

748 小きりこの竹作らせむ小正月 (追善談言史)

*寛政三年一月の成立。

749 初がらす我死ときは何と鳴

(俳諧実色・鬼やらひ・つきよぼとけ・粟まき集・種久利)

*寛政三年二月序、これ以前の成立。肩書「近江」(鬼やらひ・つきよぼとけ)、同「粟津」(粟まき集)。

既に元亨釈書を読終てしきりに捨身行者をうらやむ

750 花鳥に我は紛れず死いそぎ 嵯峨重厚(こぞのなつ)

*寛政三年六月二十三日興行、この折の成立。

751 蚊ばしらを吹くづしたる嵐かな (水の月)

*寛政三年七月二十七日興行、この頃の成立。

752 秋の風いひほどかれぬこゝろかな 洛重厚

(みの虫)

*寛政三年十一月序、同年秋の成立。

伝聞、俳諧師は、死て必紙の地獄に落るとなん申に、行すゑ心ほそく、けふしも玉棚にむかへば

753 漉かへす紙の匂ひや蓮の飯 在京重厚

(まだら日記)

*寛政四年夏序、同三年秋の成立。

754 時雨る、や片目つぶれし鮎を釣 江戸重厚

(この時雨)

*寛政三年冬の成立。

755 冬の夜や命を撫る膝がしら 洛重厚

(霜の声・尾華うつし)
*寛政四年秋序、同三年冬の成立。中七「命を擦る」(尾華うつし)。

寛政四年 壬子 (一七九二) 五十四歳

756 浄るりのうへと申さず花に鳥 (来之春興集)

*寛政四年春序、この頃の成立。

757 寺町や女のすなる扇折 (奉納其二集)

*寛政四年春興帖、この頃の成立。

758 暁ちかき瓦灯のひかりや梅の風 東武重厚

(春の帖)

*寛政四年二月序、この頃の成立。

759 雪解やよし野をくだる坊が妻 (なにはの春)

*寛政四年二月序、この頃の成立。

760 人うとき横川の桜咲にけり (霜の声)

*寛政四年秋序、同年春の成立。

761 石竹の下行水や有栖川 (霜の声)

*寛政四年秋序、同年春の成立。

762 まいらする扇に絵がけ軒の図 洛陽重厚 (奉扇会)

*寛政四年四月十二日、奉扇会興行。

763 魂棚や山葵好しはどの仏 江戸重厚 (まつのしるし)

*寛政四年六月二十三日跋、これ以前の成立。

764 菊水も手向となれよ夏のもの (法の水)

*寛政四年夏奥、この頃の成立。

765 ひる顔や旅の昼寝の癖になる

(時雨塚百回忌・池のむかし・松露随筆)

*寛政四年十月十二日興行を収録、同年夏の成立。

肩書「皇都」(池のむかし・松露随筆)。

766 夕蟬やうしろの山ははた、神 粟津重厚

(も、ちどり・発句題葉集)

*寛政五年二月序、同四年夏の成立。

767 しらぎくに雨そ、ぎけり妙喜庵 粟津重厚

(夢の松風・しなえらび・俳諧これもよし)

*寛政四年八月序、この頃の成立。中七「露そ、ぎけり」(しなえらび)。

り

768 布施にひく衣うつ也丘の家

(続小筵・奉納其三集・華の土産)

*寛政五年二月序、同四年秋の成立。肩書「アハヅ」

(奉納其三集)、同「大津」(華の土産)。

769 名月やかけゆくものは老が友(も、とせのふゆ)

*寛政四年十月十二日興行を収録、同年秋の成立。

770 名月やうき世となるおくの海 粟津重厚

(後のたび・百物語)

*寛政五年五月奥、同四年秋の成立。前書「狭の里に衣うつ声は故郷恋しく蝦夷が籠の冷じきを見れば旅の心

いよ／＼かなし」(百物語)。

771 生飯をとる袂くらしや朝時雨 (しぐれ会)

*寛政四年十月十二日、時雨会興行。

772 木枯風や宵寝まどひの犬奉行 義仲寺重厚

(新華つみ)

*寛政四年序、同年冬の成立。

寛政五年 丑(一七九三) 五十五歳

773 陽炎や二日見て行浜庇 義仲寺重厚

(あけぼの草紙・あざざり)

*寛政五年歳旦吟。

774 下戸がちに蜜柑くひけり春の宵

(来之春興集・蕉翁墨跡・あみだ坊)

*寛政五年歳旦帖、この頃の成立。肩書「粟津」(蕉翁

墨跡・あみだ坊)。

775 か、る日を人のまことや花供養 義仲寺重厚(花供養)

*寛政五年三月十二日興行、この年の春の成立。

ふたりの婦人の発句して送る返し

776 花鳥にすぎなき人の立端哉 (笠の塵)

*寛政五年五月序、同年春の成立。

神代の杉の枕に、紙子ふとんのわびしきも、ものぐさき男には、相応のちそうなり

777 梅が香に魂いりて高いびき (さ、栗の露)

*寛政五年彼岸序、同年春以前の成立。

778 死ねくとうしろに花のゆふべ哉

(さ、栗の露・花供養)

*寛政五年彼岸序、同年春以前の成立。肩書「義仲寺」

(花供養)。

779 鶯やそれは扇の人やどり 粟津重厚 (はなのちり)

*寛政五年六月初め序、同年春の成立。

780 朝がすみ高麗人来べき空なれや (笠塚百回忌)

*寛政五年九月序、同年春の成立。

781 白梅に手の裏かへすあらし哉

(無功德・正月日記・す、ぬき・芭蕉翁古式之俳諧)

*寛政五年十月十二日序、同年春の成立。前書「とほき

ちかきのことばをよびをかしめてかきいでんに、えつ

くさずもうしけむもたかめれといひて」(正月日記)。

肩書「アハヅ」(正月日記)、同「義仲寺」(す、ぬき)、

同「栗津」(芭蕉翁古式之俳諧)。

782 はた打や大和河内は婦うち

(なもほとけ・発句題葉集)

*寛政五年十月序、同年春の成立。

783 おぼろく竹の子得たき月夜哉

近江重厚
(百とせづか兵庫)

*寛政五年十月序、同年春の成立。

784 友喰の雀に交るこてふかな (此まこと)

*寛政五年以前成立、同年春頃の成立。

785 花が実の名もひき残れ園の梅 (芭蕉百回忌・句碑)

*寛政五年以前成立、同年春頃の成立。句碑には「寛政

三年辛亥二月十五日 平角」とする(京都盛岡往った

り来たり)。

786 九度時雨る、市の春葉かな 義仲寺重厚

(道の灯かけ)

*寛政五年十月序、同年春の成立。

787 なき魂の来まさばみせん京の蓮 (後のたび)

*寛政五年五月奥、此の頃の成立。

788 すまの海枕を越る浪もなし 義仲寺重厚 (秋の声)

*寛政五年八月奥、これ以前の成立。

秋風しきりに吹めぐりて、翁の塚うごくばかり、

百年のむかしまのあたりに我泣声は

789 草の露やなきがら負し人の魂 (草笛)

*寛政五年八月序、この頃の成立。但し、寛政六年跋な

ので、同年の可能性もある。

一とせ太祇法師、我落柿舎の窓のもとに嵯峨日記

よむとて、きりくす膝までのぼる閑さよ、鳴

呼、此人常に秋をこのむくせありて、既二十余年か

の国に杖を曳て、ふた、び不夜庵に帰ることなし

790 月にとみ仏にとみて娑婆嫌 義仲寺重厚 (その秋)

*寛政五年九月十九日序、この頃の成立。

791 鳥の巣にはてはひかる、案山子哉

(小鍋立・画讃集・椎の陰・古かめ・真蹟)

*寛政五年刊、同年秋の成立。中七「後はひかる、」

(画讃集)、同「はてはなるべき」(真蹟)。前書「蛙は

蛇にのまれ、蛇雉子に喰る。そのきじ狩人にとられ、

狩人また鬼に腹せらる。これみな天地の流行なり」

(画讃集)、同「無見小利」(真蹟)。肩書「大津」(画

讃集)、同「行年九十七前落柿舎」(真蹟)。

792 玉祭我も粟津を死どころ

粟津重厚

(月いづこ・発句題葉集)

*寛政五年刊、同年秋の成立。『発句題葉集』には、肩

書が無い。

793 秋の風川二筋に流れたり

(雁風呂)

*寛政六年六月序、同五年秋の成立。

794 あら寂しこと葉の露の置処

(俳諧冬瓜汁)

*寛政五年冬跋、同年秋の成立。

795 中汲のはやくも出たり初瀬の町

(鳥塚百回忌)

*寛政五年十月五日興行を収録、これ以前の成立。

十月十日より二夜三日の念仏を修行し、十一日は

三井寺僧正を請し奉りて一座の経陀羅尼の行ひあ

り。十二日は僧の時雨会なれば、遠近の好士あつ

まり百年懐旧之俳諧を興行す

796 塚に伏ておもへど遠し枯尾花 (祖翁百回忌)

*寛政五年十月十二日、時雨会興行。

797 鰻くはぬふりして母につかへけり 近江重厚

(賤家集・発句題葉集)

*寛政五年十月十二日序、この頃の成立。

798 火桶抱て心千里をかけるかな (蕉翁百回忌)

*寛政五年十月序、この頃の成立。

香尽て柏をたき、三宝に供養し玉へる古人の例あ

れば

799 笠に散ち、りや焼んむら時雨 粟津重厚

(みちのかげ)

*寛政五年十月序、この頃の成立。

800 火桶作る土貰ひけり二子山 義仲寺重厚 (月の雪)

*寛政五年十月跋、この頃の成立。

801 風の外に人焼く煙かな (こがらし集)

*寛政五年十二月初旬成立、この頃の成立。

802 人ごとく夜賀にきくか小夜千鳥 粟津重厚

(俳諧冬瓜汁)

*寛政五年冬跋、この頃の成立。

803 冬木立うき世の外の嵐かな

(故郷塚百回忌・二季のつゆ・雲英末雄蔵 真蹟短冊)

*寛政五年成立、同年冬の成立。中七「うき世に遠き」、

肩書「近江」(二季のつゆ)。

寒山の讃

804 乾鯉は仏くさくもなかりけり

(故郷塚百回忌)

*寛政五年成立、同年冬の成立。

数

805 かゝなべて見れば八十八夜かな

(小艸)

*寛政五年成立、これ以前の作。これ以下、810まで同様。

山莊記 木坂山を翫ぶ人は仙家の人を友とするがごとく、山水の癖ある人は寿し。爰に勇士猿橋氏は、乾坤扶桑の庭を開きて、是がため半閑窟をまふけ、しばらく浩然の氣を養ふ。たま／＼人来る時は、必こゝに招じてともに樹下石上の交りを求め、もし興尽る事あれば速に去て、例の別座敷に杯を飛し、客は客の心に随ひ、主はあるじのこゝろにまかす。是則主の常の心なるべし。西行上人の歌に柴の庵と聞ばいやしき名なれども、世にこのもしきものにぞありける。まことにこのもしきお猿どののもの好に侍るよ

806 貝玉に箒も取らず夏の月 (小艸・俳人重厚私大巻)

*寛政五年成立、これ以前の作。

長崎行 都の空遠く八重のしほぢを経て長崎の浦に遊ぶ。所はつくし第一の湊にして、常に異国の船をよせしめ、からやまと萍水相逢の交りをもとむ。されば、市中は凸凹として聊平なる地な

く、人家七十余町薨を並べ、中にも紅毛の旅館

を出島と呼しめ、華人を集る館あり。大通辞、小通辞聖堂あり。或は唐寺、南京寺など見へぬもろこしの風流に善尽し美尽せり。左右の山は唐画のごとく北風吹、雲万里渡たぐひ、冠笠頭の峨々と聳へ、丸山寄合町は青楼のなまめきたれど、鶏をさく声の悲しく、猪むすにほひまで世のさま替たらん思ひせり。それが中に諏訪お、ん神のかうぐ敷立せ給ふをのみ我國のめでたきためしとは覺へ侍る

807 秋の暮天竺ちかく船を見る (小艸・俳人重厚私大巻)

*寛政五年成立、これ以前の作。

東夷行 遙に蝦夷松前を過て、海上三千里を行けばからふとにあり。彼カモイはと、きの矢をもてあざらしといふ獣をゐてとり、又メノコシはまきりを携て生馬といふ草を刈、こゝに至てはじめて別世界なる事をしれり。

808 我いまだみいらとならず霧の中

(小艸・発句題葉集・俳人重厚私大巻)

*寛政五年成立、これ以前の作。前書「はるかに蝦夷松前を過て、海上三千里を渡ればからふとに至る。彼かもいはと、きの箭をもてあざらしといふ獣をゐてとり、亦めのこしはまきりを携て生馬と申草を刈、こゝに至

てはじめて別世界なることをしれり。」（俳人重厚私大卷）

山の名 一日鶯宿なる温泉山に遊ぶ。こゝに男介やま女介山と聞へしは、往昔やごとなき公達のうき世のほだしをいとひ、琴ひとつを携へ黒木の家作りて朝夕かき鳴し居給ふを、何がしの長者の女見奉てひたぶる恋わびつゝ、数々の玉章を送る事あれど、もとよりかゝるべき交りをたち給へば、何のいらへなきを深く悲しみ、其隣のやまにかきこもり、もの喰業もせず終に身まかりぬ。扱後、かの公達も琴のみ山にのこし雲にや入給ふ。空にや隠れ給ふ。夢のうきはしとぞなりぬ。其跡を里人の男介女介といひ習はせりと、木賊刈翁の我に語りて、彼翁も又行かたを失ふ

809 何焚し石の鼎ぞおとこへし (小艸)

*寛政五年成立、これ以前の作。

810 ありてなき石のまくらや女郎花 (小艸)

*寛政五年成立、これ以前の作。

811 飛鳥井の末の子見たし桜狩 (たわらの口)

*寛政五年刊、これ以前の成立。これより、815まで同様。

812 戻りなき川二筋のゆふざくら (たわらの口)

*寛政五年刊、これ以前の成立。

813 めしにたく雨水うまし春の山 (たわらの口)

*寛政五年刊、これ以前の成立。
814 酔ざめの顔におもたき蒲団哉 (たわらの口)

*寛政五年刊、これ以前の成立。
815 夫もたぬ君三平の火桶かな (たわらの口)

*寛政五年刊、これ以前の成立。
816 朧月朧に花のつく夜かな (百華集)

*寛政五年序、これ以前の成立。

寛政六年 甲寅（一七九四） 五十六歳

817 目に遠く花ふらせけり御戸開 洛陽重厚 (水薦菫)

*寛政六年一月跋、この頃の成立。

818 春雨やこゝろに煙る浅間山

（水薦菫・雪中庵歳旦・葎雪庵歳旦・芳春帖）

*寛政六年一月跋、この頃の成立。肩書「栗津」雪中庵歳旦・葎雪庵歳旦・芳春帖。

善光寺のかたほとりに、大磯の傀儡虎御前が跡を隠せし庵有

819 悲しさの石に答て夕きゞす (水薦菫)

*寛政六年一月跋、この頃の成立。

母を供して東へ下る

820 かけはしと母に申さで渡りけり (水薦菫)

*寛政六年一月跋、この頃の成立。

821 おもふほど活てちりけりやま桜 (春眠集)

*寛政六年二月奥、この頃の成立。寛政元年一月 序なので、この頃の可能性もある。

822 花すみれ夜のあらしを恨む哉 [霞そめて]

*寛政六年三月序、この頃の成立。

823 花にうき便りも淋し文咄し [蓮の浮葉]

*寛政六年五月序、同年春の成立。

824 夜ざくらや花の木の間の咳払ひ [花供養]

*寛政六年三月十二日興行、同年春の成立。

825 春風や西大名の幾かしら [花盛集]

*寛政六年冬奥、同年春の成立。

826 で、むしのそら寝してけり花手桶 (歩月の章)

*寛政六年刊、同年春の成立。

827 梅が香を三つにたゝむや駕ぶとん [義仲寺重厚]

(こまつか集・二夜庵 三朝咄・都雀 聖節・都鳥 [みどりの松]・浅草はうご・梅蔵人)

*寛政六年刊、同年春の成立。肩書「江アハヅ」(三朝吟)。

828 木がらしや横をり伏る甲斐の駒 (こまつか集)

*寛政六年刊、同年春の成立。

829 蚊遣りたく中に櫓の匂ひ哉 [雁風呂]

*寛政六年六月序、この頃の成立。

830 蚤の息十二因縁をめぐりけり (なぐさみ草)

*寛政六年十一月序、同年夏の成立。

831 朝起や鹿にかけたる豆腐の湯 [江州栗津重厚]

*寛政七年三月序、同六年秋の成立。一枚摺には肩書が無い。

しらぬ火のつくしの果には、ばせを翁を神に崇め
まいらせ桃青霊神と仰ぎ奉るも、ありがたき隠徳
なるべし

832 神帳(マモ)に入か栗津の枯尾花 [しぐれ会]

*寛政六年十月十二日、時雨会興行。寛政五年、重厚は筑紫高良山内の芭蕉霊神社の銘を記す。

寛政七年 乙卯 (一七九五) 五十七歳

833 初夢や天の香久山六玉河 [義仲寺重厚] (散はな)

*寛政七年三月序、同年歳旦吟。但し、青蘿七回忌追善の寛政九年の可能性もある。

834 歌枕七草などを出たちかな (来之春興集)

*寛政七年刊、同年一月の成立。

835 淡雪や扇にかざす根なし花 [義仲寺重厚] (梅の会)

*寛政七年一月二十五日興行を収録、これ以前の成立。但し、同六年一月二十五日興行も収録されているので、同年以前の可能性もある。

836 地水火風空を速に戻して往生せる何がしの尼に
穴かしこ春秋しらぬはなのぬし 義仲寺重厚

837 *寛政七年三月二十八日知海一周忌追善、この頃の成立。
花に寝る腸くされ雨の中 江州粟津重厚
(ちりゆく花)

838 *寛政七年三月十二日興行、同年春の成立。発句題苑
集・新題林発句集・俳諧新五百題には、肩書が無い。
花にあらし君子のいかるたぐひ哉 [雪の光・春囊]

*寛政七年刊、同年春の成立。上五「花に風」、肩書
「前落柿舎」〔春囊〕。

839 人の為にとく花咲ぬひがし山 京都重厚
(俳諧松露庵随筆)

*寛政七年刊、同年春の成立。
840 たちのぼる鬼火は消てほとゝぎす 洛重厚(竹原聖)

*寛政八年一月跋、同七年夏の成立。
841 霜の夜や棚から落る芋がしら 洛重厚(竹原聖)

*寛政八年一月跋、同七年秋の成立。
842 風の萩蝶の糸ひくひまもなし 義仲寺重厚

(あきの別れ)
*寛政七年八月上浣序、この頃の成立。

843 こきまぜて鳶も烏も花野哉(たびしうゐ・発句題葉集)
*寛政七年秋序、この頃の成立。

むかし、ばせを翁、義仲寺に懸錫し給ふ比、尚白
の元より蕎麦を送るに、からみは俳諧の情なりけ
れば、まいらするに及ばず、と申せしを殊に賞
したまひしとなん。今も、そばの客ある時は、必
其事をいひ出し侍る

844 しぐる、夜誰にうたさん伊吹蕎麦 (しぐれ会)
*寛政七年十月十二日、時雨会興行。

845 わがたつそまの大師の勅会に
ゆるさる、花の帽子や杉の雪 (かなしぶみ)

*寛政七年十月二十四日蝶夢没、この折の成立。
846 梅がえにえのきもやらず紹巴町 京重厚

(俳諧名所小鏡)
*寛政七年十月刊、これ以前の成立。これ以下、859まで
同様。

847 冬がれや人なつかしう鳩のよぶ (俳諧名所小鏡)
*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

848 影ばかりいつか世に出ん雪仏 (俳諧名所小鏡)
*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

849 野の宮に誰ぬかづくぞ春の月 (俳諧名所小鏡)
*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

850 今朝の雪足跡見えねたつた越 (俳諧名所小鏡)
*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

851 来る秋の梢を見せて風の杜 (俳諧名所小鏡)

*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

852 十月の陽炎たつや大堰川 (俳諧名所小鏡)

*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

853 石ころく夏乾川の忘水 (俳諧名所小鏡)

*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

854 さればこそ宮もわら屋も同じ霜 (俳諧名所小鏡)

*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

855 鷹匠の箸にもをらで花すゝき (俳諧名所小鏡)

*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

856 しのぶ枯て石うづみけり忘草 (俳諧名所小鏡)

*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

857 門畑に苜かく浦のおとこかな (俳諧名所小鏡)

*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

858 あつき日や五の橋の裏をみる (俳諧名所小鏡)

*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

859 都府楼や霜にしられし古瓦 (俳諧名所小鏡)

*寛政七年十月刊、これ以前の成立。

幻住庵探題

860 人をして砂金にかへぬ冬牡丹 (鉢かづき・発句題葉集)

*寛政七年十一月刊、この頃の成立。

洛の呂蛤、粟津の時雨会にまかりて、来之も今は
故人の数に入しと語るに、胸つぶれて、取あへず

一句を仕て、翁の廟前に手向はべる

861 風や納て吹とる人のはて (かゝしの影)

*寛政七年冬跋、この頃の成立。

862 雪仏むかし才ある男かな (金剛心)

*寛政七年冬跋、この頃の成立。

863 影法師や妹がきぬたのふくれ頬 (金剛心)

*寛政七年冬跋、この頃の成立。

寛政八年 丙辰 (一七九六) 五十八歳

864 餅腹や西湖の柳夢に見し (三朝吟)

*寛政八年歳旦吟。

865 羽子板に乘て置けり落椿 (梅の会)

*寛政八年歳旦吟。

866 振袖の鷹とらへ出たり春の風 (狭名辺墳集)

*寛政八年二月序、同年春の成立。但し、寛政六年九月

867 薺摘むすまよあかしよ小正月 (春の画合)

*寛政八年春興、この頃の成立。

868 かけのに霞を射ぬく乙矢哉 (皇都重厚)

(俳諧松露庵随筆・花無津美・都雀春興集)

*寛政八年春興帖、同年春の成立。肩書「粟津」(花無
津美・春興集)。

869 春の水七文字負る亀も出ん 湖南重厚（寿詞石腸兒）

*寛政八年二月跋、同年春の成立。

870 朝ざくらうき世がましき庵哉 粟津重厚（花供養）

*寛政八年三月十二日興行、同年春の成立。

871 形代に我瘦譲る早瀬かな 義仲寺重厚（夢のまくら）

*寛政八年四月跋、この頃の成立。

872 竹うへて帰りし人か蓑と笠（いくしみつ・発句題葉集）

*寛政八年五月重厚跋、この時の成立。上五・中七「竹植に來りし人か」（発句題葉集）。

873 みじか夜や一時づゝの咳ばらひ 洛重厚（さゞれ石）

*寛政九年一月跋、同八年夏の成立。

874 松とりて千代の古道と成にけり 義仲寺重厚（其蓑塚）

*寛政八年七月十二日序、この頃の成立。

875 文月やかけ行ものは老が友 湖南重厚（なゝもみぢ）

*寛政八年秋跋、同年七月の成立。

876 秋たつや日蝕晴て風替る 大津義仲寺重厚（つゆのそで）

*寛政九年五月六日跋、同八年立秋の成立。

877 大根のからみもうつせ露しぐれ 粟津重厚

（松風会・発句題葉集）

*寛政八年九月序、この頃の成立。

878 橘の実を喰ふ寺の雀かな（なゝし土里・鶴芝集・青蔭集）

*寛政八年秋の成立。中七、下五「実をくふ雪の鼠かな」（青蔭集）。

879 関取と成て帰るやつくし人 （寛政八丙辰秋帖）

*寛政八年秋の成立。

よね玉へ銭もほしといふことを句の査冠に置いて、むかし兼好法師より頼阿のもとへ贈給ふる歌に「よもすゝしねざめのかりほたまくらもまでも秋にへだてなき風」と、よみて贈給ふければ、頼阿法師の返しに、米はなし銭少しといふ事をくつ冠に置いて「よるもうしねたく我せこはては来ずなをざりにだにしばしとひませ」、此二歌は人情の誠なるべし

880 ひぐらしや雨水つかふ笠置寺 洛重厚（さゞれ石）

*寛政九年一月跋、同八年秋の成立。

881 染紙にうつせ槿の花心 義仲寺重厚（つとのくさぐさ）

*寛政九年春跋、同八年秋の成立。

882 めしもりのきぬた打けり眠りけり

（やまかげ集・草の露・吐火帖）

*寛政九年夏序、同八年秋の成立。

岡堂に翁を宿しまいらせける夜、雨いたくもりければ、彼旅がさをかぶりて、座禪するにはよき道場なりと申されしを、主の文章こは有がたき仰なりと、其後は必人にも語つたへられしとなん。

883 座ぶとんに膝つゝみけり霜のかね

*寛政八年十月十二日、時雨会興行。

（時雨会）

884 霜の骨幻あみだ仏く

(意新能日可麗)

*寛政八年十月刊、この頃の成立。

むかし、龍が岳の文草、はせを翁の為に法花経一字一石を書写して経塚をきづき、其地のかたはらに此禅師がしるしを立、はじめ同門正秀・支考、あるは松毳・巴静・雲裡・文素・可風のともがら仏縁をむすびて怡、はいかいの高野山ともいひつべし。また、此ころ洛の蝶夢法師の石をもならべ、下に弥陀経一字一石を僧蚊山書写して初月忌の供養をものし侍る中、これ全く十大弟子のいさをしなるべし

885 さびしさや塚の櫓の春にあふ

(意新能日可麗)

*寛政八年十月刊、この頃の成立。

886 神鏡にうつるがごとし雪の人

江州粟津重厚(寛八集)

*寛政八年冬の成立。

887 声かれて雪喰ふ猫のおもひ哉

アハツ重厚(たね茄子)

*寛政九年秋序、同八年冬の成立。

寛政九年 丁巳(一七九七) 五十九歳

西上人の六百年忌を草庵にいとなみて

888 娑婆に居てし事かたし法の花

(ぬさぶくろ)

*寛政九年二月十六日西行忌、この時の成立。

889 河音や花に着せたき夜の衣 粟津義仲寺重厚(花供養)

*寛政九年三月十二日興行、この頃の成立。

890 花鳥やふとし嫌ひの丸がしら (猊法師ものがたり)

*寛政九年九月跋、同年春の成立。

891 白蓮の花より登る旭かな 江粟津重厚

(はいかいよひの春・熱田三歌仙)

*寛政九年春の成立。

892 洪引の団つくるや死ぎらひ (くさのかげ)

*寛政九年十月序、同年夏の成立。

893 露三とせ苔むす石となりにけり

(萩のむしろ・発句題葉集)

*寛政九年七月二十三日興行。前書「蝶夢三回忌」(発句題葉集)。

894 秋風や物わすれたる畳だこ アハツ重厚(ゆめのあと)

*寛政九年七月序、この頃の成立。

895 芋の葉の露や世界は丸きもの 粟津重厚

(いぬ槇・志珂不元)

*寛政九年八月奥、これ以前の成立。肩書「近江」(志珂不元)。

896 恵心寺の男何する薄原 (冠羅春蛾両吟集・短冊)

*寛政九年九月刊、この頃の成立。

897 風や椿のつえも世の名残 (時雨会)

むかし翁の手馴給ひしものは

898 風や椿のつえも世の名残 (時雨会)

*寛政九年十月十二日、時雨会興行。

898 十月や淋しきことのかさね泣 近江重厚 (冬の月)

*寛政九年十月序、この時の成立。

899 十月や豆腐に飽ず夜に飽ず 近江重厚 (遠山の雪)

*寛政九年冬跋、同年十月の成立。

900 仏名やつとめていたる処まで 大津重厚

(堅田集・あきの錦)

*寛政十年春序、同九年冬の成立。『あきの錦』には肩

書が無い。

寛政十年 戊午 (一七九八) 六十歳

901 小正月鼠の宮に参らばや

(あけぼの草紙)

*寛政十年歳旦吟。

902 如月や工過たる旅ごゝろ

(秋水春興集・花たちばな・橋日記・なまづの尾)

*寛政九年春序、同年春の成立。下五「旅衣」(花たちばな)。

903 夢かとよ十八粥をまくら飯 栗津重厚

(しら梅)

*寛政十年冬序、同年春の成立。

904 鰐の口音霞けり山かつら 洛重厚

(俳諧発句帳・完来歳旦歳暮)

*寛政十年七月十日刊、同年春の成立。上五「鰐口の」

(歳旦歳暮)。

905 桃山や棒組さがす駕のもの 大津重厚 (こぞのしをり)

*寛政十年九月刊、同年春の成立。

父に離るゝ時まさに足ずりして泣は孝の道なれど

も、必や去ものは日く疎しといふ世のことわ

ざを終に忘るべからずと、交風のおのこに示す

906 さくら人逆ごとは見ざりけり 前義仲寺重厚 (春のあらし)

*寛政十一年二月序、同十一年春の成立。

907 名月をしらぬ顔なり犬奉行 アフミ重厚

(黄華集・なにはの月・宗因文集)

*寛政十年秋序、同年八月の成立。

908 月てらす今宵となりぬ芥川 近江重厚 (俳諧花月集)

*寛政十一年春序、同十年秋の成立。

909 瓜盗む人や月夜の出来ごゝろ

(発句題苑集・手児奈集・新題林発句集)

*寛政十一年一月刊、同十年秋の成立。

910 島原の夜駕あきてや烏芋掘 アフミ重厚

(花柑子・発句題葉集)

*寛政十一年春刊、同十年春の成立。

老て妻にをくるゝは分て便なきものかや、ことし

の翁忌は得参らずなど申こせる乍及にかはりて

911 念仏はわすれぬ人よ冬ごもり 桃青院 (時雨会)

*寛政十年十月十二日、時雨会興行。

春は義仲寺を祐昌にわたし、冬は翁忌の文台を斑鳩にまかす。それ寺の勤ある時は法名を呼しめ、風雅の席に交はるときは俳名をよぶ。

天台念仏風羅念仏神無月

而后、已はたゞ老て死をまつのみ。伝へ聞二祖禪師は法のため片腕を落す。予は俳諧のために二つの眼を失へども更に其功なし

912 負てゆく罪かろかれや古紙衣 (時雨会)

*寛政十年十月十二日、時雨会興行。

913 冬籠啓うごくことなかれ 義仲寺重厚

(松内集・呉春筆重厚讚芭蕉画像)

*寛政十一年一月序、同十年冬の成立。下五「こともなし」(呉春筆重厚讚芭蕉画像)。

914 雪の日や窓に物書く咳ばらひ 粟津重厚 (涼み塚)

*寛政十一年六月序、同年冬の成立。

915 夜時雨や枕をよけて裾に降 義仲寺重厚 (松風会)

*寛政十一年秋序、同十年冬の成立。

寛政十一年 乙未(一七九九) 六十一歳

古人の言葉をかりて懐旧の心をよめる

916 卯の花の絶間拝む古仏 (菊のうはさ)

*寛政十一年夏跋、この頃の成立。

917 芭の台あかざの杖にくらべこし (菊のうはさ)

*寛政十一年九月十日去来忌、この時の成立。

918 人既やまひ袋や秋の風 (菊のうはさ)

*寛政十一年九月十日去来忌、この時の成立。

去来叟が鼠の賦の真蹟を持るを、幸ひけふの法筵にものして

919 面扶持をへつるか栗の鼠ども 古落柿舎

(菊のうはさ)

*寛政十一年九月十日去来忌、この時の成立。

920 青梅や機をる膝にありやなし (都鳥「みどりの松」)

*寛政十一年九月序、これ以前の成立。

921 小夜きぬた杓子は姫にわたしけり 桃青院重厚

(いはゞな集・松のくち葉)

*寛政十二年三月刊、同十一年秋の成立。肩書「義仲寺」(松のくち葉)。

此会式をつとむる事、名利のためと存心仮にも出

来らば、必今ちかひし我舌くされと、九拝して曰

922 布薩してしぐれにそゝぐ心かな (時雨会)

*寛政十一年十月十二日、時雨会興行。

923 仏物をむさぼる雪の起居哉 (徳万歳)

*寛政十二年一月刊、同十一年冬の成立。

寛政十二年 庚申（一八〇〇） 六十二歳

春吟

924 吉野川梅の涉しのあらまほし 粟津重厚（浪速帖）

*寛政十二年春帖、この頃の成立。

925 ぬさ袋人に持たさじさくらがり（急通記）

*寛政十二年三月五日付一茶宛重厚書簡、同年春の成立。

926 山ざくら和歌三神の鳥居哉（急通記・ゆめのあきふゆ）

*寛政十二年三月五日付一茶宛重厚書簡、同年春の成立。

肩書「近江」（ゆめのあきふゆ）。

くさぐさうちまじへて

927 雪どけや灰に突こむ火吹竹 粟津重厚（塵窪）

*寛政十二年三月跋、この頃の成立。

928 雪とけて低しとおもふ山もなし アフミ重厚

（花見次郎・冬扇・はるのすさみ・面目棒）

*寛政十二年春序、この頃の成立。『はるのすさみ』には、肩書が無い。

929 寒山が箒にかけなふきの臺 近江重厚（新かはづ合）

*寛政十二年六月序、同年春の成立。

930 笋やとらずにをけば竹になる（藪かうじ）

*寛政十二年四月二十二日春花没、同三十五日追善の折の成立。これ以下、932まで同様。

米松が昔を思ひ出て、老が目うちくもるばかり筆

をさし置

931 替らるゝものなら替んとまり竹 粟津重厚（藪かうじ）

*寛政十二年四月二十二日春花没、同三十五日追善の折の成立。

三十五日

932 なでしこの母にあまへし影見せよ 桃青院重厚

（藪かうじ）

*寛政十二年四月二十二日春花没、同三十五日追善の折の成立。

933 臆病に夜川越へたる鶴匠かな

（発句題葉集・俳諧以呂波韻）

*寛政十二年夏序、これ以前の成立。これ以下、939まで同様。ただし、『俳諧以呂波韻』の成立が寛政十年以前

の寛政年間の可能性があるので、これ以前のものの

934 目ざむれば蟬しぐれけり山かつら

（発句題葉集・俳諧以呂波韻）

*寛政十二年夏序、これ以前の成立。

935 冬ごもり人そしるべき口もなし

（発句題葉集・俳諧以呂波韻）

*寛政十二年夏序、これ以前の成立。

936 炉びらきや是も古風の布袋釘

(発句題葉集・俳諧以呂波韻)

*寛政十二年夏序、これ以前の成立。

937 鳥の巢に引事なかれ札納

(発句題葉集・俳諧以呂波韻)

*寛政十二年夏序、これ以前の成立。

蟻通明神

938 しら梅の月夜祈らん蟻通し

(発句題葉集・俳諧以呂波韻)

*寛政十二年夏序、これ以前の成立。

939 分別の愚にかえりけり葉くひ

(発句題葉集)

*寛政十二年夏序、これ以前の成立。

940 盆の月懷がみをおとしけり 江州粟津重厚 (花のおく)

*享和元年四月序、寛政十二年七月十五日の成立。

941 白露やあはれと見るも世の宝 義仲寺重厚

(秋の露・なみのおと)

*寛政十二年九月跋、この頃の成立。

942 二百十日月もくもらずかゝみ山 義仲寺重厚 (松風会)

*寛政十二年秋序、この頃の成立。

943 名月や鉄牛しばし目をとづる 義仲寺重厚 (ふぐるま)

*寛政十二年冬序、同年秋の成立。

944 投取らすはだか小判やすまひ取 (花はさくら)

*享和元年春序、寛政十二年秋の成立。

945 秋の暮既視てもどりけり (蒿)

*享和元年六月刊、寛政十二年秋の成立。

宗祇芭蕉の古ごとを習ふ

946 世にふるも六十三のしぐれかな (時雨会)

*寛政十二年十月十二日、時雨会興行。重厚は六十二歳。

947 死事を忘れて淋し神無月 アハツ重厚

(句六景集・ちどりき、俳諧新五百題)

*享和元年三月序、寛政十二年十月の成立。上五「死る事」(俳諧新五百題)。「ちどりき」には、肩書が無い。

948 冬木立さはらぬ神にたゝりなし (筆のこほり)

*寛政十二年十一月跋、この頃の成立。

949 幾時雨しぐれ日暮て雨となる 義仲寺重厚 (菊の香)

*寛政十二年序、同年冬の成立。

950 から白の米くらふ雪のからすかな

(はつかづき・三日月集・真蹟短冊・俳諧新々五百題)

*享和元年七月序、寛政十二年冬の成立。中七「米くふ

雪の」(真蹟短冊・俳諧新々五百題)。

951 雪の柳日すがら鳥の影見せず (蝶の日かげ)

*享和元年八月跋、寛政十二年冬の成立。

952 雪の駒手綱はなせば嵯峨へ行 (鶴芝集・短冊)

*享和元年六月刊、寛政十二年冬の成立。上五「雪の

馬」(短冊)。

寛政年間

953 薨破れ鴻の巢聳暑さ哉
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。これ以下、967まで同様。

954 石走る水明けやすき月夜哉
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

955 一軒の寺ははなれて千団子
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

956 二の舞の面に汗する男かな
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

957 三貫に付ても売ずはつ鯉
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

958 四の宮の遊女きけとやほとゝぎす
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

959 五人扶持いたゞきそめぬ嘉祥の日
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

960 六原の辻に立けり洪うちわ
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

961 七度半の使は来たりくらべ馬
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

962 八の巻みなそれゝに雲はらひ
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

963 九人目に男子生れぬさゝ粽
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

964 十逆のつみも流れよ御稜川
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

965 百なりの蔓のみしげる垣根哉
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

966 千部誦山遠からずわか楓
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

967 万年の亀のよはひを風薫る
(俳諧以呂波韻)

*寛政十年春以前の成立。

968 十の指かゝねて見ばや月の友
(十波羅密)

*寛政年間の成立。

擬去来 一条殿下の若君に轉多^(マヤ)独楽といふもの奉
る時、透見する女房の簾の下より菓もりたる椽高
をかた手に出しながらひそゝ笑ふこゑのすれば
とるからに古実も見せむ蜂谷柿

(十波羅密・俳人重厚私大卷)

*寛政年間の成立。前書「去来 一条殿下の若君に博多
独楽まいらすとき、透見する女房の簾の下よりくだも
の盛たる椽高を片手にもちながらにひそゝ笑ふ声の
すれば」(俳人重厚私大卷)。

970

此人や画にかきとらば木蓮花

(十波羅密・俳人重厚私大卷)

*寛政年間の成立。前書「嵐雪 浅草新堀のほとりにかね売吉次と字せる楊枝屋あり。夫が祖父吉女世にありしとき、新よし原に出る鉄漿一杯一錢にひさぐ。よてくるはの人皆かね売どのといふ。九十年のむかし、いま其名のあるじさるべき因縁なり。」(俳人重厚私大卷)。

971

氷る夜や数珠くる袖のあをち風

(十波羅密・俳人重厚私大卷)

*寛政年間の成立。前書「丈草 くれ行としは大雪ふりてあたり大人もとひ来らず、庵中てに閑を得たりしかばあれは仏を火に焚て寒夜をふせぐ大禪知識の徳をしらねば、いたづらに唯眠藏にかきこもりて」下五「あふち

風」(俳人重厚私大卷)。

972 正成が魂いる、か、しかな

(しばふくかぜ)

*寛政年間の成立。

973 元政がへちまと申す糸瓜かな

(しばふくかぜ)

*寛政年間の成立。

974 利休いまだわか、りし時踊哉

(しばふくかぜ)

*寛政年間の成立。

975 鶴千羽春の雪とぞおもひけり

(夏木立)

*寛政年間の成立。

976 春の情千々にくだけて寝ぬ夜哉

(来之春興集)

*寛政年間の成立。

977 花鳥や阿修羅か酒のはかりなき

近江重厚(続埋木)

*寛政年間の成立。

享和元年(寛政十三年二月五日改元) 辛酉(一八〇一) 六十三歳

978 梅咲や我能なしの歌ぶくろ

(俳人重厚私大卷)

*享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。以下、994まで同様。

979 就中名月よかれ乞食せん

(俳人重厚私大卷)

*享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

正月と七月十六日には地獄の釜の蓋があく。平角が家の釜の蓋のあくことは老臣のこゝろへにして

主人も其ゆへをしらず

980 雨ばれや吉備津の釜の空ひゞき (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

東都の宗三が贈るばせを庵古池の芦本宮の秋夫の
こせる浅香のかつ美を梅園にうつして

981 中くくに竹のね青し露しぐれ (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

982 腸にうめ雫せり二日酔 (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

吹からに名こそこの関とおもへどもみちもせにちる
山ざくらかな、かく聞し関の跡はいういふ九面に
はあらず、山ふところに入て十八丁

983 桜皆石と化したる四月哉

(俳人重厚私大巻・井口家旧藏書画短冊等貼交屏風)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。前書

「名古曾の関」(井口家旧藏書画短冊等貼交屏風)。

真雪を寒山といひ、暁宇を拾得とよぶ

984 竹うへに來たか此雨其ふたり (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

方西園といふもろこし人の手づから贈れる五明を
長崎の海より遠都にもちて帰るとき

985 我袖にもろこし人の風かほる (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

986 住吉の松にもうとし桜狩 (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

馬頭觀音の上つのもじを句の上にきたる頓阿法
師の連歌のほ句帳あり

987 馬からん小みち百里を草の露 (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。これ以下、
990までの初句の一字を繋げると「馬頭觀音」となる。

988 頭あげよ鶉かくるゝ草の丈 (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

989 觀念のねんもおもはず秋の暮 (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

990 音高し昼の添水の山ひゞき (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

人日在春

991 かの鶏のわたらぬ先やはつ烏 (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

庚申七夕

992 みずいらず聞ざる恋やおしの歌 (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、寛政十二年七夕の成立。

朔旦冬至

993 朔日の梅一りんや日のはじめ (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

994 行としや勤て至るもの忘 (俳人重厚私大巻)

* 享和元年一月以前の書留、これ以前の成立。

995 齒のぬけて今宵淋しき月見哉 (新題林発句集)

* 享和元年三月序、これ以前の成立。

996 水草や百日ぶりの草履道 近江重厚 (田のほとり)

* 享和元年四月序、同年春の成立。

997 竹の子の土こぼれけり青畳 義仲寺重厚 (画兄弟)

* 享和元年夏跋、同年春の成立。

998 春の山仁者は命長き哉 近江重厚 (風やらい・短冊)

* 享和元年序、同年春の成立。

999 西向て涼む癖ありまろがしら (翌の花)

* 享和元年夏跋、この頃の成立。

1000 あふひ草硯も提て通るなり (玉笈集)

* 享和二年二月奥、同元年夏の成立。

1001 豆腐にはことを欠とも月と梅 (粟まき集)

* 享和元年九月十二日序、これ以前の成立。

1002 夏籠の口苦きこと日に三度 (粟まき集)

* 享和元年九月十二日序、同年夏の成立。

1003 女郎花こゝにも咲り雲雀山 (夢のみな野)

* 享和元年冬序、同年秋の成立。

1004 秋の雨酢吸の聖画に寒し アハツ重厚 (あめのはし)

* 享和元年成立、同年秋の成立。

二十年来例を守がごとし一重を調進する人あり

1005 小夜しぐれ菊二が呉し納豆きる (しぐれ会)

* 享和元年十月十二日、時雨会興行。

今は昔、夜半亭の夜話に三たり何々打かたらふ中にも、青蘿は几董に年ひとつまされり、我はキ董に年ひとつとりたりと申て過しが、其ふたりはとく古人となり、我はいたづらに生延て、剩へキ董が十三回忌にあへる事、長生は恥多きためし也。

夜しぐれや嘶し相手も皆若し (夢のみな野)

* 享和元年冬序、十月二十三日の成立。

生涯禁足のちかひをたてたれば、此日にあはず。

只、あみだ寺の方に向ひて念珠するのみ

1007 月まちや廿三夜の古ぼとけ (比叡の月)

* 享和元年十二月跋、同年十二月二十三日の成立。

享和二年 壬戌 (一八〇二) 六十四歳

1008 小原女のよい子産けりはるの月 栗津重厚

(ちさとの春)

* 享和二年三月刊、この頃の成立。

1009 我老ぬ梅見にありく人誘ふ (杖の節)

* 享和二年三月序、この頃の成立。

1010 雪解て女の運ぶ汐木かな アハツ重厚 (まつばかき)

* 享和二年夏序、同年春の成立。

1011 生の松それさへ死るごけいかな 江粟津重厚

(俳諧かれ蘆)

*享和二年四月十四日、嘯山追善の折の成立。

鳥頂が手づから製したるもちろ、おなじく走井の水を茶湯にむすびて、けふの会式のもうけとなす。

1012 時雨会や小町の像の咄しまで (時雨会)

*享和二年十月十二日、時雨会興行。

1013 朝霜や馬の琵琶も骨撫てみん (雪のふくろ)

*享和二年十二月十三日序、同年冬の成立。

1014 雪わけて生姜をりけり太子講 (雪つぶて)

*享和二年冬跋、この頃の成立。

芭蕉翁連歌の師たる北村季吟法師の書残し申され
しもち花の短冊は、走井の家に持伝へて目出たき
句がら成べし

1015 餅花に散るといふ名はなかりけり

(井口家旧藏書画短冊等貼交屏風)

*享和二年冬、雪下庵筆重厚句懷紙に書き留められたもので、この頃の成立。なお、季吟の句は、「もち花をしだり柳や糸桜」。

享和三年 癸亥(一八〇三) 六十五歳

1016 元日や人の日までは雨なかれ アハツ重厚 (無底籠)

*享和二年冬序、同三年歳旦吟。

1017 二ツ有正月うれし神参

(曙草紙・都会帖・在原文庫・俳諧新々五百題)

*享和三年閏一月の歳旦吟。肩書「粟津」(都会帖)。

1018 鶯のたてこまれけり神輿藏 (みどりぶくろ)

*享和三年歳旦帖、同年春の成立。

1019 梅生てかけ物直す二月哉 義仲寺重厚 (初文台)

*文化元年歳旦帖、享和三年二月の成立。

ことしは扇の発句して翁に奉らん、と春ふみの便
に聞えし不二庵も近き頃義仲寺の過去帳の一人と
なれりけり

1020 六骨の要はぢけて風寒し アハツ重厚

(不二庵追悼句集・桃下華葉)

*享和三年四月三日頃の成立。不二庵は享和三年三月二十八日没、初七日の追善。前書無し、肩書「義仲寺」(桃下華集)。

老人が法名を義仲寺の過去帳にとゞめよ、といひ
こせる其子依兮の文の辺しに
菊一もと仏のための根分かな 粟津重厚

(ゆめのあきふゆ)

*享和三年十月跋、同年秋の成立。

1022 萩三株当山の垣をかくしけり
(松風会た、び草・ほとゝぎす集)

* 享和三年九月二十六日の松風会興行を収録、この頃の成立。中七・下五「くさ木の垣にかくれけり」、肩書「義仲寺」(ほとゝぎす集)。

わが俳諧年におくれ、一步も人のうへに立ことかたし。まことに老ては子にしたがふためしなきにしもあらず

1023 時雨会やふるきこと二十年
(時雨会)

* 享和三年十月十二日、時雨会興行。

1024 鳩べやの鳩ももどらぬ十夜かなよし仲寺重厚(月雪集)

* 享和三年冬序、この頃の成立。

1025 市の雪豆こぼしゆく俵かな 近江重厚(はまびさし)

* 文化元年三月奥、享和三年冬の成立。

1026 雪となる雨や朱雀の小灯籠
(はたけぜり)

* 文化元年三月序、享和三年冬の成立。

1027 夕ぐれやみるものひとつ淡路島 近江重厚(雪のやま)

* 享和三年成立、同年の成立。

文化元年(享和四年二月十二日改元) 甲子(一八〇四) 六十六歳

1028 鶯の足そこなふな竹の株 義仲寺重厚(五彩堂試筆集)

* 文化元年一月重厚書簡、この頃の成立。

年次未詳(文化元年一月十八日以前の成立)

1029 うち水をよけて通るや御忌の鐘
(俳諧新五百題)

* 文政二年序。

1030 春くれてうくてふ鯛はなかりけり
(俳諧新五百題)

* 文政二年序。

1031 水鳥の羽風に破るあらしかな
(古今綾囊)

* 文化六年刊。

1032 今朝の秋水屋の口の立居哉
(露一つ)

* 文政九年以前。

1033 火桶だいて片寝がちなり小夜嵐
(たそがれ随筆)

* 文化四年奥。

いさ、か山におもふ事あれば、生涯義仲寺の門をいでまじとちかひをたつる

1034 我あるは有にもあらず根なし花
アフミ重厚

(俳諧四季文集)

* 文化八年八月序。生涯禁足の誓は、享和元年十二月。

1035 涉川や花のかげふむ歩行わたり
(俳諧新々五百題)

* 文政十三年八月序。

加茂の岩本、橋本のやしを尋ね侍る折から、老たる宮司の過しを呼とめて事のよしをとふも兼好がためしに似たり

1036 川にそふて葵桂の影すゝし
(月溪葵画一枚摺)

- 1037 干松露や夏の山家の野菜物 (一枚摺)
- 1038 春かぜや杭にたゞよふ水の淡 (正月五日付花雪宛書簡)
- 1039 目代に若餅搗や雨の中 (正月五日付花雪宛書簡)
- 1040 葉桜やあだにせしめる人も来ず
- 1041 あやめ茸てあふぎうりけり御影堂 (五月五日付朔順宛書簡 慶照寺蔵)
- 1042 八朔の梅一輪や品さだめ (六月五日付古声宛書簡 慶照寺蔵)
- 1043 大根に辛もじつと露時雨 (八月十九日付古声宛書簡 慶照寺蔵)
- 1044 節季候の犬またげたたる御門哉 (八月十九日付古声宛書簡 慶照寺蔵)
- 1045 氷室 (十二月二十八日付春坡宛書簡)
- 1046 朔日の水掛んけしあられ (綿屋文庫蔵俳跡貼交屏風)
- 1047 七夕
- 1048 地にあらば舟橋わたれふたつぼし (綿屋文庫蔵俳跡貼交屏風)
- 1049 盆会
- 1050 玉相の後にちかし鵜翦山 (綿屋文庫蔵俳跡貼交屏風)
- 1051 あやめふく軒は旭の雫哉 (端午自画讃 柿衛文庫蔵)
- 1052 あるときは雛にかしたき扇哉 (扇面 落柿舎蔵)
- 1053 はしり井に足とめ玉へ夏木立 (芭蕉像讃 柿衛文庫蔵)
- 1054 花もどり家遠かれと思ふかな (杖と瓢箪の自画讃 夢望庵蔵)
- 1055 鹿臥や三月堂の北の縁 (九老石灯籠画重厚讃)
- 1056 忘ぐさの種残けり五十年
- 1057 花もどり茶湯すゝめん桜花人 (花屋庵鼎左愛蔵短冊貼交屏風)
- 1058 青梅や人もさわらぬしるしの木 (真蹟 永井一彰蔵)
- 1059 呼茶 東舎よ 西隣 (真蹟 夢望庵蔵)
- 1060 雪幸人幸の釜日哉 (真蹟 夢望庵蔵)
- 1061 旅行
- 1062 山畑や日ぐれて迷ふ蕎麦の中 (真蹟 重厚)
- 1063 朝の萩人はゝからず地にはふ (真蹟 小林孔蔵)
- 1064 鶯のあとから竹の風かな (短冊 下垣内和人蔵)
- 1065 萩ひろく色なす風のゆふべ哉 (短冊 俳人真蹟全集)
- 1066 名月や更で居のこる鬼がしら (短冊 俳人真蹟全集)
- 1067 聲の酢売よひけり大三十日 (短冊 俳人真蹟全集)
- 1068 一とこのあくるもはやし風ぐるま (短冊 夢望庵蔵)
- 1069 賀
- 1070 黄鳥に朝起すらむゑほし親 (短冊 柿衛文庫蔵)
- 1071 有馬といふ処にて
- 1072 馬市や小判ならぶる露しぐれ (短冊 柿衛文庫蔵)
- 1073 初秋や日蝕はれて風かはる (短冊 柿衛文庫蔵)

- 1074 1073 1072 1071 1070 1069 1068 1067
- 短夜の風情ありけり七日月 (短冊 備後俳諧資料九)
 鶯や冬の真昼を松に啼 (短冊 備後俳諧資料九)
 秋の情尽して夜の茶湯かな (短冊 備後俳諧資料九)
 家くゝに餅つく杵や明がらす (俳諧短冊纂攷)
 よしみねもそれと小春のゆふ霞 (金福寺参詣記)
 茶味・禅味、一休・利休、別ならずといふ事のあ
 れば
 浮我をさびしがらせよ冬ごもり (金福寺参詣記)
 歌は出雲八重垣、連歌は甲斐の酒折の社、はいか
 いはつくし高良山、桃青霊神のいまして永く風流
 のみちを守護し給ふ (芭蕉翁略伝)
 今よりはぬさともならむ枯尾花 (千載集)
 常住に風薫りけり松の花

補遺

この日この句の折に合たればしるす

1 声先や一句一直ほとゝぎす 嵯峨野重厚 (みやこじま)

*天明三年五月序、素郷編。

2 走井の水はつめたし夏の雲 (椎のわか葉)

*寛政四年四月二十七日雲裡房三十三回忌追善の「席上探題」、この折の成立。

3 思ひ出るや卯の花くだす酒の腹 (椎のわか葉)

*寛政四年四月二十七日雲裡房三十三回忌追善の「手向発句」、この折の成立。

4 ほとゝぎす求食すがたは見せぬ也 (椎のわか葉)

*寛政四年四月二十七日雲裡房三十三回忌追善の「余興」、この折の成立。

5 旅に出て我世となりぬ弥生山 (くろねぎ)

*寛政九年刊、道彦編。

6 朗詠のしをりに置ん帰り花 (夜の梅)

*享和元年五月下旬序、菊二編。同年四月二十七日没の青岬追善の折の成立。

訂正

902 「如月や」の句は、寛政九年春の項に配置する。

初句索引

凡例

- 一 本稿は、発句稿所収句の初句索引である。
- 一 現代仮名遣いによる五十音順に配列する。
- 一 句の表記は発句稿と同様にし、同一句が複数ある場合は初出による。
- 一 所在は句番号による。
- 一 補遺の句は「補」とする。

あ

あふひ草	1000
青梅や	
酔吸ふ聖	170
機をる膝に	920
人もさわらぬ	1055

青空や	488
仰向に	185
赤犬の	87
赤草や	6
藜くふて	714
暁の	182
秋入や	604
あき風に	223
秋風や	
大同二年の	590
まぎれぬものは	700
物わすれたる	894
秋雨や	
圃三反	122
むかしをとこの	582
夕暮ながら	668
秋たつや	
大きな家に	497
生死はなれて	699
日蝕晴て	876
秋の雨	
酔吸の聖	1004
旅に居てさへ	615

秋の風	752
いひほどかれぬ	
川二筋に	793
さながら夢の	562
秋の暮	
厩覗て	945
画る人に	591
竈に埋む	479
算めは数添ふ	667
たのみにならぬ	54
天竺ちかく	807
中／＼をかし	176
貧乏神を	309
袋披や	611
古がね商ふ	20
秋の情	1069
秋の蝶	622
秋の水	597
秋の山	447
あきの夜や	
寝ざめてさがす	68
蚤の剣は	625
暁ちかき	758

明ゆくや	560
一夜の松に	
雪げに叫ぶ	335
朝起や	
勤て夏の	302
鹿にかけたる	831
朝顔の	198
朝がすみ	780
朝風や	
尾ごしの鴨の	376
たばこの広葉	592
松の花ちる	162
朝霧や	450
朝ざくら	870
朝酒に	163
朝寒や	
子守が赤き	285
菅菰羽折	593
日和さだまる	106
朝霜や	1013
朝戸出や	
露になれたる	581
蒜の籬に	472

朝の萩 朝まだき 足のべて 飛鳥井の 東遊び 遊ぶにも 遊ぶ日の 化し野へ あだし野や あたゝまる 頭あげよ あつき日や あなかしこ 桜が後の 春秋しらぬ 穴ごもる 蟹の子の 雨こつて 雨寒し 雨とふり 雨の月 雨の花 雨の日の

429 645 417 230 307 512 222 356 836 133 858 988 21 109 8 100 51 558 811 45 203 1058

雨ばれや 吉備津の釜の 雉子鳴原の 水菜くゝたつ 雨降りや 綾杉の 操の あやめ茸て あやめふく あら寂し ありてなき ありと聞し 有が中に ある僧の あるときは 淡雪や い 家／＼に 家に住 家守る 庵しめて 庵の春

130 34 713 595 1070 835 1049 641 300 112 810 794 1048 1041 530 473 196 77 352 980

いかのぼり 行違ふ 生延た 生鮒の 幾時雨 池寒き 池水の 石ころ／＼ 石山や 板壁の 徒に 市立の 市中や 市の雪 一軒の 稲垣に いなづまか 犬神の 命なり 今に成て 今はとて 今よりは 妹が手に

561 1073 197 318 601 470 174 407 955 1025 528 164 209 92 363 853 23 532 949 477 480 586 238

芋汁の 芋の葉の 伊予山の 薨破れ 入船や 色かへぬ 石走る 岩船や 引狼の う 上もなく うかれ女に うかれ女の 萍や うき旅を うき猫を 浮我を 黄鳥に 朝起すらむ かえことせばや

129 1064 1072 681 428 252 110 240 698 266 250 954 616 623 953 48 895 449

うち水を	打水も	打水の	打出て	歌枕	鶉とも	太秦の	うす暮や	牛祭	牛売の	嵯峨中の梅	しぐれて見ばや	牛かりて	雨後の月	冬の真昼を	鳴そこなふて	それは扇の	鶯や	はつ音も籠の	たてこまれけり	あとから竹の	足そこなふな	鶯の
1029	461	390	598	834	320	685	556	219	650	206	636		243	1068	29	779		722	1018	1059	1028	
		瓜畑の	瓜盗む	うら不二や	裏須磨や	梅柳	梅ちるや	梅咲や	梅が香を	うめが香や	梅が香に	梅がえに	梅生て	海山に	馬さくれの	馬からん	馬市や	卵の花の	卵の花と	うつむいて	卵月野や	団扇ひさぐ
		181	909	137	324	686	365	978	827	115	777	846	1019	606	370	987	1065	916	669	26	493	383
落にきと	落付て	惜まれて	御最期の	桶とりや	臆病に	賒て	拝たし	大どしや	大磯の	負てゆく	黄金積て	生の松	追風や	お		撰分て	海老を喰ふ	海老がらに	枝低き	恵心寺の	え	
277	628	719	701	379	933	563	225	571	662	912	117	1011	516			423	278	188	345	896		
飼桶を	か		御廊下に	折罪も	おもふほど	いひ残しけり	跡からふへる	思ふ事	おもひ出や	思ひ出るや	おもひかへて	女郎花	朧夜や	朧月	おぼろく	大原女の	小原女の	斧入て	尾長鳥	をどり子や	音高し	落のこる
354			525	204	821	617	239		735	補 3	362	1003	438	816	783	329	1008	505	358	334	990	13

かい～きら

影ばかり	影となり	影澄や	柿ひとつ	嗅で見る	白きはたれに	白きは己が	杜若	嵯峨に譲りの	扇に画く	書初や	柿買の	柿買に	かき上て	まこと心や	人のまことや	かゝる日を	かゝなべて	帰花	替らるゝ	飼猫の	貝玉に	蚕時と
848	541	629	86	527	726	421		9	360		245	28	347	166	775		805	550	931	414	806	145
蚊柱や	かの鶏の	蚊の声や	狩野桶に	悲しさの	門畑に	門すゝみ	かつくりと	歩人に	刀打	形代に	片しぐれ	片里や	堅香子の	風の萩	風の薄	かし寺や	笠に散	陽炎や	陽炎の	かけのに	影法師や	かけはしと
263	991	478	280	819	857	459	33	585	102	871	49	331	113	842	565	460	799	773	442	868	863	820
人の日までは	常もさびしき	元日や	寒山が	寒月や	寒菊の	川淀や	川にそふて	川床や	川口や	河音や	かれ葦や	乾鮭は	乾鮭の	傘を	傘に	から臼の	蚊遣りたく	蚊帳垂て	かも川の	雷の	髪置や	蚊ばしらを
1016	190		929	348	529	55	1036	443	315	889	432	804	718	53	78	950	829	247	361	382	415	751
きらさじと	清水の	京町や	けふ爰に	木や町の	君が代や	木守の	春の雨夜に	ひそかに匂ふ	北嵯峨や	きさらぎや	象潟の	菊一もと	菊水も	菊売の	木々の葉は	聞得たる	き	雁風呂や	灌仏や	観念の	寒念仏	
35	564	635	148	640	343	727	118	59		902	693	1021	764	664	227	674		371	328	989	741	

伐あらす	729	きりぐす	157	鳴や米なき	434	鳴や七ツの	418	伐透す	200	草いろく	340	草の露	12	草の露や	789	鯨つく	588	葛水や	657	口切に	463	口メて	491	九人目に	963	蜘蛛の巣の	708	蔵作る	633	繰舟や	236	来る秋の	851	車押	740	黒ぼこの	504	桑市や	141				
け		鶏頭や	436	下戸がちに	774	夏籠の	1002	今朝の秋	1032	今朝の雪	850	けし粒に	453	けふ幾日	659	元政が	973	こ		声かれて	887	声先や	補 1	売	82	氷る夜や	971	木がらしに	215	風の	801	外に人焼く	123	夢がしらみて		風や		納て吹とる	861				
琴に打べき	282	椿のつえも	897	宵寝まどひの	772	横をり伏る	828	夜すがらうごく	16	世にすぐれたる	126	こきまぜて	843	小きりこの	748	五間の間の	311	九度	786	心すゝし	138	輿の井や	901	小正月	959	五人扶持	602	此頃や	189	此里の	306	此寺の	970	此人や	624	此山に	114	琥珀掘	389	ごぼくと	394	駒犬の	448
呼やいかに	150	ごろくと	400	衣がへ	688	菟蓐の	88	さ		早乙女の		歌やそのまゝ	536	休み所や	452	早乙女や	281	盃に	199	盃の	408	嵯峨にしぐれ	41	嵯峨に似し	94	坂本や	359	咲にけり	95	桜寒し	313	桜人	646	世界は花と	906	逆ごとは	983	桜皆	419	酒造る	242		

ざこ〜しろ

雑魚寝せん
山茶花を
さぞな伊勢
里の子や
柿の間の
薄刈く
早苗ぶりや
生飯をとる
さびしさや
菊と我との
塚の櫓の
さびしさを
座ぶとんに
五月雨や
小夜きぬた
小夜しぐれ
さる人の
さればこそ
小笹にうづむ
宮もわら屋も
早蕨や
三貫に
三尺の

111 957 514 854 27 425 1005 921 651 883 272 885 399 771 367 535 104 255 457 738

三条と
し
塩風呂の
潮待や
鳴立て
鹿臥や
時雨るゝや
片目つぶれし
とりわけ鳩の
干ならべたる
しぐるゝ夜
しぐれ会に
時雨会の
時雨会や
小町の像の
護摩酢すゝめる
床に猿蓑
ふるきこと
獅子飛や
獅子舞に
紙燭して
辞世とも

492 292 573 279 1023 22 569 1012 57 37 844 639 15 754 1052 665 205 739 52

舌崎や
したゝるき
七度半の
死もせで
死事を
死ねくと
死ねといふ
しのゝめや
葵使の
青田を逆ふ
しのお枯て
四の宮の
柴の戸に
柴の戸や
しぶ柿に
渋谷や
渋谷の
島原の
島原や
島よりや
霜寒き
霜月や
霜の鐘

683 446 570 201 268 910 892 381 567 349 507 958 856 226 337 703 778 947 322 961 410 326

霜の骨
霜の夜や
霜ばしら
娑婆に居て
十月の
十月や
淋しきことの
豆腐に飽ず
十逆の
十分に
正月や
正月を
成就院
常住に
風薫りけり
心の儘や
菖蒲湯や
浄るりの
白梅に
しら梅の
白川や
しらぎくに
白菊の

65 767 261 938 781 756 193 596 1074 357 258 574 522 964 899 898 852 888 672 841 884

										しら〜たま			
										白露の	白菊や	316	627
										しら露は		69	
										白露や		705	
										あはれと見るも		941	
										むさしと思ふ		441	
										知れさをして		11	
										白がねに		655	
										白きより		566	
										白雲と		444	
										白妙や		465	
										神鏡に		886	
										神帳に		832	
										神農の		704	
										す			
										随身の		286	
										水仙や		216	
										漉かへす		753	
										涼しさや			
										海より秋の		605	
										汐の干渴の		96	
										鳥居のおくの		248	
										煤とりや		290	
										砂物の		391	
										須磨寺の		487	
										すまの海		788	
										すみよしの		253	
										住吉の		986	
										堇踏で		431	
										摺鉢の		120	
										せ			
										聖堂に		62	
										石菖や		232	
										石炭の		732	
										石竹の		761	
										石竹や		654	
										関取と		879	
										瀬田蜆		682	
										節季候の		1044	
										節客や		274	
										雪村が			
										蟬鳴や		605	
										現につかむ		96	
										雲井に登る		248	
										千貫の		290	
										千町田や		391	
										千部誦		487	
										そ			
										僧正の		495	
										僧ふたり		97	
										袖摺の		338	
										染紙に		881	
										そも此梅		161	
										そも玉子		321	
										た			
										大根に		1043	
										大根の		877	
										大名の		687	
										鷹匠の		855	
										高波や		614	
										高安へ		661	
										抱籠に			
										竹うへて		872	
										竹うへに		984	
										竹椽に		469	
										多景島や		284	
										竹の子に		134	
										竹の子の		997	
										筍や		930	
										鑪山や		692	
										立出て		213	
										立枯の		42	
										立かはり		502	
										菖蒲湯にごす		435	
										人涼けり		840	
										たちのぼる		878	
										橋の		531	
										田にし鳴や		183	
										旅に出て		546	
										足袋はかぬ		1047	
										旅まくら		619	
										玉相の		763	
										玉川の		5	
										魂棚や		補	

たまくに	玉祭	手向には	多羅柴の	誰泣ぞ	丹波路や	ち	萱の台	地にあらば	地に落す	粽ゆふ	猪牙舟や	散ぎわの	ちる木の葉	散る時の	つ	朔日に	朔日の	梅一りんや	精米こぼすや	水掛ん
466	792	630	152	70	481		917	1046	464	484	424	19	25	2		427	993	224	1045	
塚に伏て	月あかき	月てらす	月影や	月照るや	月にとみ	月まちや	月雪や	つくばいに	蕙の芽や	塊に	草もえ立や	下駄の齒重し	つゝじ折や	角切や	壺袖も	つぼみ枝や	妻なしの	夫もたぬ	つめたしや	爪とらむ
796	554	908	60	603	790	1007	276	71	456		426	526	503	229	377	677	568	815	143	403
露の間を	露三とせ	鶴千羽	犬神人の	弦召や	て		で、むしの	寺町や	と		豆腐には	豆腐ひく	唐丸の	十の指	遠のりや	時に感ず	木賊刈	翁にとへば	袖に落けり	年守るや
580	893	975	149	412			826	757			1001	167	330	968	211	142	99	555	7	401
殿はらは	飛入の	都府楼や	友喰の	犬も眠らず	雀に交る	とも摺の	友ほしき	鳥籠に	鳥の巢に	はてはひかるゝ	引事なかれ	鳥の巢や	とるからに	蜻蛉や	な	等閑に	長き日の	ながき日や	長き夜の	中汲の
39	404	859		690	784	228	235	486	791		937	673	969	297		552	267	476	90	795

夏山に	もたるゝものも	乞食ものがるゝ	夏瘦や	夏瘦は	夏もちや	夏野ゆく	夏のくれ	夏ごもり	なつかしき	薺摘む	投取らす	なき魂の	泣上戸	就中	流よるや	鰻とぐ牛の	啼もつのらず	竹のね青し	死なじ雑煮の	下戸も興あれ	雨ともならず	中くゝに
61	251	578		147	653	175	124	140	298	867	944	787	652	979	84	744	670	981	341	93	64	
仁和寺や	二百十日	二番子や	二の舞の	二十五の	西山や	西向て	西風や	にげなしや	に	何人ぞ	何となう	何焚し	縄提て	菜の花や	菜の花の	七癖の	夫相応の	押水たるむ	撫子や	なでしこの	夏山や	
220	942	501	956	305	724	999	344	409		515	217	809	521	1	79	577	303	542		932	540	
野は枯て	野の宮に	のどけしや	しぐれの桂	影もの寒き	後の月	能なしの	の	念仏は	ネンカラニ	根深くふ	寝鳥射ル	根問して	葱はらや	ね	濡ながら	ぬす人の	ぬさ袋	ぬくめ鳥と	ぬ			
56	849	308	98	632		490		911	468	647	151	207	127		283	24	925	351				
ばせを葉に	通夜の雨間の	君がおしへの	芭蕉忌や	ばせを雨に	橋杭の	葉桜や	箱崎の	羽子板に	元山や	白蓮や	白蓮の	麦秋や	萩三株	萩ひろく	葉がくれに	蠅よ蠅	拝殿に	は	乗かけに	蚤ふるふ	蚤の息	
155	583	730		433	631	1040	482	865	231	499	891	411	1022	1060	500	294	395		353	696	830	

はし〜はる

はしり井に	1050
走井の	補2
蓮の根や	262
はた打や	782
裸子の	396
葉茶囀て	103
初秋や	1066
初がらす	749
八朔の	1042
八朔や	
かしこき梅の	671
こゝろ尽しの	451
木丸どのゝ	301
はつ汐の	612
初しぐれ	
加茂は嬉しき	709
神に仕る	416
筆ほしげなる	72
待てや夜の	172
はつ鯛や	656
はつ鶏に	678
はつとりや	676
初日影	458

初雪や	158
あは津文庫の	
甘とみゆる	194
焼筆あてる	275
初夢や	
天の香久山	833
みる物ならば	169
鳩蔵の	511
鳩鳴や	406
鳩べやの	1024
花葵	40
花瓜の	218
花が実の	785
花ぐもり	317
花咲て	644
花芒	609
花すみれ	822
花ちりて	58
花飛々	734
花鳥に	
我は紛れず	750
すげなき人の	776
花鳥や	

ふとし嫌ひの	890
阿修羅が酒の	977
花にあらし	838
花にうき	823
花にうたひ	319
花に酒	271
花に寝る	
腸くされ	837
我も乞食か	576
花に行や	375
花の陰	
下戸にくれたき	513
見しらぬ人の	43
花の座に	260
花火焚	83
噓るや	153
花もたぬ	380
花もどり	
家遠かれと	1051
茶湯すゝめん	1054
茶湯はじめ	314
咄更行	187
歯のぬけし	14

歯のぬけて	995
はゝ木々の	202
蛤の	31
腸に	982
春かぜの	312
春風や	
妹が手業の	445
杭にたゞよふ	1038
西大名の	825
軒に糸まく	518
箱の口はる	350
童遊びの	489
春くれて	1030
春雨や	
小路／＼の	116
こゝろに煙る	818
芝居崩れの	559
投壺見に来る	471
膝立直す	547
眼鏡に曇る	475
夕くれかけて	643
弓の弦さす	233
春の風	642

春の霜	291	火桶だいて	一夜く	布施にひく	768
春の情	976	片寝がちなり	人をして	二ツ有	1017
春の月	136	心千里を	雛形の	仏名や	900
春の水		火桶作る	日斜に	筆結ふや	304
榎の株に	746	引縄に	魚釣人の	船岡や	517
七文字負る	869	引のこす	小倉堤を	舷に	249
葱洗ふ香の	679	ひぐらしや	日の入や	舟造る	413
春の山	998	雨水つかふ	日の暮て	文月や	875
春の雪	544	鳥居のおくの	日の筋や	冬がれや	372
春の宵		髭有らば	百なりの	石の鳥居に	
ある人ひとり	128	榊の	ひる顔や	石切山の	74
暈にこぼす	723	ひじき藻に	昼からの	椽に仰向く	553
春の夜や		下垂の	昼中に	人なつかしう	847
しばし眠りて	747	人ごとく	拾はれし	冬木立	
ふる歌かたる	173	人寒く	枇杷の花	うき世の外	803
風情をつくす	81	人先に	火を焚ぬ	さはらぬ神に	948
春待や	743	人更に	ふ	冬籠	
ひ		一すぢに	鯉くはぬ	唇うごく	913
火うつりや	496	人既	ふりして母に	心に隙は	736
稗くふて	212	一とこの	人と富士見ぬ	人そしるべき	935
ひえの山	273	人うとき	福藁や	破らじと思ふ	711
		人の為に	布薩して	冬の梅	179
				冬の日の	237

火串さすや	子子の	髻髻と		片々は	へんくゑの			分別の	古畑や	古郷や	ぶりくや	振袖の	加茂に集ふと	かすみが中の	冬一日	竹のふしみの	焦して戻す	おもひ忘れし	命を撫る	冬の夜や	冬の日や
534	121	533		67	545			939	483	214	5	866	364	160		159	241	731	755		508
又其后	舛飲や	先たのむ	交りや	正成が	曲ものも	まいらする		梵論や	ほんのりと	盆の月	よるべの水の	待夜ほぐれて	鳴や千筋の	求食すがたは	ある夜疇を	ほとゝぎす	仏物を	牡丹ちりて	牡丹咲や	星ふけて	干松露や
702	256	613	76	972	32	762		384	221	940	537	725	63	補 4	144		923	288	649	712	1037
水鳥の	水草や	水粥に	みずいらす	みじか夜を	寄居虫の	一時づゝの		短夜の	見えぬものは	三井寺の			万年の	万歳や	待宵や	細引こゑや	蛤焼や	白張かすむ	松原に	松の露に	松とりて
											み										
996	299	992	195	691	873		1067	10	721			967	524	607	454	387	523		385	874	440
		むら雨に	胸あはぬ	虫ぼしや	虫撰ん	麦打や	迎火や	むかひあふ			海松ふさの	宮人の	聾の	簀むしは	三布蒲団	簀売や	箕にはせる	水無月や	三ツ山を	味噌水に	空飛ぶ雲の
									む												
689	572	171	666	346	156	18				257	192	1062	36	420	89	91	66	269	75	1031	710

名月を	我白骨の	我とし隠す	帆船が上の	ひとり観じて	西へ落ても	鉄牛しばし	かけゆくものは	更で居のこる	今宵雨夜の	うき世に曇る	うき世にとなる	貧乏神は	名月や	め		室町や	室君の	むらしぐれ	日吉祭の	人立さわぐ	寺は桂の	むら雨や
907	154	589	332	388	108	943	769	1061	168	770	707	637				485	374	46	296	191	539	

門番に	もろくの	唐土の	桃山や	紅葉照や	鶚の鮒や	はしばみ盛よ	ものゝ葉に	ものたらぬ	戻りなき	餅腹や	餅花に	麦の穂くもる	人も遊ばぬ	木母寺や	目代に	も		面扶持を	目に遠く	めしもりの	めしにたく	目ざむれば
439	548	675	905	310	186	626		119	812	864	1015	663	422		1039			919	817	882	813	934

矢を負し	遣羽子や	やゝもすれば	山深し	麦まきつけて	日ぐれて迷ふ	かゝしを赤き	山畑や	山萩の	山井や	やま鳥の	山寺や	山寺に	山ざくら	山がらす	やぶさめの	養父入を	八の巻	安らひや	厄仏	や	
264	587	44	594	17	1057	101		366	398	210	132	355	926	397	105	270	962	510	178		

灰に突こむ	雪どけや	低しとおもふ	女の運ぶ	雪解て	雪霜に	雪幸	雪車	雪翁や	庭に寝てゐる	俄ごゝろの	白き風吹く	夕立や	ゆふだちに	うしろの山は	あふとねふくの	夕蟬や	夕しぐれ	夕ぐれや	夕がほを	夕がほや	ゆ	
927		928	1010		38	1056	742	47	519	660	373		246	766	386		4	1027	378	339		

勤て至る	毛ぬきにかゝる	行年や	行雁や	行秋や	雪わけて	雪仏	大名過る	喰もの探す	雪降や	雪の柳	ゆきの窓	窓に物書く	隣へ戻す	雪の日や	雪の駒	野中の杭に	遠里小野を	雪の雁	雪ながら	雪となる	よし野をくだる	藪の中なる
994	474		520	498	1014	862	737	733		951	717	914	716		952	295	293		287	1026	759	135

世は都	世の中は	世のさまや	世にふるも	世並よく	よしみねも	吉野川	枕をよけて	嘶し相手も	夜しぐれや	夜ざくらや	夜桜に	横雲に	よく肥て	酔ざめや	酔ざめの	よ	ゆるさるゝ	夢かとお	弓になる	弓提て	湯の山や
177	265	402	946	494	1071	924	915	1006		824	648	208	638	336	814		845	903	80	634	85

是も古風の	市にはさかる	炬びらきや	六骨の	六原の	道に煩ふ	富士の白きも	葉広の桜	葛の松原	六月や	六月の	朗詠の	ろ	龍灯も	龍灯の	利休いまだ	り	もの狂はしき	筆を血になす	夜の花	夜や寒し
936	323		1020	960	342	3	146	467		694	補 6		599	392	974		430	131		620

我ふるし
我死ば
我老ぬ
我いまだ
鰐の口
涉川や
綿弓の
忘ぐさの
分前の
分入ば
若水や
我が問はゞ
我父の
我魂を
我袖に
我さかと
我影や
我庵の
我あるは
わ

720 254 1009 808 904 1035 506 1053 745 125 600 706 557 695 985 455 180 50 1034

おわりに

近世後期の俳諧は、芭蕉を顕彰し、それに繋がる俳諧が顕著となる。その繋がる状況は様々で今後の考察が必要であるが、これを私に「芭蕉顕彰俳諧」と称する。その前段階において、蝶夢らを中心として展開した義仲寺の「時雨会」、洛東山双林寺の「墨直し会」（蝶夢主催は明和二年からの六年間）などの芭蕉顕彰事業と運動がある。これを基として芭蕉顕彰俳諧は成り立つと考えているが、この具体的な様相は洛東山における「花供養会」と「二条家俳諧」を考証することによって明らかになると推察される。本冊で取り上げた重厚の俳諧は、蝶夢を助けて次世代の芭蕉顕彰俳諧へと繋ぐ活動である。京都の落柿舎再興を出発点として、西は筑前周辺、東は江戸、陸奥周辺へと出向いて芭蕉顕彰活動を展開し、義仲寺看主を終点とする。終生、芭蕉と落柿舎再興を契機にする去来とを軸にした俳諧活動であった。本冊に付した地域別主要俳人の索引からは、各地に展開した俳諧活動の一端が知られる。

蝶夢と蕪村は、京都にあつて共に芭蕉を慕ったが、その方向にあつて各々独自に展開するという田中道雄著「蕉風復興運動の二潮流」（蕉風復興運動と蕪村、岩波書店、二〇〇〇年）の指摘がある。しかし、重厚は、蕪村の高弟高井几董、下村春坡、宮紫暁らと親しく交わる。また、周辺の三宅嘯山、高桑闌更らとも交わる。これは京都俳壇における蕉門の勢力が、時代とともに貞門や淡々門よりも増大していく中で、芭蕉を慕う方向が「蕉風復興」から「芭蕉顕彰」へと変遷した結果ではなかったかと考えている。視点を変えれば、近世後期には芭蕉を越える俳諧の存在がなかったということでもある。俳諧は、江戸期の経済活動の隆盛、教育の普及、出版の技術的な向上などにより、爆発的な俳諧人口の増加により裾野を広げ、社会的な役割の一端を担うまでに成長するが、一方で後に「月並」と評される質的な低下を招いた。

芭蕉が神に祀り上げられたのは、百回忌の寛政五年以降で、次のものがある。

・寛政 五年 — 芭蕉百回忌に、神祇白川家から「桃青霊神」の神号が贈られる。

・文化 三年 — 朝廷から「飛音明神」の神号が贈られる。（明治書院『俳句講座』1、市橋鐸「天保俳諧史」、ただし、
出典未詳）

・天保十四年 — 芭蕉百五十回忌に二条家の幹旋で神祇官領家の吉田家から「花本大明神」の神号が贈られる。
重厚のかかわったものでは、寛政五年の筑紫高良山社内の芭蕉霊神社碑の銘を記したことがある。

筑紫高羅山社内芭蕉靈神の社碑銘

歌は出雲八重垣 連歌は新破理都久波 俳諧は筑紫の高良山に芭蕉靈神ましくて風雅の実を聞給ふ

寛政百回忌の日 栗津野の重厚謹誌

(文化四年十一月十四日奥、南吟著、黄昏随筆)

これらの芭蕉偶像が打破されるには、凡そ百五十年の歳月を必要とするのであるが、それまでは強かに息衝くのである。ところで、京都にあつて展開する近世後期の蕉風俳諧は、義仲寺の時雨会と並んで、洛東山双林寺の芭蕉追善の墨直し会の俳諧がある。正徳元(一七一)年に各務支考が催行したのが始まりで、以後これを主催するのは主として美濃派の連中で、この興行に合わせて上京した。蝶夢は明和二(一七六五)年から六年間、京都にあつて墨直し会を主催したが、閉鎖的な美濃派の反感を買いここを離れた。蝶夢は京都における蕉風俳諧の展開の場を強く望んでいただけに残念なことであつたろう。貞門、淡々派が依然として勢力を持つ京都俳壇にあつて、墨直し会による蕉風の影響力はあまり強くなく、京都における蕉風俳諧もやはり活発な動きがあるとは言えない状況であつた。

やがて、天明六(一七八六)年に始まる高桑闌更建立の双林寺芭蕉堂における花供養会は、全国に波及していく。それに伴つて京都俳壇における蕉風俳諧は盛んとなる。闌更は加賀の人であるが、各地を巡り京都にたどり着く。初めは、蝶夢に従つて義仲寺の時雨会や双林寺の墨直し会に参会するが、やがて自ら花供養会を主催するに至る。さらには、寛政三年より二条家俳諧宗匠にもなる。これらは後に、高弟の成田蒼虬に至つていよいよ盛んとなり、京都俳壇の蕉風の勢いを決定付けることになる。彼は、寛政十一年より芭蕉堂主、文化八年より二条家俳諧宗匠となる。京都俳壇における芭蕉顕彰俳諧の担い手である。

重厚は義仲寺にあつて時雨会を催行しながら、花供養会にも稀に参会している。二条家俳諧宗匠としても招かれるが、一座したことはなかった。しかし、京都において花供養会と二条家俳諧とが並んで展開するのは、重厚の晩年、没後であつた。蝶夢も蕪村も没後の化政期以降のことである。

参考文献

- 一 『岩手俳諧史』 小林文夫著、新俳句社・昭和三二（一九五七）年、万葉堂出版・昭和五三（一九七八）年
- 一 『蝶夢と落柿舎』 高木蒼梧著、落柿舎保存会、昭和三九（一九六四）年初版
- 一 『義仲寺と蝶夢』 高木蒼梧著、義仲寺史蹟保存会、昭和四七（一九七二）年
- 一 『春坡の資料と研究』 下村をさむ著、笠間書院、昭和五三（一九七八）年
- 一 『近世九州俳壇史の研究』 大内初夫著、九州大学出版会、昭和五八（一九八三）年
- 一 『夏目成美全集』 石川真弘著、和泉書院、昭和五八（一九八三）年
- 一 『増訂版 湖白庵諸九全集』 大内初夫他編著、和泉書院、昭和六一（一九八六）年
- 一 『時雨会集成』 大内初夫監修、義仲寺編、義仲寺・落柿舎、平成五（一九九三）年
- 一 『几董発句全集』 浅見美智子編校、八木書店、平成九（一九九七）年
- 一 『京都盛岡往ったり来たり』 後藤直著、岩手自分史発行センター、平成一三（二〇〇一）年
- 一 『石に刻まれた芭蕉』 弘中孝著、智書房、平成一六（二〇〇四）年
- 一 『増補改訂 加舎白雄全集』 矢羽勝幸編著、国文社、平成二〇（二〇〇八）年
- 一 『俳人榎本星布 研究と資料』 矢羽勝幸著、ブイツーソリューション、平成二四（二〇一三）年
- 一 『蝶夢全集』 田中道雄、田坂英俊、中森康之編著、和泉書院、平成二五（二〇一三）年
- 一 『諸国翁墳記』 ―翻刻と検討― 田坂英俊著、慶照寺、平成二六（二〇一四）年
- 一 『備後俳人越智古声略年譜』 田坂英俊著、慶照寺、令和三（二〇二二）年
- 一 『蝶夢全集 続』 田中道雄、田坂英俊、玉城司、中森康之、伊藤善隆編著、和泉書院、令和四（二〇二二）年
- 一 『芭蕉庵燕村碑 金福寺参詣記』 藤田真一、富田志津子編、和泉書院、令和四（二〇二二）年
- ◇ ◇ ◇
- 一 『蝶夢覚書』 小林文夫著、「連歌俳諧研究」第一一〇号、昭和三一（一九五六）年
- 一 『落柿舎重厚覚書』 竹内千代子著、「落柿舎」一〇〇～一〇八号、昭和五九（一九八四）年三月～同六〇（一九八五）年六月

- 一「天明六年八月二十一日付古声宛重厚書簡」竹内千代子著、大阪俳文学研究会「会報」第一八号、昭和五九（一九八四）年
- 一「巨石宛重厚書簡」竹内千代子著、京都俳文学研究会会誌「俳文学研究」第三号、昭和六〇（一九八五）年
- 一「露光宛重厚書簡」竹内千代子著、京都俳文学研究会会誌「俳文学研究」第五号、昭和六一（一九八六）年
- 一「井上重厚年譜稿」竹内千代子著、関西大学「國文學」第六九号、平成四（一九九二）年
- 一「重厚の江戸移住」竹内千代子著、「連歌俳諧研究」第八五号、平成五（一九九三）年
- 一「無名庵八世重厚の書状発見前（後）」乾 憲雄著、「義仲寺」第二七八、二七九号、平成一一（一九九九）年
- 一「正月五日付花雪宛重厚書簡」竹内千代子著、京都俳文学研究会会誌「俳文学研究」第三六号、平成二三（二〇〇一）年
- 一「千代倉家日記抄³⁶」他、森川昭編、「帝京日本文化論集15」他、平成二〇（二〇〇八）年
- 一「落柿舎三世山本泰溪と去来百回忌」竹内千代子著、京都俳文学研究会会誌「俳文学研究」第六七号、平成二九（二〇一七）年
- 一「重厚と奥羽行」竹内千代子著、京都俳文学研究会会誌「俳文学研究」第八〇号、令和五（二〇二三）年
- 一「重厚の奥羽行」竹内千代子著、龍谷大学「國文學論叢」第六八号、令和六年（二〇二四）年

図版一覽

- | | | |
|------|----------------|--------------------|
| 図1 | 去来句碑 | 竹内千代子撮影 |
| 図2・3 | 重厚写『三冊子』 | 沖森直三郎氏教示 |
| 図4 | 正月十五日付巨石宛重厚書簡 | 大阪公立大学中百舌鳥図書館山崎文庫蔵 |
| 図5 | 六月五日付古声宛重厚書簡 | 田坂英俊氏蔵 |
| 図6 | 八月二十一日付古声宛重厚書簡 | 寺地文人氏蔵 |
| 図7 | 正月五日付花雪宛重厚書簡 | 雲英末雄氏教示 |
| 図8 | 八月十七日付露光宛重厚書簡 | 大谷篤蔵氏教示 |
| 図9 | 五月五日付朔順宛重厚書簡 | 田坂英俊氏蔵 |
| 図10 | 八月十九日付古声宛重厚書簡 | 田坂英俊氏蔵 |
| 図11 | 六月十九日付春坡宛重厚書簡 | 乾 憲雄氏教示 |
| 図12 | 重厚墓 | 竹内千代子撮影 |

付記

一 本稿を成すに当たっては、田中道雄先生、故乾裕幸先生、故櫻井武次郎先生、田坂英俊氏をはじめ多くの先生方の御教示を得ました。また、国書データベース及び、天理大学天理図書館綿屋文庫、豊橋市中央図書館をはじめ各地の図書館の学恩を得ました。記して深謝申し上げます。

一 本稿は、科学研究費助成事業・基盤研究（C）「近世後期京都の芭蕉顕彰俳諧の研究」（課題番号 JP20K00353）の成果の一部である。

一 本稿は、立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 国際共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」共同研究課題「花供養と芭蕉顕彰俳諧の研究」（代表・竹内千代子）の一部である。なお、成果の一部はWEB公開中である。

<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/thml/hanakuyo/index.html>

表紙

重厚「名月や」肖像画重厚讃、乾 憲雄氏教示

裏表紙

右上 『俳諧百家仙』寛政八年刊、舞鶴市郷土資料館糸井文庫蔵

左上 昭和中期の落柿舎、『落柿舎のしるべ』より転載

右下 昭和中期の義仲寺、『義仲寺と蝶夢』より転載

左下 『俳諧八僊歌』寛政七年序、麗沢大学附属図書館蔵

落柿舎
義仲寺 井上重厚年譜 発句稿

発行日 令和六年二月三日

編著者 竹内千代子

印刷 株式会社 昭英社

〒六〇〇八二九

京都市下京区五条通河原町西入本塩竈町五五八

電話 〇七五―三五一一八一



落柿舎



名月や浮世に曇る人の影 重厚



はつ夢や見るものならば親の顔 重厚



義仲寺